

研究ノート		
三重県中部におけるカヤネズミ <i>Micromys minutus</i> の繁殖習性に関する若干の知見	1	田村香里・佐野 明
三重県総合博物館ミュージアムフィールドの維管束植物	5	森田奈菜・大島康宏
三重県総合博物館ミュージアムフィールドおよび周辺ため池における鳥類相	17	稲垣玲弥
2020年に伊勢湾岸に死亡漂着したアカウミガメ <i>Caretta caretta</i> の消化管内容物について	29	米川弥寿代・田村香里
三重県における雑煮の地域的特色 —「お雑煮プロジェクト」のデータ分析を通して—	35	門口実代・福田良彦
「お雑煮プロジェクト2」多気町での調査から見えてくること	45	福田良彦・田村香里
雲出川中流域の中世寺院跡と石造宝塔	64 (21)	伊藤裕偉
紀州本藩領の年貢徴租法と動向 —奥熊野地域を事例に—	84 (1)	藤谷 彰

March, 2023

三重県総合博物館

MieMu: Mie Prefectural Museum, Japan

研究ノート

三重県中部におけるカヤネズミ *Micromys minutus* の繁殖習性に関する若干の知見

Some findings on the reproductive habits of the harvest mouse, *Micromys minutus*, in central Mie Prefecture, Japan

田村香里¹⁾・佐野 明²⁾

¹⁾ 〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060 三重県総合博物館

²⁾ 〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060 三重県総合博物館 研究協力者

キーワード：ネズミ科，麦畑，球巢，営巣習性，農地管理

(2022年9月22日 受付)

Kaori TAMURA* and Akira SANO

^{1,2)} Mie Prefectural Museum

Isshinden-kouzubeta 3060, Tsu, Mie 514-0061, Japan

*Corresponding author: tamurk02@pref.mie.lg.jp

Abstract

Sixteen spherical nests of the harvest mouse, *Micromys minutus*, were found in six spring-grown wheat fields in central Mie Prefecture. This proves that the harvest mice in this area breed in spring. Additionally, four cases of infants in nests made with rice or reed leaves were confirmed also in summer.

Key words: Muridae, wheat field, spherical nest, nesting habit, farmland management

はじめに

カヤネズミ *Micromys minutus* はネズミ目ネズミ科に属する小型のネズミで，国内では本州中部以南，四国および九州に分布し (Iwasa, 2015)，三重県では海岸付近から標高 1200 m を超える山地まで広く分布する (清水, 2014)。

本種は春から初冬にかけて，イネ科植物等に植物の葉を絡み合わせて球状の巢 (球巢) を作り，その中で出産，哺育を行う (白石, 1962, 1965, 1969; 畠・夏原, 2006; Hata, 2011)。本種の繁殖サイクルについては，春季と秋季にピークを迎える 2 山型であり，夏季の繁殖は稀とする記述もある (金子, 2005)。本州では 5 ~ 12 月まで継続的に出産が見られるという報告もあ

り (白石, 1965)，京都府南部の河川敷で実施された調査においても，5 月上旬から 9 月末まで営巣活動が継続的に行われたことが報告されている (澤邊ほか, 2005)。

三重県における本種の確認記録を整理した資料 (清水, 2014) によれば，球巢発見事例 145 例の約半数にあたる 67 例が 8 月に集中しており，そのほとんどが水稻への営巣である。このことは，水稻の生育過程から考えて，三重県では盛夏にもさかんに繁殖していることを示唆する。

一方，三重県では 4, 5 月の球巢確認記録はきわめて少なく (清水, 2014)，春季の確かな繁殖記録は，2008 年 5 月 1 日に亀山市の河川敷で球巢と巢内の幼

獣が確認された例（清水・富田，2010）があるにすぎない。

今回、筆者らは2022年に調査を実施したところ、三重県中部の複数のコムギ畑（以下、麦畑）において、本種の球巣を確認した。これらのうち、少なくとも8例は5月以前に繁殖した根拠となるものである。さらに、津市、多気町および志摩市の水田や休耕地、河川敷において、県内での確認例が少ない球巣内の幼獣を確認したので、あわせて報告する。

本文に先立ち、多気町の麦畑において、多くの球巣を発見し、筆者らに情報を提供して下さった三重県総合博物館ミュージアムパートナーの大久保律子氏、大久保一成氏、球巣内の幼獣の確認記録をご教示下さった三重昆虫談話会の乙部 宏氏と三重県総合博物館ミュージアムパートナーの中山 惇氏、本稿に対し、貴重なご助言を賜った東京女子大学の石井信夫名誉教授に深謝する。

麦畑における球巣の確認記録

三重県中部の麦畑におけるカヤネズミの球巣の確認場所を図1に、確認日や営巣位置等の詳細を表1に示す。球巣が確認されたのは、多気町、松阪市および津市の6カ所の麦畑で、刈り取り前の5月下旬から6月中旬に計16個の球巣が確認された（図2）。巣が作られた植物は、1例を除き、コムギで、1例は畔に自生するスギナであった。いずれの巣でも幼獣は確認できなかった。

この時期、コムギは収穫直前であり、その草高は75～110 cm程度であったが、球巣の下端の地上高は17～80 cm（平均35.1 cm）であり、多くの場合、畔からの発見は非常に困難であった。今回の確認例のうち、多気町での11例（No.1-11）は刈り取り機による収穫作業時の発見であり、松阪市木の郷町の2例

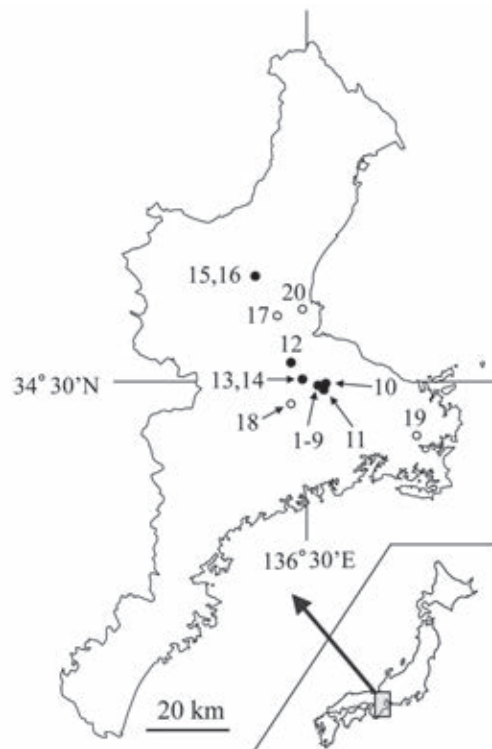


図1. カヤネズミの球巣確認地点の位置（三重県）。
●、カヤネズミの球巣が確認されたコムギ畑；
○、幼獣が確認された球巣の確認地点。
（番号は表1および本文中の地点番号に対応）。

表1. 三重県中部のコムギ畑で確認されたカヤネズミの球巣（2022年）。

No.	確認場所	確認日	草高	球巣の高さ*	球巣径
1	多気町五佐奈	5月27日	45#	17	8
2	多気町五佐奈	5月27日	95	51	—**
3	多気町五佐奈	5月28日	U	U	8
4	多気町五佐奈	5月29日	U	U	8
5	多気町五佐奈	5月29日	U	U	8
6	多気町五佐奈	5月29日	U	U	9
7	多気町五佐奈	5月30日	95	42	10
8	多気町五佐奈	5月30日	U	U	9
9	多気町五佐奈	6月2日	U	U	8
10	多気町土羽	6月4日	110	80	8
11	多気町四神田	6月13日	U	U	7
12	松阪市伊勢寺町	6月2日	80	26	9
13	松阪市木の郷町	6月2日	75	30	10
14	松阪市木の郷町	6月2日	75	30	11
15	津市美里町穴倉	6月3日	75	19	7
16	津市美里町穴倉	6月3日	75	21	9

番号は図1に対応する。単位はいずれもcm。U:刈り取り時に確認されたため不明。

*:球巣の下端の地上高。**:未完成の巣であり、計測不能。

#:コムギ畑の畔に自生するスギナに形成された巣。

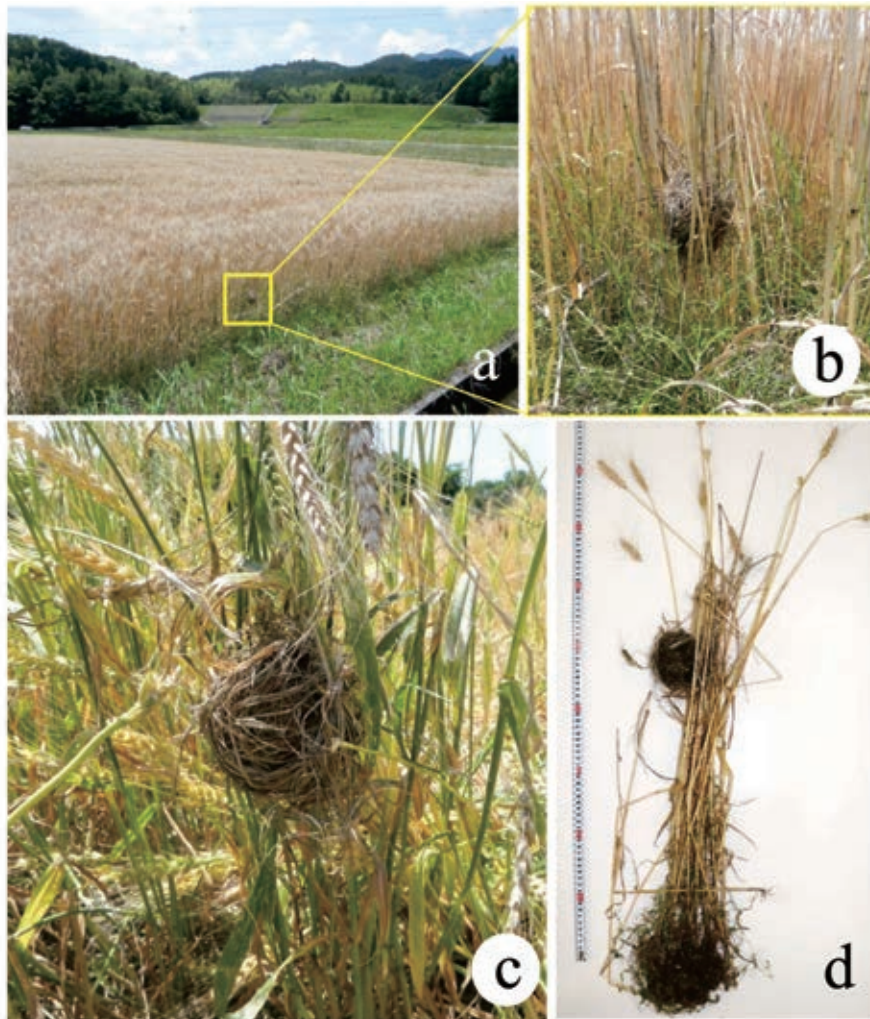


図2. 三重県中部のコムギ畑で確認されたカヤネズミの球巢。
 a, b, 松阪市伊勢寺町で確認された球巢；c, 松阪市木の郷町で確認された球巢；
 d, 多気町五佐奈で採取された球巢。

(No.13-14) はイノシシによって倒された株の間で見つかったものである。また、それ以外の3例は畦や公道に近い周縁部の株に作られた巣であった。春季の営巣位置が低いことについては、白石(1969)も指摘しており、このような習性が春季の営巣確認例が少ない一因かもしれない。

三重県中部において、秋に播種されたコムギは通常、3月中旬以降に茎が伸び始め、5月下旬から6月上旬に刈り取られる。このため、いずれの事例も春以降、5月中旬までに営巣されたものと考えられ、この地域でも春季にカヤネズミが繁殖していることが確認された。

三重県中部の本種の生息地には、麦畑と水田が混在する場所が広く見られるが(図3)、生育期の異なる2種のイネ科作物が栽培される場所では、春から初秋にかけて、より長期間、営巣に適した環境が提供され、多数回の繁殖が可能になると思われる。

球巢内での幼獣の確認記録

三重県において、球巢の確認記録は多いが、巢内での幼獣確認例は少ない。清水(2014)によれば、いなべ市(1979年10月14日, 1980年11月30日)、桑名市(1999年6月15日)、亀山市(2008年5月1日)、津市(1986年9月16日)、松阪市(2000年11月13日, 2010年8月21日)および南伊勢町(1998年10月11日)の8例に過ぎない。筆者らはこれまでに下記の2例を確認し、さらに2例の情報提供を得た。なお、各地点の番号は図1に対応する。

17. 津市一志町田尻, 2003年9月9日, 水田, 2子.
18. 多気町色太, 2021年8月26日, 水田, 4子.
19. 志摩市磯部町下之郷, 2020年8月13日, 休耕田, 1子, 2子(2巢)(中山 惇, 私信).
20. 津市雲出本郷町, 2021年8月3日. 河川敷, 2子(乙部 宏, 私信; 図4a).

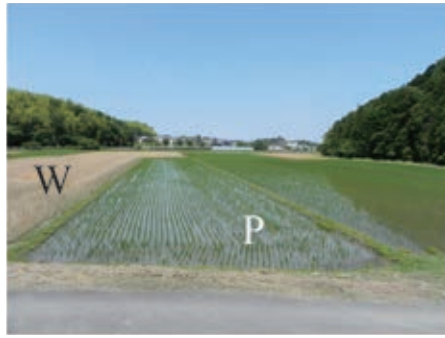


図3. 松阪市木の郷町のカヤネズミ生息地 (2022年6月2日撮影).
P, 水田; W, 麦畑. 水田と麦畑が混在する.

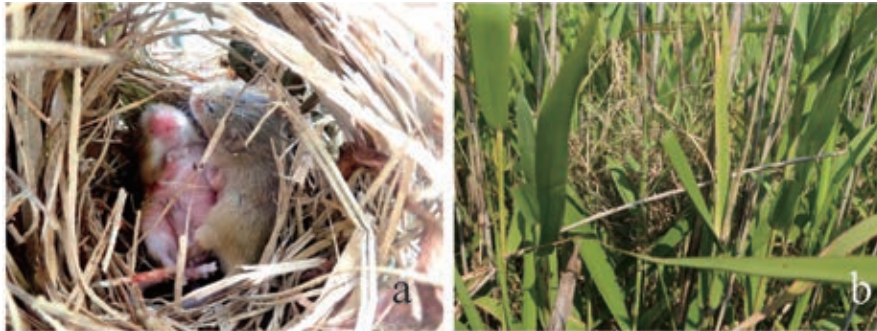


図4. 津市の河川敷および湿地において夏季に確認された球巣と巣内の幼獣.

a, 雲出本郷町の河川敷で確認された巣内の幼獣 (2021年8月3日, 乙部 宏 撮影); b, 白塚町の湿地で観察された未完成の巣 (2021年6月24日, 撮影). その後, さらに造巣が進んだことを確認した.

さらに, 筆者らは津市白塚町の海岸近くのヨシ原において, 2021年6月24日に未完成の巣を見つけ, 同月27日にはさらに造巣が進んだことを確認した (図4b). 本種の繁殖活動は夏季には稀とする記述もあるが (金子, 2005), これらの記録は, 三重県中部においては, 夏季にも繁殖していることを改めて示すものであり, 白石 (1965) や澤邊ほか (2005) の報告とも一致する.

以上のように, 三重県中部において, 春季および夏季にカヤネズミが繁殖している根拠となる複数の事例を確認した. 前述のとおり, 県内では10~11月の幼獣確認記録もあり, 本種は春季から晩秋にかけて継続的に繁殖している可能性が高い.

引用文献

Hata, S. 2011. Nesting characteristics of harvest mice (*Micromys minutus*) in three types of Japanese grasslands with different inundation frequencies. *Mammal Study*, 36: 49-53.

畠 佐代子・夏原由博. 2006. 滋賀県におけるカヤネズミの生息適地要因. *ランドスケープ研究*, 69: 549-552.

Iwasa, M.A. 2015. *Micromys minutus* (Pallas, 1771). *In*: Ohdachi, S.D., Ishibashi, Y., Iwasa, M.A., Fukui, D. and Saitoh, T.(eds.). *The Wild Mammals of Japan, Second Edition*. pp. 170-171. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.

金子之史. 2005. 齧歯目 Rodentia ネズミ科. *In*: 日本の哺乳類 改訂版 (阿部 永, 監), pp. 125-144. 東海大学出版会, 秦野.

澤邊久美子・畠 佐代子・夏原由博. 2005. 堤防植生の刈り取りがカヤネズミの営巣に与える影響. *ランドスケープ研究*, 68: 571-574.

清水善吉. 2014. 三重県におけるカヤネズミの分布. *三重自然誌*, 14: 76-82.

清水善吉・富田靖男. 2010. 亀山市の哺乳類. *In*: 亀山市 (編), *亀山市史 自然編*, pp. 499-528. 亀山市, 亀山.

白石 哲. 1962. カヤネズミの繁殖習性 I 出産期と産仔数. *九州大学農学部学芸雑誌*, 20: 87-94+2 pls.

白石 哲. 1965. 日本の哺乳類2 齧歯目カヤネズミ属. *哺乳類科学*, 5: 1-15.

白石 哲. 1969. 九州産カヤネズミの営巣習性. *林業試験場研究報告*, 220: 1-10+4 pls.

研究ノート

三重県総合博物館ミュージアムフィールドの維管束植物

The vascular plant flora in the Museum Field of Mie Prefectural Museum, Mie, Japan

森田奈菜・大島康宏

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060 三重県総合博物館

キーワード：チェックリスト，津市，植生

(2022年10月31日 受付)

Nana MORITA * and Yasuhiro OHSHIMA

Mie Prefectural Museum, 3060 Isshinden-kouzubeta, Tsu, Mie 514-0061, Japan

*Corresponding author: morim01@pref.mie.lg.jp

Abstract

From 2014 to 2022, 426 species of vascular plants were recorded in the museum field of Mie Prefectural Museum. Of these, 155 species are plants that were planted. A catalog of recorded vascular plants was created.

Key words: check list, Tsu-city, vegetation

はじめに

三重県総合博物館（以下、当館）は2014年4月に三重県津市に開館した。総敷地面積は38,884㎡で、建物を囲む緑地をミュージアムフィールドと称している。ミュージアムフィールド全体の面積は約28,400㎡で、この中には野外展示に位置付けている「観察の林」（約18,800㎡）および「交流の広場」（約4,370㎡）がある（残り約5,230㎡は駐車場ゾーン）。

観察の林にはシイの林（常緑樹林）、アベマキの林（落葉樹林）、アカマツの林があり、交流の広場には、シバを植栽した広場を中心として、人が生活に利用する樹木を植栽した「木のずかん」と称するゾーンや、モウソウチク林がある。このようにミュージアムフィールドには、路傍から草地、落葉広葉樹林、常緑広葉樹林まで、植生や光条件などさまざまな環境が存在し、観察会やフィールドワークなどの博物館活動で活用している。

ミュージアムフィールドにおける調査研究例とし

て、筆者らが実施している県民参加型の昆虫調査「みんなでつくろう！ミュージアムフィールドの実物昆虫図鑑」がある。これは1ヶ月に2回程度、ミュージアムフィールド全体を歩き、観察できたチョウ類を環境ごとに個体数を記録する、トランセクト法に基づいたモニタリング調査である（大島, 2019; 大島・森田, 2022）。本報告の目録作成に関する調査は、この活動の一環として実施してきた。

当該地における植物に関する調査は、当館の建設以前に2件実施されている。1件は1995年から1996年にかけての、三重県センター博物館（仮称）の整備にともなう自然環境調査（山本ほか, 1996）であり、もう1件は2009年の新県立博物館予定地自然環境調査（日本設計・環境科学, 2010）である。また当館の開館後は、観察の林の樹木を対象として、三重大学の学生による研究にも活用されている。今回は、開館後のミュージアムフィールド全体を対象とした維管束植物の目録を、今後の調査研究に資する基礎資料として報告する。

ミュージアムフィールドの植生

里山残存林である観察の林の主要構成種は、高木層にツブラジイ、コナラ、アベマキなど、亜高木層にシロダモ、カクレミノなど、低木層にミミズバイ、ネズミモチ、ヒサカキなど、草本層にネザサ、ベニシダ、ヤブミョウガなどがある。また交流の広場の植栽には、ドンダリのなかま（アカガシ、ウバメガシなど）、薬になる植物（ニッケイ、キハダなど）、布を染める植物（クチナシ、シャリンバイなど）、くらしの中の植物（ミツマタ、コウゾなど）、マツヤスギのなかま（スギ、モミなど）、虫があつまる植物（カラタチ、マグワなど）、サクラのなかま（カンヒザクラ、エドヒガンなど）、ツツジのなかま（アカヤシオ、シロヤシオなど）などがある。このほかにモウソウチクの残置林がある。

目録

この目録は、筆者らが2014年4月から2022年10月までに採集または生育を記録した維管束植物について作成したものである。範囲はミュージアムフィールド全体で、駐車場ゾーンに生育する植物も対象とし、116科426種を記録した。このうち、植栽された植物は59科155種で、2022年10月現在ではすでに枯死し確認できない種もあるが、植栽の記録がある植物は目録に含めた。

目録には、植物種の学名および和名と、標本のあるものは資料番号を記した。これらの標本はすべて当館に収蔵している。科の配列、和名および学名は、「維管束植物和名チェックリスト ver. 1.10」(山ノ内ほか, 2019)に従った。和名に別名がある種で、植栽板に表記されるなど、別名が一般に広く認知されていると思われる種については、和名のあとに()で別名を記した。植栽した株がある場合には、備考欄に「栽」、植栽後に枯死し、2022年10月現在で確認できない場合には「滅」と記した。また、植栽板に表記されている種名とは異なる種であった場合、正しい種名の後に[]で植栽板の和名を記した。

植栽板の種名と異なる種について

植栽された植物のうち、植栽板に記された種名とは異なる種であることが判明した植物3種について、以下に詳細を述べる。

1. ソシンロウバイ（ロウバイ科, *Chimonanthus*

praecox (L.) Link f. *concolor* (Makino) Makino)

ロウバイ (*C. praecox* (L.) Link) として植栽されているが、花卉は全体が均一な淡黄色で、赤褐色にはならないことから、ソシンロウバイと判断した。ソシンロウバイも一般に「ロウバイ」と呼称されることや、納品時が花期でなかったことなどから、確認ができなかったものと推測する。

2. ハウチワカエデ（ムクロジ科, *Acer japonicum* Thunb.)

オオイタヤメイゲツ (*A. shirasawanum* Koidz.) として植栽されているが、花卉が濃紅色を呈することや葉の毛の様子から、ハウチワカエデと判断した。ハウチワカエデには「オオメイゲツ」や「メイゲツカエデ」の別名が知られており、これが取り違えの一因と推測する。

3. ミツバツツジ（ツツジ科, *Rhododendron dilatatum* Miq. var. *dilatatum*)

コバノミツバツツジ (*R. reticulatum* D. Don ex G. Don) として植栽されているが、花柄に腺毛があり粘ることから、ミツバツツジと判断した。

今後について

本目録の作成にあたり、ミュージアムフィールド全体の維管束植物を網羅するよう努めたが、除草作業との兼ね合いにより十分な植物体を得られず、同定にいたらなかった種がある。また、ホオズキ（ナス科, *Alkekengi officinarum* Moench var. *franchetii* (Mast.) R.J.Wang) やヒヤクニチソウ（キク科, *Zinnia elegans* Jacq.) など、当館に隣接する墓地の供花に由来すると推測できる植物の生育も確認した。さらに当館近隣の道端には、特定外来生物に指定されているオオキンケイギク（キク科, *Coreopsis lanceolata* L.) の生育を確認しており、今後ミュージアムフィールド内に侵入する可能性が高いと考えられる。このほか、樹木の生育による光環境の変化にともない、草本相も遷移すると予測できるため、今後も記録を継続する必要がある。

謝辞

植物種の同定に関して、シダ植物は宮崎弘規氏に、ササ・タケ類は支倉千賀子氏と東京大学総合研究博物館の池田博博士に、ほか種子植物は市川正人氏にご協力いただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。

引用文献

日本設計・環境科学. 2010. 新三重県立博物館予定地
自然環境調査報告書. 新県立博物館予定地自然環境
調査, 305pp. 三重県, 津.

大島康宏. 2019. 昆虫学で学ぶきっかけを ～三重県総
合博物館での取り組み～. 昆虫 (ニューシリーズ),
22(3): 106-121.

大島康宏・森田奈菜. 2022. 三重県総合博物館ミュー
ジウムフィールドにおけるチョウ類相 (昆虫綱;
チョウ類) について. 三重県総合博物館研究紀要, 8:

1-21.

山本和彦・山脇和也・加田勝敏. 1996. 三重県センター
博物館 (仮称) 建設予定地の植生および植物目録,
In: 三重県自然環境調査会 (編), pp. 7-20, 三重県
センター博物館 (仮称) 建設予定地自然調査報告書,
三重県自然環境調査会, 津.

山ノ内崇志・首藤光太郎・大澤剛士・米倉浩司・加藤
将・志賀 隆. 2019. 「維管束植物和名チェックリス
ト ver. 1.10」 ([https://gbif.jp/activities/checklist/
wamei_checklist_110](https://gbif.jp/activities/checklist/wamei_checklist_110))

目録

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
LYCOPHYTA			
LYCOPODIOPHYTA			
Lycopodiaceae			
<i>Lycopodiella cernua</i> (L.) Pic.Serm.	ミズスギ	P0101890, P0101891	
EUPHYLLOPHYTA			
MONILOPHYTA			
Equisetaceae			
<i>Equisetum arvense</i> L.	スギナ	P0101188, P0104041	
Marattiaceae			
<i>Angiopteris lygodiifolia</i> Rosenst.	リュウビンタイ		裁
Osmundaceae			
<i>Osmunda japonica</i> Thunb.	ゼンマイ	P0101923	
Gleicheniaceae			
<i>Dicranopteris linearis</i> (Burm.f.) Underw.	コシダ	P0101894	
Lygodiaceae			
<i>Lygodium japonicum</i> (Thunb.) Sw.	カニクサ	P0101884	
Lindsaeaceae			
<i>Odontosoria chinensis</i> (L.) J.Sm.	ホラシノブ	P0101889	
Pteridaceae			
<i>Pteris multifida</i> Poir.	イノモトソウ	P0101935	
Dennstaedtiaceae			
<i>Microlepia marginata</i> (Panzer ex Houtt.) C.Chr.	フモトシダ	P0104120, P0104121	
<i>Microlepia strigosa</i> (Thunb.) C.Presl	イシカグマ	P0101926, P0101927	
<i>Pteridium aquilinum</i> (L.) Kuhn subsp. <i>japonicum</i> (Nakai) A. et S.Löve	ワラビ	P0101405, P0101885	
Aspleniaceae			
<i>Asplenium incisum</i> Thunb.	トラノオシダ	P0104114	
Athyriaceae			
<i>Anisocampium niponicum</i> (Mett.) Y.C.Liu, W.L.Chiou et M.Kato	イヌワラビ	P0101931	
<i>Deparia japonica</i> (Thunb.) M.Kato	シケンダ	P0101888, P0101928	
<i>Deparia</i> × <i>musashiensis</i> (H.Ohba) Seriz.	ムサシシケンダ	P0101886	
Thelypteridaceae			
<i>Phegopteris decursivepinnata</i> (H.C.Hall) Fée☒	ゲジゲジシダ	P0101929	
<i>Thelypteris angustifrons</i> (Miq.) Ching	コハシゴシダ	P0101892	
<i>Thelypteris dentata</i> (Forsk.) E.P.St.John	イヌケホシダ	P0101924	
<i>Thelypteris glanduligera</i> (Kunze) Ching	ハシゴシダ	P0101893	
<i>helypteris pozoi</i> (Lag.) C.V.Morton subsp. <i>mollissima</i> (Fisch. ex Kunze) C.V.Morton	ミゾシダ	P0101933	
Dryopteridaceae			
<i>Cyrtomium falcatum</i> (L.f.) C.Presl subsp. <i>falcatum</i>	オニヤブソテツ	P0101925	
<i>Cyrtomium fortunei</i> J.Sm.	ヤブソテツ	P0101932	
<i>Dryopteris erythrosora</i> (D.C.Eaton) Kuntze	ベニシダ	P0101233, P0101934	
<i>Dryopteris lacera</i> (Thunb.) Kuntze	クマワラビ	P0101930	
Polypodiaceae			
<i>Selliguea hastata</i> (Thunb.) Fraser-Jenk.	ミツデウラボシ	P0101936	
GYMNOSPERMAE			
Pinaceae			
<i>Abies firma</i> Siebold et Zucc.	マツ科		裁
<i>Pinus densiflora</i> Siebold et Zucc.	アカマツ	P0104111	
<i>Picea jezoensis</i> (Siebold et Zucc.) Carrière var. <i>hondoensis</i> (Mayr) Rehder	トウヒ		裁, 減
<i>Pinus parviflora</i> Siebold et Zucc. var. <i>parviflora</i>	ヒメコマツ (ゴヨウマツ)	P0104109	裁
<i>Tsuga sieboldii</i> Carrière	ツガ	P0104108	裁
Podocarpaceae			
<i>Nageia nagi</i> (Thunb.) Kuntze	ナギ	P0104107	裁
<i>Podocarpus macrophyllus</i> (Thunb.) Sweet f. <i>spontaneus</i> H.Ohba et S.Akiyama	イヌマキ	P0101840	裁
Sciadopityaceae			
<i>Sciadopitys verticillata</i> (Thunb.) Siebold et Zucc.	コウヤマキ	P0104104	裁
Cupressaceae			
<i>Chamaecyparis obtusa</i> (Siebold et Zucc.) Endl.	ヒノキ	P0101420, P0104105	裁
<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.) D.Don	スギ	P0101791	裁
<i>Juniperus rigida</i> Siebold et Zucc.	ネズミサン		裁, 減
<i>Thujaopsis dolabrata</i> (L.f.) Siebold et Zucc. var. <i>dolabrata</i>	アスナロ	P0104106	裁
Taxaceae			
<i>Cephalotaxus harringtonia</i> (Knight ex Forbes) K.Koch var. <i>harringtonia</i>	イヌガヤ	P0104101	裁
<i>Taxus cuspidata</i> Siebold et Zucc.	イチイ		裁, 減
<i>Torreya nucifera</i> (L.) Siebold et Zucc.	カヤ	P0104102	裁
ANGIOSPERMAE			
Schisandraceae			
<i>Kadsura japonica</i> (L.) Dunal	マツブサ科	P0101841	
Saururaceae			
<i>Houttuynia cordata</i> Thunb.	ドクダミ	P0101078	
Aristolochiaceae			
	ウマノスズクサ科		

目録 (続き)

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
<i>Aristolochia debilis</i> Siebold et Zucc.	ウマノスズクサ	P0101943	裁
Magnoliaceae			
<i>Magnolia obovata</i> Thunb.	ホオノキ	P0101830□	裁
<i>Magnolia stellata</i> (Siebold et Zucc.) Maxim.	シデコブシ	P0104010	裁
Calycanthaceae			
<i>Chimonanthus praecox</i> (L.) Link f. <i>concolor</i> (Makino) Makino	ソシンロウバイ [ロウバイ]	P0101795	裁
Lauraceae			
<i>Cinnamomum camphora</i> (L.) J.Presl	クスノキ	P0101768	裁
<i>Cinnamomum sieboldii</i> Meisn.	ニッケイ	P0101769	裁
<i>Cinnamomum yabunikkei</i> H.Ohba	ヤブニッケイ	P0101770	
<i>Laurus nobilis</i> L.	ゲッケイジュ	P0104116	
<i>Lindera aggregata</i> (Sims) Kosterm.	テンダイウヤク	P0101767	裁
<i>Lindera umbellata</i> Thunb. var. <i>umbellata</i>	クロモジ	P0101977, P0101978	裁
<i>Litsea coreana</i> H.Lév.	カゴノキ	P0101976	裁
<i>Machilus thunbergii</i> Siebold et Zucc.	タブノキ	P0101404, P0101775	裁
<i>Neolitsea sericea</i> (Blume) Koidz.	シロダモ	P0104119	
Chloranthaceae			
<i>Sarcandra glabra</i> (Thunb.) Nakai	センリョウ	P0101845	裁
<i>Sarcandra glabra</i> (Thunb.) Nakai f. <i>flava</i> (Makino) Okuyama	キミノセンリョウ	P0101844	
Araceae			
<i>Pinellia ternata</i> (Thunb.) Breitenb.	カラスビシャク	P0101867	
Dioscoreaceae			
<i>Dioscorea japonica</i> Thunb.	ヤマノイモ	P0101858	
Smilacaceae			
<i>Smilax china</i> L.	サルトリイバラ	P0101842, P0101843	
Liliaceae			
<i>Lilium formosanum</i> Wallace	タカサゴユリ	P0101240, P0101357	
Orchidaceae			
<i>Bletilla striata</i> (Thunb.) Rchb.f.	シラン	P0101822	
<i>Cymbidium goeringii</i> (Rchb.f.) Rchb.f.	シュンラン	P0104140	
<i>Spiranthes sinensis</i> (Pers.) Ames var. <i>amoena</i> (M.Bieb.) H.Hara	ネジバナ	P0101418, P0101419	
Iridaceae			
<i>Iris japonica</i> Thunb.	シャガ		裁, 滅
<i>Sisyrinchium micranthum</i> Cav.	オオニワゼキショウ	P0101974	
<i>Sisyrinchium rosulatum</i> E.P.Bicknell	ニワゼキショウ	P0101972, P0101973	
<i>Sisyrinchium</i> sp.	セキショウ属の一種	P0101975	
<i>Crocasmia</i> × <i>crocasmiflora</i> (Lemoine) N.E.Br.	ヒメヒオウギズイセン	P0101808	
Amaryllidaceae			
<i>Lycoris radiata</i> (L'Hér.) Herb.	ヒガンバナ		裁
<i>Narcissus tazetta</i> L.	スイセン		裁
Asparagaceae			
<i>Convallaria majalis</i> L. var. <i>majalis</i>	ドイツスズラン		裁, 滅
<i>Liriope muscari</i> (Decne.) L.H.Bailey	ヤブラン	P0101794	裁
<i>Liriope muscari</i> (Decne.) L.H.Bailey f. <i>variegata</i> (L.H.Bailey) H.Hara	フリリヤブラン		裁, 滅
<i>Ophiopogon jaburan</i> (Siebold) Lodd.	ノシラン		裁, 滅
<i>Ophiopogon japonicus</i> (Thunb.) Ker Gawl.	ジャノヒゲ	P0101996, P0101997	裁
<i>Rohdea japonica</i> (Thunb.) Roth	オモト		
Arecaceae			
<i>Trachycarpus fortunei</i> (Hook.) H.Wendl.	シュロ	P0101793	
Commelinaceae			
<i>Commelina communis</i> L.	ツユクサ	P0101064, P0101119, P0101120	
<i>Pollia japonica</i> Thunb.	ヤブミョウガ	P0104144	
<i>Tradescantia flumiensis</i> Vell.	ノハカタカラクサ	P0104050	
<i>Tradescantia ohiensis</i> Raf.	ムラサキツユクサ	P0104049	
Typhaceae			
<i>Typha orientalis</i> C.Presl	コガマ	P0101819, P0101820	
Juncaceae			
<i>Juncus decipiens</i> (Buchenau) Nakai	イグサ	P0101366	
<i>Juncus tenuis</i> Willd.	クサイ	P0104040	
<i>Luzula capitata</i> (Miq.) Miq. ex Kom.	スズメノヤリ	P0104039	
Cyperaceae			
<i>Carex alopecuroides</i> D.Don ex Tilloch et Taylor var. <i>chlorostachya</i> C.B.Clarke	シラスゲ	P0101472	
<i>Carex gibba</i> Wahlenb.	マクサ	P0104062	
<i>Carex ischnostachya</i> Steud. var. <i>fastigiata</i> T.Koyama	オキナワジュズゲ	P0104064	
<i>Carex tristachya</i> Thunb. var. <i>pocilliformis</i> (Boott) Kük.	ヒメモエギスゲ	P0104063	
<i>Cyperus brevifolius</i> (Rottb.) Hassk. var. <i>leioplepis</i> (Franch. et Sav.) T.Koyama	ヒメクグ	P0104065	
<i>Cyperus cyperoides</i> (L.) Kuntze	イヌクグ	P0101059, P0101109	
<i>Cyperus flavidus</i> Retz.	アゼガヤツリ	P0104069	
<i>Cyperus iria</i> L.	コゴメガヤツリ	P0104058	
<i>Cyperus leptocarpus</i> (F.Muell.) Bauters	ヒンジガヤツリ	P0104066	
<i>Cyperus pilosus</i> Vahl	オニガヤツリ	P0104059, P0104068	

目録 (続き)

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
<i>Fimbristylis dichotoma</i> (L.) Vahl var. <i>tentsuki</i> T.Koyama	テンツキ	P0104060, P0104067	
<i>Fimbristylis subbispicata</i> Nees et Meyen	ヤマイ	P0104057	
Poaceae	イネ科		
<i>Agrostis clavata</i> Trin. var. <i>nukabo</i> Ohwi	ヌカボ	P0104087	
<i>Agrostis gigantea</i> Roth	コヌカグサ	P0104085	
<i>Aira caryophyllea</i> L.	ヌカススキ	P0104084	
<i>Alopecurus aequalis</i> Sobol. var. <i>amurensis</i> (Kom.) Ohwi	スズメノテッポウ	P0101345, P0101382	
<i>Andropogon virginicus</i> L.	メリケンカルカヤ	P0104077	
<i>Arundinella hirta</i> (Thunb.) Tanaka	トダシバ	P0104072, P0104146	
<i>Briza maxima</i> L.	コバンソウ	P0101370, P0101377	
<i>Briza minor</i> L.	ヒメコバンソウ	P0101365, P0101385	
<i>Bromus catharticus</i> Vahl	イヌムギ	P0104090	
<i>Dactylis glomerata</i> L.	カモガヤ	P0104091	
<i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koeler	メヒシバ	P0104083, P0104094	
<i>Digitaria radicata</i> (J.Presl) Miq.	コメヒシバ	P0104093	
<i>Echinochloa crus-galli</i> (L.) P.Beauv. var. <i>crus-galli</i>	イヌビエ	P0104095	
<i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn.	オヒシバ	P0104082	
<i>Elymus tsukushiensis</i> Honda var. <i>transiens</i> (Hack.) Osada	カモシグサ	P0104092	
<i>Imperata cylindrica</i> (L.) Raeusch. var. <i>koenigii</i> (Retz.) Pilg.	チガヤ	P0101339	
<i>Leptatherum japonicum</i> Franch. et Sav. var. <i>japonicum</i>	ササガヤ	P0104080	
<i>Lolium multiflorum</i> Lam.	ネズミムギ	P0101340, P0101371	
<i>Lophatherum gracile</i> Brongn.	ササクサ	P0101170	
<i>Miscanthus sinensis</i> Andersson	ススキ	P0101026	
<i>Panicum bisulcatum</i> Thunb.	ヌカキビ	P0104056	
<i>Paspalum notatum</i> Flügge	アメリカスズメノヒエ	P0104074	
<i>Paspalum thunbergii</i> Kunth ex Steud.	スズメノヒエ	P0104079	
<i>Paspalum urvillei</i> Steud.	タチスズメノヒエ	P0104078	
<i>Pennisetum alopecuroides</i> (L.) Spreng.	チカラシバ	P0104073	
<i>Phragmites karka</i> (Retz.) Trin. ex Steud.	セイタカヨシ	P0104070	
<i>Phyllostachys edulis</i> (Carrière) Houz.	モウソウチク	P0104096, P0104128, P0104129	
<i>Phyllostachys reticulata</i> (Rupr.) K.Koch	マダケ	P0104126, P0104127	
<i>Pleioblastus kongosanensis</i> Makino	コンゴウタケ	P0104135	
<i>Pleioblastus nagashima</i> (Mittford) Nakai	ヒロウザサ	P0104134	
<i>Poa acroleuca</i> Steud.	ミゾイチゴツナギ	P0104088	
<i>Poa annua</i> L.	スズメノカタビラ	P0101372, P0104089	
<i>Sacciolepis spicata</i> (L.) Honda ex Masam. var. <i>oryzeterum</i> (Makino) Yonek.	ヌメリグサ	P0104071	
<i>Sasa heterotricha</i> Koidz.	クテガワザサ	P0104136	
<i>Setaria faberi</i> R.A.W.Herrm.	アキノエノコログサ	P0101341, P0101367, P0104076	
<i>Setaria pumila</i> (Poir.) Roem. et Schult.	キンエノコロ	P0104075, P0104086	
<i>Setaria viridis</i> (L.) P.Beauv. var. <i>minor</i> (Thunb.) Ohwi	エノコログサ	P0104097	
<i>Zoysia japonica</i> Steud.	シバ	P0104081	栽
Papaveraceae	ケシ科		
<i>Papaver dubium</i> L.	ナガミヒナゲシ	P0101866	
Lardizabalaceae	アケビ科		
<i>Akebia quinata</i> (Houtt.) Decne.	アケビ	P0101939	
<i>Akebia trifoliata</i> (Thunb.) Koidz.	ミツバアケビ	P0104112	
Menispermaceae	ツツラフジ科		
<i>Cocculus trilobus</i> (Thunb.) DC.	アオツツラフジ	P0101995, P0104125, P0104137	
Berberidaceae	メギ科		
<i>Berberis japonica</i> (Thunb.) R.Br.	ヒイラギナンテン	P0104042	栽
<i>Berberis sieboldii</i> Miq.	ヘビノボラズ		栽
<i>Nandina domestica</i> Thunb.	ナンテン	P0104043	
Buxaceae	ツゲ科		
<i>Buxus microphylla</i> Siebold et Zucc. var. <i>japonica</i> (Müll.Arg. ex Miq.) Rehder et E.H.Wilson	ツゲ	P0101949	栽
<i>Pachysandra terminalis</i> Siebold et Zucc.	フッキソウ	P0101709	栽
Hamamelidaceae	マンサク科		
<i>Distylium racemosum</i> Siebold et Zucc.	イスノキ	P0101991	栽
<i>Hamamelis japonica</i> Siebold et Zucc.	マンサク	P0101787	栽
<i>Loropetalum chinense</i> (R.Br.) Oliv.	トキワマンサク	P0101786, P0101992	栽
Daphniphyllaceae	ユズリハ科		
<i>Daphniphyllum macropodum</i> Miq.	ユズリハ	P0101838, P0101941	栽
Grossulariaceae	スグリ科		
<i>Ribes rubrum</i> L.	フサスグリ		栽, 滅
Crassulaceae	ベンケイソウ科		
<i>Sedum bulbiferum</i> Makino	コモチマンネングサ	P0101954	
Vitaceae	ブドウ科		
<i>Ampelopsis glandulosa</i> (Wall.) Momiy. var. <i>heterophylla</i> (Thunb.) Momiy.	ノブドウ	P0101980	
<i>Causonis japonica</i> (Thunb.) Raf.	ヤブカラシ	P0101061, P0101137, P0101202	
<i>Parthenocissus tricuspidata</i> (Siebold et Zucc.) Planch.	ツタ	P0101865	
<i>Vitis ficifolia</i> Bunge	エビヅル	P0101981, P0104141	
Fabaceae	マメ科		

目録 (続き)

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
<i>Albizia julibrissin</i> Durazz.	ネムノキ	P0101763	栽
<i>Chamaecrista nictitans</i> (L.) Moench	アレチケツメイ	P0101765, P0101766	
<i>Desmodium paniculatum</i> (L.) DC.	アレチヌスビトハギ	P0101028, P0101057, P0101106	
<i>Glycine max</i> (L.) Merr. subsp. <i>soja</i> (Siebold et Zucc.) H. Ohashi	ツルマメ	P0101037, P0101038, P0101039	
<i>Hyldesumum podocarpum</i> (DC.) H. Ohashi & R.R. Mill subsp. <i>oxyphyllum</i> (DC.) H. Ohashi & R.R. Mill var. <i>japonicum</i> (Miq.) H. Ohashi	ヌスビトハギ	P0101027	
<i>Kummerowia stipulacea</i> (Maxim.) Makino	マルバヤハズソウ	P0101100	
<i>Kummerowia striata</i> (Thunb.) Schindl.	ヤハズソウ	P0101761	
<i>Lespedeza cuneata</i> (Dum.Cours.) G. Don	メドハギ	P0101104, P0101762	
<i>Lespedeza homoloba</i> Nakai	ツクシハギ	P0101097, P0101103, P0104061	
<i>Lespedeza pilosa</i> (Thunb.) Siebold et Zucc.	ネコハギ	P0101760	
<i>Pueraria lobata</i> (Willd.) Ohwi	クズ	P0101764	
<i>Rhynchosia acuminatifolia</i> Makino	トキリマメ	P0101482	
<i>Trifolium dubium</i> Sibth.	コムツブツメクサ	P0101133, P0101343, P0101344	
<i>Trifolium repens</i> L.	シロツメクサ	P0101184, P0101185	
<i>Vicia hirsuta</i> (L.) Gray	スズメノエンドウ	P0101047, P0101353	
<i>Vicia sativa</i> L. subsp. <i>nigra</i> (L.) Ehrh.	ヤハズエンドウ (カラスノエンドウ)	P0101198, P0101355	
<i>Vicia tetrasperma</i> (L.) Schreb.	カスマグサ	P0101046	
<i>Wisteria japonica</i> Siebold et Zucc.	ナツフジ	P0104099	
Rosaceae			
バラ科			
<i>Aria alnifolia</i> (Siebold et Zucc.) Decne.	アズキナシ	P0101783	
<i>Cerasus campanulata</i> (Maxim.) Masam. et S. Suzuki	カンヒザクラ	P0101776	栽
<i>Cerasus itosakura</i> (Siebold) Masam. et S. Suzuki var. <i>itosakura</i> f. <i>ascendens</i> (Makino) H. Ohba et H. Ikeda	エドヒガン	P0101777	栽
<i>Cerasus jamasakura</i> (Siebold ex Koidz.) H. Ohba	ヤマザクラ	P0104151, P0104152	栽
<i>Cerasus leveilleana</i> (Koehne) H. Ohba	カスミザクラ	P0101970	栽
<i>Cerasus</i> Sato-zakura Group	サトザクラ	P0101781, P0101966	栽
<i>Cerasus speciosa</i> (Koidz.) H. Ohba	オオシマザクラ	P0101408, P0101409, P0101410, P0101967	栽
<i>Cerasus subhirtella</i> (Miq.) Masam. et S. Suzuki	コヒガンザクラ	P0101780, P0101969	栽
<i>Cerasus</i> × <i>yedoensis</i> (Matsum.) Masam. et S. Suzuki	ソメイヨシノ	P0101968	栽
<i>Eriobotrya japonica</i> (Thunb.) Lindl.	ビワ	P0101955	
<i>Kerria japonica</i> (L.) DC.	ヤマブキ		栽, 減
<i>Laurocerasus zippeliana</i> (Miq.) Browicz	バクチノキ	P0101956	栽
<i>Photinia glabra</i> (Thunb.) Maxim.	カナメモチ	P0101782, P0101963	栽
<i>Potentilla hebiichigo</i> Yonek. et H. Ohashi	ヘビイチゴ	P0101964	
<i>Potentilla indica</i> (Andrews) Th. Wolf	ヤブヘビイチゴ	P0101965	
<i>Pourthiaea villosa</i> (Thunb.) Decne. var. <i>villosa</i>	カマヅカ	P0101957	栽
<i>Prunus mume</i> Siebold et Zucc.	ウメ		栽
<i>Pseudocodynia sinensis</i> (Thouin) C.K. Schneid.	カリン	P0101823	栽
<i>Pyrus calleryana</i> Decne. var. <i>dimorphophylla</i> (Makino) Koidz.	マメナシ	P0101971	栽
<i>Rhaphiolepis indica</i> (L.) Lindl. var. <i>umbellata</i> (Thunb.) H. Ohashi	シャリンバイ	P0101960, P0101961	栽
<i>Rosa multiflora</i> Thunb.	ノイバラ	P0101962	
<i>Rubus buergeri</i> Miq.	フユイチゴ	P0101032, P0101778, P0101779	
<i>Spiraea japonica</i> L.f.	シモツケ	P0101958, P0101959	栽
Elaeagnaceae			
グミ科			
<i>Elaeagnus glabra</i> Thunb.	ツルグミ	P0101872	
<i>Elaeagnus pungens</i> Thunb.	ナワシログミ	P0101979	栽
<i>Elaeagnus umbellata</i> Thunb. var. <i>umbellata</i>	アキグミ	P0101873	栽
Rhamnaceae			
クロウメモドキ科			
<i>Paliurus ramosissimus</i> (Lour.) Poir.	ハマナツメ	P0104103	栽
<i>Ziziphus jujuba</i> Mill. var. <i>inermis</i> (Bunge) Rehder	ナツメ	P0101790	栽
Ulmaceae			
ニレ科			
<i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino	ケヤキ	P0101530	栽
Cannabaceae			
アサ科			
<i>Aphananthe aspera</i> (Thunb.) Planch.	ムクノキ	P0104123	
<i>Celtis sinensis</i> Pers.	エノキ	P0101378	
Moraceae			
クワ科			
<i>Broussonetia</i> × <i>kazinoki</i> Siebold	コウゾ	P0101773	栽
<i>Fatoua villosa</i> (Thunb.) Nakai	クワクサ	P0101772, P0101985	
<i>Ficus erecta</i> Thunb. var. <i>erecta</i>	イヌビワ	P0101774	
<i>Ficus sarmentosa</i> Buch.-Ham. ex Sm. subsp. <i>nipponica</i> (Franch. et Sav.) H. Ohashi	イタビカズラ		栽, 減
<i>Morus alba</i> L.	マグワ	P0101771	栽
Urticaceae			
イラクサ科			
<i>Boehmeria nivea</i> (L.) Gaudich. var. <i>nivea</i>	ナンバンカラムシ	P0101835	
Fagaceae			
ブナ科			
<i>Castanea crenata</i> Siebold et Zucc.	クリ	P0101052, P0101089	
<i>Castanopsis cuspidata</i> (Thunb.) Schottky	ツブラジイ	P0101474	栽
<i>Castanopsis sieboldii</i> (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba	スダジイ	P0104019	栽
<i>Lithocarpus edulis</i> (Makino) Nakai	マテバシイ	P0104018	栽
<i>Lithocarpus glaber</i> (Thunb.) Nakai	シリアカガシ	P0101880, P0104014	栽
<i>Quercus acuta</i> Thunb.	アカガシ	P0104016	栽
<i>Quercus acutissima</i> Carruth.	クヌギ	P0104021	栽

目録 (続き)

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
<i>Quercus aliena</i> Blume	ナラガシワ	P0104017	裁
<i>Quercus dentata</i> Thunb.	カンワ	P0104013	裁
<i>Quercus glauca</i> Thunb.	アラカン	P0104020	裁
<i>Quercus myrsinifolia</i> Blume	シラカン	P0104012	裁
<i>Quercus phillyreoides</i> A.Gray	ウバメガシ	P0101883	裁
<i>Quercus salicina</i> Blume	ウラジロガシ	P0104015	裁
<i>Quercus serrata</i> Murray	コナラ	P0101882, P0104022	裁
<i>Quercus sessilifolia</i> Blume	ツクバネガシ	P0101879	裁
<i>Quercus variabilis</i> Blume	アベマキ	P0101881	裁
Myricaceae	ヤマモモ科		
<i>Morella rubra</i> Lour.	ヤマモモ	P0101792	裁
Juglandaceae	クルミ科		
<i>Juglans mandshurica</i> Maxim. var. <i>sachalinensis</i> (Komatsu) Kitam.	オニグルミ	P0101869	裁
Betulaceae	カバノキ科		
<i>Betula grossa</i> Siebold et Zucc.	ミズメ	P0104048	裁
Cucurbitaceae	ウリ科		
<i>Trichosanthes cucumeroides</i> (Ser.) Maxim. ex Franch. et Sav.	カラスウリ	P0101837	
<i>Zehneria japonica</i> (Thunb.) H.Y.Liu	スズメウリ	P0104138	
Celastraceae	ニシキギ科		
<i>Euonymus sieboldianus</i> Blume	マユミ	P0101821	裁
<i>Celastrus orbiculatus</i> Thunb. var. <i>orbiculatus</i>	ツルウメモドキ	P0104130	
Oxalidaceae	カタバミ科		
<i>Oxalis corniculata</i> L.	カタバミ	P0101804	
<i>Oxalis debilis</i> Kunth subsp. <i>corymbosa</i> (DC.) Lourteig	ムラサキカタバミ	P0101803	
<i>Oxalis dillenii</i> Jacq.	オウタチカタバミ	P0101802	
Elaeocarpaceae	ホルトノキ科		
<i>Elaeocarpus zollingeri</i> K.Koch	ホルトノキ	P0101942	裁
Hypericaceae	オトギリソウ科		
<i>Hypericum erectum</i> Thunb.	オトギリソウ	P0104052, P0104053	
Violaceae	スミレ科		
<i>Viola betonicifolia</i> Sm. var. <i>albescens</i> (Nakai) F.Maek. et T.Hashim.	アリアケスミレ	P0101156, P0101878, P0101990, P0104147	
<i>Viola inconspicua</i> Blume	ヒメスミレ	P0104150	
<i>Viola mandshurica</i> W.Becker	スミレ	P0101092, P0101989, P0104148	
<i>Viola verecunda</i> A.Gray	ツボスミレ	P0101988, P0104149	
Salicaceae	ヤナギ科		
<i>Salix babylonica</i> L.	シダレヤナギ	P0101874	裁
<i>Salix gracilistyla</i> Miq.	ネコヤナギ	P0101875	裁
Euphorbiaceae	トウダイグサ科		
<i>Acalypha australis</i> L.	エノキグサ	P0101854, P0101982	
<i>Euphorbia maculata</i> L.	コニシキソウ	P0101983	
<i>Euphorbia nutans</i> Lag.	オオニシキソウ	P0101360	
<i>Euphorbia ophthalmica</i> Pers.	ニセシマニシキソウ	P0101855	
<i>Mallotus japonicus</i> (L.f.) Müll.Arg.	アカメガシワ	P0101062, P0101155	
<i>Triadica sebifera</i> (L.) Small	ナンキンハゼ	P0101984	
Geraniaceae	フクロソウ科		
<i>Geranium carolinianum</i> L.	アメリカフクロ	P0101350, P0101362	
Lythraceae	ミンハギ科		
<i>Punica granatum</i> L.	ザクロ	P0101953	裁
Onagraceae	アカバナ科		
<i>Oenothera laciniata</i> Hill	コマツヨイグサ	P0104008, P0104009	
<i>Oenothera rosea</i> L'Hér. ex Aiton	ユウゲショウ	P0101824	
<i>Oenothera speciosa</i> Nutt.	ヒルザキツキミソウ	P0104007	
Myrtaceae	フトモモ科		
<i>Psidium cattleyanum</i> Sabine f. <i>lucidum</i> O.Deg.	キミノバンジロウ	P0104098	裁
Staphyleaceae	ミツバウツギ科		
<i>Staphylea japonica</i> (Thunb.) Mabb.	ゴズイ	P0104142	
Anacardiaceae	ウルシ科		
<i>Rhus javanica</i> L. var. <i>chinensis</i> (Mill.) T.Yamaz.	ヌルデ	P0101862	
<i>Toxicodendron succedaneum</i> (L.) Kuntze	ハゼノキ	P0101948	裁
<i>Toxicodendron vernicifluum</i> (Stokes) F.A.Barkley	ウルシ	P0101946, P0101947	裁
Sapindaceae	ムクロジ科		
<i>Acer japonicum</i> Thunb.	ハウチワカエデ [オオイタヤマメイゲツ]	P0104034	裁
<i>Acer palmatum</i> Thunb.	イロハモミジ	P0101407, P0101877, P0101951	裁
<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ	P0101876	裁
<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	P0101952	裁
Rutaceae	ミカン科		
<i>Citrus trifoliata</i> L.	カラタチ		裁, 減
<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.	キハダ	P0101950	裁
<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Siebold et Zucc.	カラスザンショウ		裁
<i>Zanthoxylum piperitum</i> (L.) DC.	サンショウ		裁, 減

目録 (続き)

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
Meliaceae	センダン科		
<i>Melia azedarach</i> L.	センダン	P0101868, P0104133	
Malvaceae	アオイ科		
<i>Hibiscus hamabo</i> Siebold et Zucc.	ハマボウ	P0101818	栽
<i>Tilia japonica</i> (Miq.) Simonk.	シナノキ	P0101940	栽
Thymelaeaceae	ジンチョウゲ科		
<i>Daphne odora</i> Thunb.	ジンチョウゲ		栽, 減
<i>Edgeworthia chrysantha</i> Lindl.	ミツマタ		栽
Brassicaceae	アブラナ科		
<i>Capsella bursa-pastoris</i> (L.) Medik.	ナズナ	P0101031	
<i>Cardamine occulta</i> Hornem.	タネツケバナ	P0101364	
<i>Rorippa palustris</i> (L.) Besser	スカシタゴボウ	P0101376	
Polygonaceae	タデ科		
<i>Fallopia japonica</i> (Houtt.) Ronse Decr. var. <i>japonica</i>	イタドリ	P0104122	
<i>Persicaria filiformis</i> (Thunb.) Nakai ex W.T.Lee	ミズヒキ	P0101799	
<i>Persicaria longiseta</i> (Bruijn) Kitag.	イヌタデ	P0101800	
<i>Persicaria maculosa</i> Gray subsp. <i>hirticaulis</i> (Danser) S.Ekman et T.Knutsson var. <i>pubescens</i> (Makino) Yonek.	ハルタデ	P0104054	
<i>Persicaria praetermissa</i> (Hook.f.) H.Hara	ホソバノウナギツカミ	P0101801, P0104027, P0104055	
<i>Rumex acetosa</i> L.	スイバ	P0101473, P0104030, P0104031	
<i>Rumex acetosella</i> L. subsp. <i>pyrenaicus</i> (Pourret ex Lapeyr.) Akeroyd	ヒメスイバ	P0101798	
<i>Rumex crispus</i> L.	ナガバギンギシ	P0104028, P0104029	
Caryophyllaceae	ナデシコ科		
<i>Cerastium glomeratum</i> Thuill.	オランダミミナグサ	P0101811	
<i>Sagina japonica</i> (Sw.) Ohwi	ツメクサ	P0101487, P0101812	
<i>Silene pendula</i> L.	サクラマンテマ	P0101810	
<i>Stellaria aquatica</i> (L.) Scop.	ウシハコベ	P0101342, P0101375, P0101809	
Amaranthaceae	ヒユ科		
<i>Achyranthes bidentata</i> Blume var. <i>fauriei</i> (H.Lév. et Vaniot)	ヒナタイノコヅチ	P0101861	
<i>Celosia argentea</i> L.	ノゲイトウ	P0101937	
Phytolaccaceae	ヤマゴボウ科		
<i>Phytolacca americana</i> L.	ヨウシュヤマゴボウ	P0101836	
Hydrangeaceae	アジサイ科		
<i>Deutzia crenata</i> Siebold et Zucc.	ウツギ	P0104100	栽
<i>Hydrangea macrophylla</i> (Thunb.) Ser. f. <i>normalis</i> (E.H.Wilson) H.Hara	ガクアジサイ	P0104005	栽
<i>Hydrangea paniculata</i> Siebold	ノリウツギ	P0101870	栽
Polemoniaceae	ハナシノブ科		
<i>Phlox subulata</i> L.	シバザクラ		栽, 減
Pentaphragmaceae	サカキ科		
<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	P0101839	
<i>Eurya japonica</i> Thunb. var. <i>japonica</i>	ヒサカキ	P0101383, P0101384	
Ebenaceae	カキノキ科		
<i>Diospyros kaki</i> Thunb.	カキノキ	P0101944	栽
Primulaceae	サクラソウ科		
<i>Ardisia crenata</i> Sims	マンリョウ	P0101033	栽
<i>Ardisia crispa</i> (Thunb.) A.DC.	カラタチバナ		栽, 減
<i>Ardisia japonica</i> (Thunb.) Blume	ヤブコウジ	P0101789	栽
<i>Lysimachia fortunei</i> Maxim.	ヌマトラノオ	P0104110	
<i>Lysimachia japonica</i> Thunb.	コナスビ	P0101788	
Theaceae	ツバキ科		
<i>Camellia sinensis</i> (L.) Kuntze	チャノキ	P0101993	
<i>Stewartia monadelpha</i> Siebold et Zucc.	ヒメシャラ	P0101994	栽
Symplocaceae	ハイノキ科		
<i>Symplocos glauca</i> (Thunb.) Koidz.	ミズズバイ	P0101817	
<i>Symplocos prunifolia</i> Siebold et Zucc.	クロバイ	P0101816	
Clethraceae	リョウブ科		
<i>Clethra barbinervis</i> Siebold et Zucc.	リョウブ	P0101807	栽
Ericaceae	ツツジ科		
<i>Elliottia paniculata</i> (Siebold et Zucc.) Hook.f.	ホツツジ		栽, 減
<i>Enkianthus campanulatus</i> (Miq.) G.Nicholson	サラサドウダン		栽, 減
<i>Enkianthus cernuus</i> (Siebold et Zucc.) Makino f. <i>rubens</i> (Maxim.) Ohwi	ベニドウダン		栽, 減
<i>Enkianthus nudipes</i> (Honda) Ohwi	コアブラツツジ		栽, 減
<i>Lyonia ovalifolia</i> (Wall.) Drude var. <i>elliptica</i> (Siebold et Zucc.) Hand.-Mazz.	ネジキ	P0101999	栽
<i>Pieris japonica</i> (Thunb.) D.Don ex G.Don subsp. <i>japonica</i>	アセビ	P0101871	栽
<i>Rhododendron dilatatum</i> Miq. var. <i>dilatatum</i>	ミツバツツジ	P0104003	栽
	[コバノミツバツツジ]		
<i>Rhododendron indicum</i> (L.) Sweet	サツキ	P0102000	栽
<i>Rhododendron japonoheptamerum</i> Kitam. var. <i>hondoense</i> (Nakai) Kitam.	ホンシャクナゲ		栽, 減
<i>Rhododendron kaempferi</i> Planch. var. <i>kaempferi</i>	ヤマツツジ	P0104001, P0104002	栽
<i>Rhododendron keiskei</i> Miq.	ヒカゲツツジ		栽, 減
<i>Rhododendron macrosepalum</i> Maxim.	モチツツジ		栽, 減
<i>Rhododendron molle</i> (Blume) G.Don subsp. <i>japonicum</i> (A.Gray) K.Kron	レンゲツツジ		栽

目録 (続き)

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
<i>Rhododendron pentaphyllum</i> Maxim. var. <i>nikoense</i> Komatsu	アカヤシオ		栽, 減
<i>Rhododendron quinquefolium</i> Bisset et S.Moore	シロヤシオ	P0104004	栽
<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	シャヤシヤンボ	P0101998	栽
<i>Vaccinium oldhamii</i> Miq.	ナツハゼ		栽, 減
Garryaceae			
	アオキ科		
<i>Aucuba japonica</i> Thunb. var. <i>japonica</i>	アオキ	P0101797	栽
<i>Aucuba japonica</i> Thunb. 'Variegata'	フリリアオキ	P0101796	栽
Rubiaceae			
	アカネ科		
<i>Damnacanthus indicus</i> C.F.Gaertn. var. <i>lancifolius</i> Makino	ホンバオオアリドオシ	P0104113	
<i>Galium gracilens</i> (A.Gray) Makino	ヒメヨツバムグラ	P0101815	
<i>Galium spurium</i> L. var. <i>echinospermon</i> (Wallr.) Desp.	ヤエムグラ	P0101813	
<i>Gardenia jasminoides</i> Ellis	クチナシ	P0101814	栽
<i>Paederia foetida</i> L.	ヘクソカズラ	P0101079	
Apocynaceae			
	キョウチクトウ科		
<i>Marsdenia tomentosa</i> C.Morren et Decne.	キジョラン	P0101945	栽
<i>Metaplexis japonica</i> (Thunb.) Makino	ガガイモ	P0101694	
<i>Trachelospermum asiaticum</i> (Siebold et Zucc.) Nakai	テイカカズラ	P0104118	
Boraginaceae			
	ムラサキ科		
<i>Bothriospermum zeylanicum</i> (J.Jacq.) Druce	ハナイバナ	P0101785	
<i>Trigonotis peduncularis</i> (Trevir.) Benth. ex Hemsl.	キュウリグサ	P0101784	
Convolvulaceae			
	ヒルガオ科		
<i>Ipomoea coccinea</i> L.	マルバルコウ	P0101090	
<i>Ipomoea lacunosa</i> L.	マメアサガオ	P0101860	
Solanaceae			
	ナス科		
<i>Alkekengi officinarum</i> Moench var. <i>franchetii</i> (Mast.) R.J.Wang	ホオズキ	P0101379, P0101380	
<i>Lycium chinense</i> Mill.	クコ	P0101848	栽
<i>Solanum carolinense</i> L.	ワルナスビ	P0101849	
<i>Solanum emulans</i> Raf.	アメリカイヌホオズキ	P0101369	
<i>Solanum lyratum</i> Thunb.	ヒヨドリジョウゴ	P0104131	
Oleaceae			
	モクセイ科		
<i>Fraxinus lanuginosa</i> Koidz. f. <i>serrata</i> (Nakai) Murata	アオダモ	P0101502	栽
<i>Ligustrum japonicum</i> Thunb.	ネズミモチ	P0104033	
<i>Ligustrum obtusifolium</i> Siebold et Zucc.	イボタノキ	P0101846, P0104044	栽
<i>Osmanthus fragrans</i> Lour. var. <i>aurantiacus</i> Makino	キンモクセイ	P0104032	栽
<i>Osmanthus heterophyllus</i> (G.Don) P.S.Green	ヒイラギ		
Plantaginaceae			
	オオバコ科		
<i>Nuttallanthus canadensis</i> (L.) D.A.Sutton	マツバウンラン	P0101351, P0101352, P0101363	
<i>Plantago asiatica</i> L.	オオバコ	P0101189	
<i>Plantago virginica</i> L.	ツボミオオバコ	P0101157	
<i>Veronica arvensis</i> L.	タチイヌノフグリ	P0101361, P0101856	
<i>Veronica peregrina</i> L.	ムシクサ	P0101060, P0101096	
<i>Veronica persica</i> Poir.	オオイヌノフグリ	P0101857	
Linderniaceae			
	アゼナ科		
<i>Vandellia crustacea</i> (L.) Benth.	ウリクサ	P0104051, P0104145	
Acanthaceae			
	キツネノマゴ科		
<i>Justicia procumbens</i> L. var. <i>procumbens</i>	キツネノマゴ	P0101859, P0101938	
Verbenaceae			
	クマツヅラ科		
<i>Verbena bonariensis</i> L.	ヤナギハナガサ	P0101358	
Lamiaceae			
	シソ科		
<i>Ajuga decumbens</i> Thunb.	キランソウ	P0104036	
<i>Ajuga reptans</i> L.	セイヨウジュウニヒトエ		栽, 減
<i>Callicarpa japonica</i> Thunb.	ムラサキシキブ		栽, 減
<i>Clerodendrum trichotomum</i> Thunb.	クサギ	P0101359, P0101831	
<i>Clinopodium gracile</i> (Benth.) Kuntze	トウバナ	P0104037, P0104038	
<i>Glechoma hederacea</i> L. subsp. <i>grandis</i> (A.Gray) H.Hara	カキドオシ	P0101832	
<i>Lamium amplexicaule</i> L.	ホトケノザ	P0101356, P0101368	
<i>Lamium purpureum</i> L.	ヒメオドリコソウ	P0101833	
<i>Salvia rosmarinus</i> Schleid.	マンネンロウ (ローズマリー)	P0101834	
Mazaceae			
	サギゴケ科		
<i>Mazus miquelii</i> Makino	サギゴケ	P0101132, P0101354	
<i>Mazus miquelii</i> Makino f. <i>albiflorus</i> (Makino) Makino	シロバナサギゴケ	P0101806	
<i>Mazus pumilus</i> (Burm.f.) Steenis	トキワハゼ	P0101805	
Paulowniaceae			
	キリ科		
<i>Paulownia tomentosa</i> (Thunb.) Steud.	キリ	P0101424	栽
Aquifoliaceae			
	モチノキ科		
<i>Ilex crenata</i> Thunb. var. <i>crenata</i>	イヌツゲ	P0101864	
<i>Ilex integra</i> Thunb.	モチノキ	P0104115	
<i>Ilex latifolia</i> Thunb.	タラヨウ	P0101863	栽
<i>Ilex macropoda</i> Miq.	アオハダ	P0101987	栽
<i>Ilex pedunculosa</i> Miq.	ソヨゴ	P0104117, P0104139	栽

目録 (続き)

学名	和名	資料番号 (MIE -)	備考
<i>Ilex rotunda</i> Thunb.	クロガネモチ	P0101986, P0104124	裁
<i>Ilex serrata</i> Thunb.	ウメドモキ		裁, 減
Campanulaceae			
<i>Adenophora triphylla</i> (Thunb.) A.DC. var. <i>japonica</i> (Regel) H.Hara	ツリガネニンジン	P0101091, P0101622	
<i>Triodanis perfoliata</i> (L.) Nieuwl.	キキョウソウ	P0101691	
Asteraceae			
<i>Artemisia indica</i> Willd. var. <i>maximowiczii</i> (Nakai) H.Hara	ヨモギ	P0101531, P0101909	
<i>Bidens frondosa</i> L.	アメリカセンダングサ	P0101907	
<i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>pilosa</i>	コセンダングサ	P0101908	
<i>Chrysanthemum morifolium</i> Ramat.	キク (イエギク)	P0101903	
<i>Cirsium japonicum</i> Fisch. ex DC.	ノアザミ	P0101421, P0101422, P0101423, P0101547	
<i>Erigeron annuus</i> (L.) Pers.	ヒメジョオン	P0101912	
<i>Erigeron philadelphicus</i> L.	ハルジオン	P0101679, P0101680	
<i>Eupatorium makinoi</i> T.Kawahara et Yahara	ヒヨドリバナ	P0101055, P0101906	
<i>Farfugium japonicum</i> (L.) Kitam.	ツワブキ	P0101902	
<i>Gamochaeta coarctata</i> (Willd.) Kerguelén	ウラジロチチコグサ	P0101897	
<i>Gamochaeta pensylvanica</i> (Willd.) A.L.Cabrera	チチコグサモドキ	P0101895, P0101896	
<i>Gamochaeta purpurea</i> (L.) A.L.Cabrera	ウスベニチチコグサ	P0101900	
<i>Gnaphalium japonicum</i> Thunb.	チチコグサ	P0101898, P0101899	
<i>Hemisteptia lyrata</i> (Bunge) Fisch. et C.A.Mey.	キツネアザミ	P0101381	
<i>Ixeridium dentatum</i> (Thunb.) Tzvelev subsp. <i>dentatum</i>	ニガナ	P0101916	
<i>Ixeris japonica</i> (Burm.f.) Nakai	オオジシバリ	P0101130, P0101131	
<i>Lactuca indica</i> L.	アキノノゲシ	P0101056, P0101910	
<i>Lapsanastrum humile</i> (Thunb.) J.H.Pak et K.Bremer	ヤブタバコ	P0101914	
<i>Leucanthemum maximum</i> (Ramond) DC.	ジャスタデージ		裁, 減
<i>Leucanthemum vulgare</i> Lam.	フランスギク	P0104026	
<i>Petasites japonicus</i> (Siebold et Zucc.) Maxim.	フキ	P0101901, P0104023	
<i>Picris hieracioides</i> L. subsp. <i>japonica</i> (Thunb.) Krylov	コウゾリナ	P0101904, P0101905	
<i>Pseudognaphalium affine</i> (D.Don) Anderb.	ハハコグサ	P0101346, P0101347, P0101348, P0101349, P0101374	
<i>Senecio vulgaris</i> L.	ノボロギク	P0101373	
<i>Solidago altissima</i> L.	セイタカアワダチソウ	P0101454, P0101455, P0101456, P0101457, P0101458, P0101459, P0101460, P0101461, P0101462	
<i>Sonchus oleraceus</i> L.	ノゲシ	P0101146, P0101917, P0101918	
<i>Taraxacum albidum</i> Dahlst.	シロバナタンポポ	P0101921, P0101922	
<i>Taraxacum platycarpum</i> Dahlst. var. <i>elatum</i> (Kitam.) Morita	セイタカタンポポ	P0101919, P0101920	
<i>Taraxacum japonicum</i> Koidz.	カンサイタンポポ	P0104024	
<i>Xanthium orientale</i> L. subsp. <i>orientale</i>	オオオナモミ	P0101074, P0101623, P0101913	
<i>Youngia japonica</i> (L.) DC.	オニタバコ	P0101915, P0104025	
<i>Zinnia elegans</i> Jacq.	ヒャクニチソウ	P0101911	
Adoxaceae			
<i>Viburnum dilatatum</i> Thunb.	ガマズミ	P0101828	裁
<i>Viburnum erosum</i> Thunb.	コバノガマズミ	P0101826, P0101827	
<i>Viburnum japonicum</i> (Thunb.) Spreng.	ハクサンボク	P0101825	
Caprifoliaceae			
<i>Lonicera japonica</i> Thunb.	スイカズラ	P0101406, P0104006	
<i>Weigela hortensis</i> (Siebold et Zucc.) K.Koch	タニウツギ	P0101847	裁
Araliaceae			
<i>Aralia cordata</i> Thunb.	ウド	P0104143	
<i>Aralia elata</i> (Miq.) Seem.	タラノキ	P0104046	裁
<i>Dendropanax trifidus</i> (Thunb.) Makino ex H.Hara	カクレミノ	P0101850, P0104047	
<i>Fatsia japonica</i> (Thunb.) Decne. et Planch.	ヤツデ	P0101851, P0104132	
<i>Hedera rhombea</i> (Miq.) Bean	キツタ	P0101852	
<i>Hydrocotyle maritima</i> Honda	ノチドメ	P0101853, P0104045	
Apiaceae			
<i>Centella asiatica</i> (L.) Urb.	ツボクサ	P0101829	
<i>Torilis japonica</i> (Houtt.) DC.	ヤブジラミ	P0104035	
<i>Torilis scabra</i> (Thunb.) DC.	オヤブジラミ	P0104011	

研究ノート

三重県総合博物館ミュージアムフィールドおよび周辺ため池における鳥類相

Avifauna of the Museum Field of Mie Prefectural Museum and its surrounding ponds, Mie, Japan

稲垣玲弥

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060 三重県総合博物館

キーワード：ルートセンサス, モニタリング, 季節変化

(2022年10月27日 受付)

Reiya INAGAKI *

Mie Prefectural Museum

Isshinden-kouzubeta 3060, Tsu, Mie 514-0061, Japan

*Corresponding author: xinagar0@pref.mie.lg.jp

Abstract

The survey on the avifauna of the Museum Field of Mie Prefectural Museum and its surrounding ponds was carried out from March 2018 to February 2022. A total of 66 bird species including 21 newly recorded species were confirmed.

Key words: route census, monitoring, seasonal change

はじめに

三重県総合博物館（以下、当館）の敷地であるミュージアムフィールドには里山残存林である落葉広葉樹林と常緑広葉樹林、植栽された樹木、芝生など多様な植生があり（大島・森田，2022），その環境を利用する鳥類が多数飛来する。また周辺にはため池が複数あり，水辺を利用する鳥類も多数飛来する。

ここでは，三重県センター博物館（仮称）の整備に伴う自然環境調査で1995年から1996年（市川ほか，1996）と，当館建設にあたる自然環境調査として2009年から2010年（日本設計・環境科学，2010）に調査が行われている。しかし近年，当館近辺において宅地開発やため池の整備により自然環境が改変されており，周辺の生態系にも影響があると考えられる。環

境が改変される過程の鳥類を記録することは，津市近郊における鳥類相の変遷や生息数を考える際の基礎資料となる。

そこで本稿では，2018年3月から2022年2月までの4年間の三重県総合博物館ミュージアムフィールドおよび周辺ため池の鳥類相を報告し若干の考察を行う。

調査地

調査は，三重県津市一身田上津部田にある当館の野外展示エリアと位置付けたミュージアムフィールドおよび周辺にある3ヶ所のため池，口池，北の池，おおさん池で行われた（図1）。ミュージアムフィールドは，里山残存林であるコナラやアバマキを主要構成種とする落葉広葉樹林，ツブラジイやヤマモモを主要構

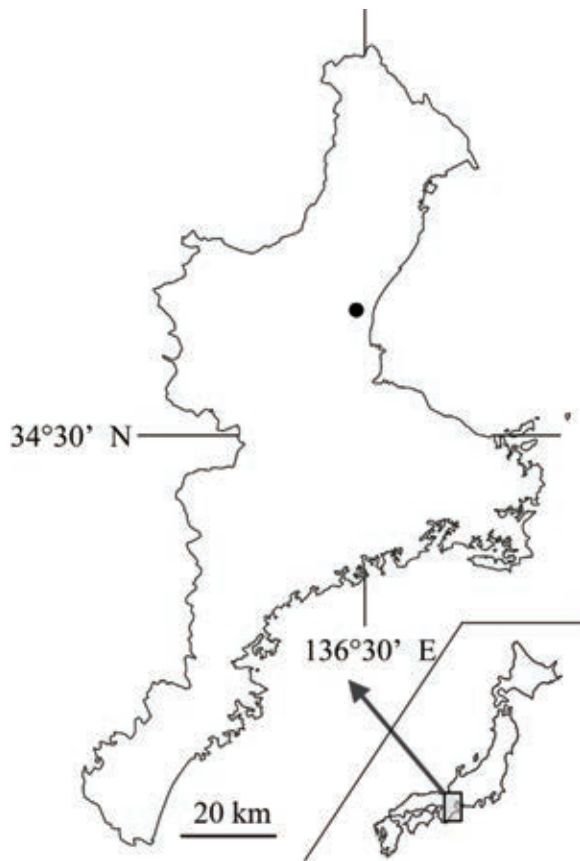


図1. 調査地の位置.

成種とする常緑広葉樹林, 人の生活に身近な樹木を植栽した「木のずかん」, 「芝生の広場」などからなる (大島・森田, 2022). 口池は三重県総合文化センターに隣接する調整池であり, 池の周囲はコンクリートで造成されている. 北の池は当館の東に位置するため池であり, 池の周囲はミュージアムフィールドや住宅地と隣接し, 北から西側の池周囲はハンノキやヨシなどが生育する湿地である. またハンノキなどの高木がよく茂っているためミュージアムフィールド側からは池水面を視認することは難しい. おおさん池は当館の南西に位置するため池であり, 池の周囲は住宅地と隣接し, 池周縁西側に広葉樹が生育する (図2).

調査方法

本調査ではルートセンサス法によって, 2018年3月から2022年2月の間に月2回の頻度で行った. 日の出から午前8時30分までの間のうち約1時間, 設定したルート (約1.3 km) を歩き, 目視および鳴き声によって確認した種名と個体数を記録した. なお, 個体識別ができた鳥類を除き調査範囲内で確認した鳥類はすべて記録しているため, 重複して記録している可能性がある. 調査範囲およびセンサスルートは図3に示した. また, 調査日時以外でも, 調査地内で目視, 鳴き声および死体拾得によって確認された種についても記録した.

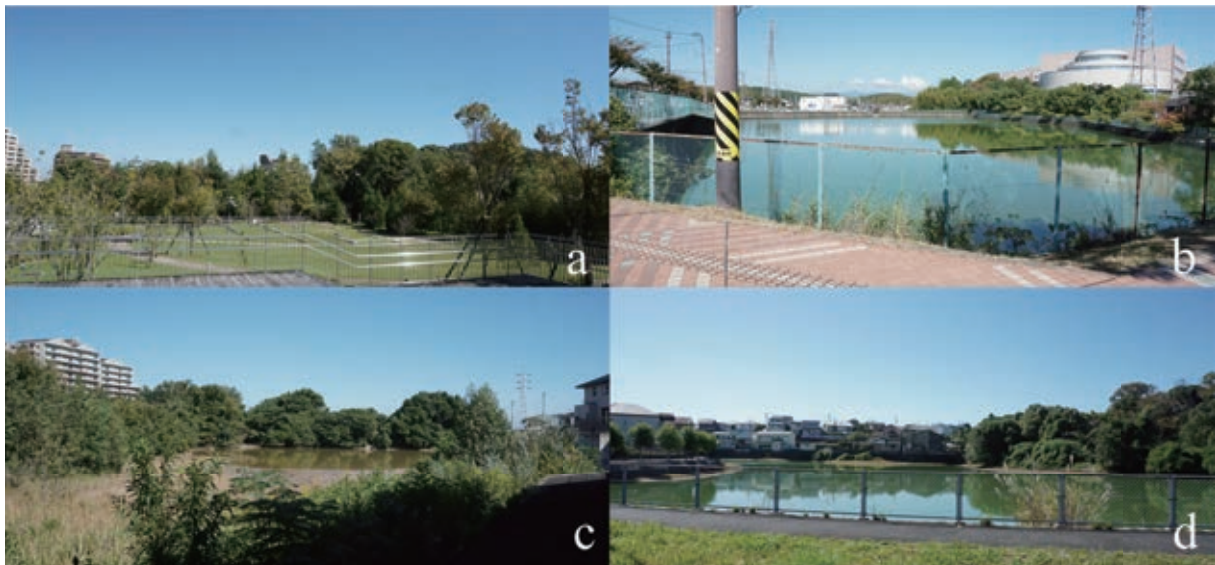


図2. ミュージアムフィールドおよび周辺ため池の様子.

a, ミュージアムフィールド; b, 口池; c, 北の池; d, おおさん池 (全て2022年10月14日撮影).

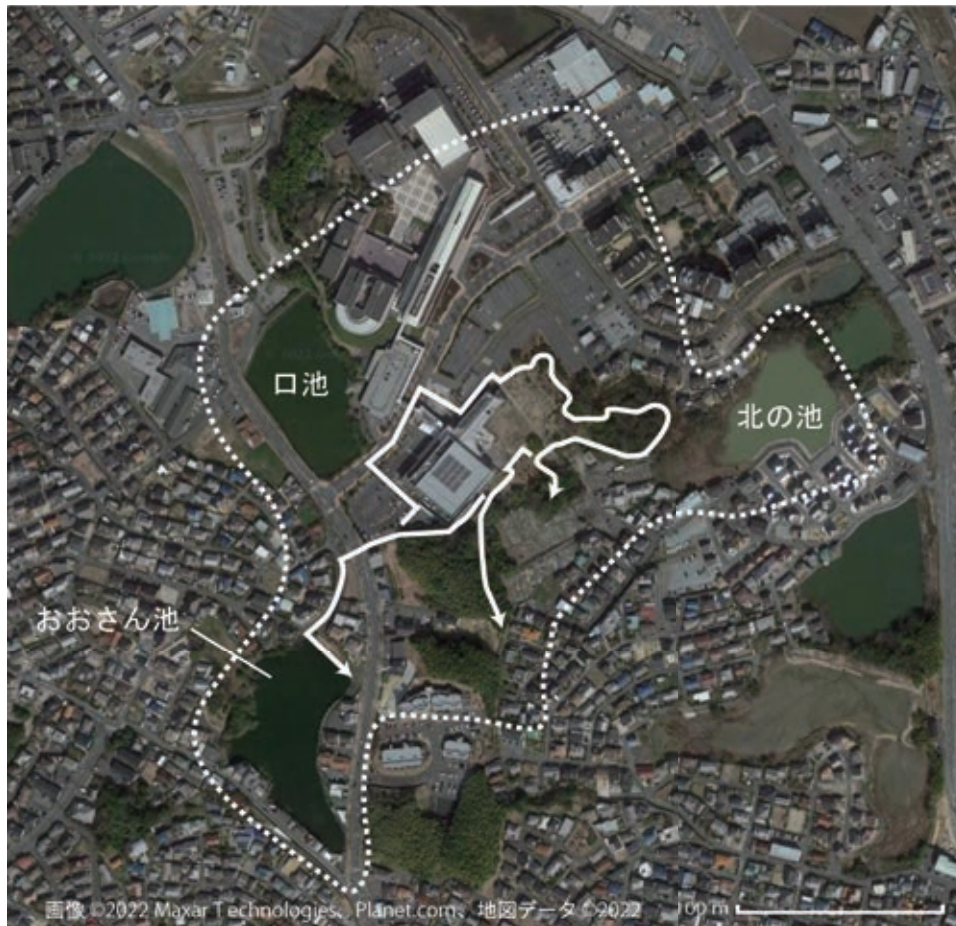


図3. 本調査における調査範囲 (Google map 2022年10月7日版をもとに作成). 実線は調査ルート, 破線は調査範囲を示す.

結果および考察

2018年3月から2022年2月にかけて行った98回の調査で, 12目28科56種, 記録総個体数10,205羽の鳥類を確認した. また調査日時外に目視や鳴き声, 死体拾得により11種の鳥類を確認し, 調査地内において15目31科66種の鳥類を確認した. このうち生息状況における区分では, 留鳥が37種, 夏鳥が5種, 冬鳥が19種, 旅鳥が5種であり, 外来種はコジュケイ *Bambusicola thoracicus* とカワラバト (ドバト) *Columba livia* の2種であった. また調査地内において巣または幼鳥を確認した種が18種あり, これらの種は調査地内にて繁殖もしくは調査地近辺で繁殖の可能性がある. 過去の調査記録(市川ほか, 1996; 日本設計・環境科学, 2010) を含め本調査地で16目34科78種の鳥類が記録された (表1).

本調査地において出現率が高かった種は, ハシボソガラス *Corvus corone* とヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* が99.0%, キジバト *Streptopelia orientalis* が98.0%

とほとんどの調査日で確認され, ついでカイツブリ *Tachybaptus ruficollis* が96.9%, メジロ *Zosterops japonicus* が91.8%であった. また, 夏鳥ではツバメ *Hirundo rustica* が42.9%, 冬鳥ではジョウビタキ *Phoenicurus aureoreus* が33.7%, ハシビロガモ *Anas clypeata* が32.7%, ツグミ *Turdus naumanni* が31.6%, シロハラ *Turdus pallidus* が30.6%であった (付表). 調査期間を通して優占度が高い種はメジロが14.1%で一番高く, ついでハシビロガモが12.8%, ヒヨドリが11.3%, ハシボソガラスが10.3%であった. 季節ごとの優占度では2018年から2020年の冬から春においてハシビロガモの優占度が高く2018年の冬季は44.3%であった. ハシビロガモは一度の調査で確認された個体数が多く, 平均羽数は40.8羽で最大175羽が確認された. しかし2020年秋以降は優占度が低く, 確認された個体数が減少した. 詳細な原因は不明であるが, 調査地近辺で行われた宅地開発が影響している可能性が考えられる. メジロは秋から春にかけての優占

表1. ミュージアムフィールドおよび周辺ため池で記録された鳥類.

目	科	種名	学名	生息状況	1995-1996	2009-2010	2018-2022	繁殖・繁殖の可能性
1	キジ目	キジ科	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracicus</i>	RB	●	●	
2	カモ目	カモ科	ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>	WV		●	
3			マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>	WV	●	●	
4			カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	RB	●	●	●
5			ハンビロガモ	<i>Anas clypeata</i>	WV	●	●	●
6			オナガガモ*	<i>Anas acuta</i>	WV	●	●	●
7			コガモ	<i>Anas crecca</i>	WV	●	●	●
8			ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>	WV	●	●	●
9			キンクロハジロ	<i>Aythya fuligula</i>	WV		●	
10	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>	RB	●	●	○
11	ハト目	ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	RB	●	●	○
12			アオバト	<i>Treron steboldii</i>	RB		●	
13			カワラバト (ドバト)	<i>Columba livia</i>	RB		●	○
14	カツオドリ目	ウ科	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	RB	●	●	●
15	ペリカン目	サギ科	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	RB	●	●	○
16			アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>	RB	●	●	●
17			ダイサギ	<i>Ardea alba</i>	RB		●	●
18			チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i>	MB		●	
19			コサギ	<i>Egretta garzetta</i>	RB		●	●
20	ツル目	クイナ科	バン	<i>Gallinula chloropus</i>	RB	●	●	●
21			オオバン	<i>Fulica atra</i>	WV		●	
22	カウコウ目	カウコウ科	ホトトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>	MB		●	
23	アマツバメ目	アマツバメ科	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	PV		●	
24	チドリ目	チドリ科	ケリ	<i>Vanellus cinereus</i>	RB		●	
25			コチドリ*	<i>Charadrius dubius</i>	MB		●	
26		シギ科	タンシギ	<i>Gallinago gallinago</i>	WV		●	
27			イソシギ	<i>Actitis hypoleucos</i>	RB	●		
28	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	RB		●	●
29		タカ科	トビ*	<i>Milvus migrans</i>	RB	●	●	●
30			ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	RB		●	
31			オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	RB		●	●
32			サシバ	<i>Butastur indicus</i>	MB		●	
33			ノスリ*	<i>Buteo buteo</i>	WV		●	
34	フクロウ目	フクロウ科	フクロウ*	<i>Strix uralensis</i>	RB		●	
35	ブッポウソウ目	カワセミ科	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	MB		●	
36			カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	RB	●	●	○
37	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	RB	●	●	○
38			アオゲラ	<i>Picus avokera</i>	RB		●	
39	ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ*	<i>Falco peregrinus</i>	WV		●	
40	スズメ目	モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus</i>	RB	●	●	●
41		カラス科	ハンボンガラス	<i>Corvus corone</i>	RB	●	●	○
42			ハンブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	RB	●	●	○
43		シジュウカラ科	ヤマガラ	<i>Poecile varius</i>	RB		●	○
44			シジュウカラ	<i>Parus minor</i>	RB	●	●	○
45		ヒバリ科	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	RB	●	●	●
46		ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>	MB	●	●	○
47		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	RB	●	●	○
48		ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	RB	●	●	●
49		エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	RB	●	●	○
50		ムシクイ科	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus xanthodryas</i>	PV		●	
51			エブムシクイ	<i>Phylloscopus borealoides</i>	PV		●	
52			センダイムシクイ*	<i>Phylloscopus coronatus</i>	PV		●	
53		メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus</i>	RB	●	●	○
54		ヨシキリ科	オオヨシキリ	<i>Acrocephalus orientalis</i>	MB		●	
55		ムクドリ科	ムクドリ	<i>Spodiopsar cinereus</i>	RB	●	●	○
56		ヒタキ科	トラツグミ*	<i>Zoothera dauma</i>	RB		●	
57			シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	WV		●	
58			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	WV		●	
59			ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>	WV	●	●	●
60			ルリヒタキ	<i>Tarsiger cyanurus</i>	WV		●	
61			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>	WV	●	●	●
62			イソヒヨドリ	<i>Monticola solitarius</i>	RB		●	
63			サメビタキ*	<i>Muscicapa sibirica</i>	PV		●	
64			キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	PV		●	
65			オオルリ*	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	PV		●	
66		スズメ科	スズメ	<i>Passer montanus</i>	RB	●	●	○
67		セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	RB	●	●	●
68			ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	RB	●	●	○
69			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	RB	●	●	●
70			ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i>	WV	●	●	●
71			タヒバリ	<i>Anthus rubescens</i>	WV	●	●	●
72		アトリ科	カワラヒワ	<i>Chloris sinica</i>	RB	●	●	○
73			マヒワ	<i>Carduelis spinus</i>	WV		●	
74			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	WV		●	
75			イカル	<i>Eophona personata</i>	RB		●	
76		ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides</i>	RB	●	●	●
77			カシラダカ	<i>Emberiza rustica</i>	WV	●	●	●
78			アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	WV	●	●	●

*2018-2022年の調査において調査日時外に確認された種。

種名・学名・種の配列については日本鳥類目録改訂7版 (日本鳥学会目録編集委員会, 2012) に従った。

生息状況については 三重県の鳥類 (清水ほか, 2018) に従ったが, 調査地の状況を加味して区分した。

RB: 留鳥, MB: 夏鳥, WV: 冬鳥, PV: 旅鳥

表2. 本調査地における季節ごとの上位優占種.

種名	2018-2019				2019-2020				2020-2021				2021-2022				Total
	spring	summer	autumn	winter	spring	summer	autumn	winter	spring	summer	autumn	winter	spring	summer	autumn	winter	
メジロ	2.5	3.6	12.5	18.9	11.9	4.9	13.8	17.6	16.3	5.8	11.6	27.3	18.5	7.6	10.1	10.1	14.1
ハシビロガモ	24.2	0	0	44.3	16.3	0	2.3	37.4	23.4	0	1.0	15.3	3.4	0	0.3	0.3	12.8
ヒヨドリ	10.9	14.2	24.0	7.4	12.0	11.0	13.0	8.0	10.1	7.6	12.4	10.1	13.5	10.5	13.7	13.7	11.3
ハシボソガラス	8.2	5.3	8.9	3.7	4.7	8.7	18.0	8.1	5.0	18.5	22.2	13.1	8.7	10.5	15.7	15.7	10.3
スズメ	7.4	24.4	4.2	0.4	9.1	13.4	3.9	0	4.6	18.2	7.9	1.8	8.9	19.1	5.7	5.7	7.4
カワラバト (ドバト)	6.0	8.9	13.4	1.0	4.0	16.7	9.8	1.4	4.3	7.1	4.8	1.0	3.7	9.5	8.5	8.5	5.7
カワラヒワ	3.7	1.1	0	2.0	7.4	2.7	1.6	3.2	7.2	3.0	1.3	6.0	10.2	2.3	2.3	2.3	4.5
カイツブリ	5.1	12.5	5.1	2.7	2.6	4.7	3.9	1.9	2.0	1.3	4.7	3.3	3.4	3.9	4.6	4.6	3.6
キジバト	6.5	6.1	7.0	3.2	3.9	4.0	4.4	1.8	2.2	3.0	2.6	2.5	3.8	3.7	2.3	2.3	3.5
ムクドリ	1.6	5.0	0.3	0	2.1	6.8	0.7	0	1.7	17.7	0.5	0	3.1	12.8	5.1	5.1	3.3

数値は調査地における季節ごとの優占度 (%) を示す.

度が高い. ヒヨドリが最優占種であるのは2018年秋季のみであるが調査期間を通して季節ごとの優占度は高い. スズメ *Passer montanus* は夏季に優占度が高くなる傾向がみられた (表2).

1. 本調査で新たに確認された種について

本調査地において過去に行われた調査では1995年に39種 (市川ほか, 1996), 2009年に51種 (日本設計・環境科学, 2010) の鳥類が記録されており, 本調査で新たに確認された鳥類はヒドリガモ *Anas penelope*, キンクロハジロ *Aythya fuligula* (図4a), オオバン *Fulica atra* (図4b), ホトトギス *Cuculus poliocephalus*, コチドリ *Charadrius dubius* (図4c), ノスリ *Buteo buteo*, フクロウ *Strix uralensis*, アカシヨウビン *Halcyon coromanda*, アオゲラ *Picus awokera*, ハヤブサ *Falco peregrinus*, エゾムシクイ *Phylloscopus borealoides*, センダウムシクイ *Phylloscopus coronatus*, オオヨシキリ *Acrocephalus orientalis*, トラツグミ *Zoothra dauma*, アカハラ *Turdus chrysolous* (図4d), イソヒヨドリ *Monticola solitarius*, サメビタキ *Muscicapa sibirica*, キビタキ *Ficedula narcissina*, オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*, マヒワ *Carduelis spinus*, シメ *Coccothraustes coccothraustes* の21種であった.

イソヒヨドリは当館や三重県総合文化センター, 近隣住宅の屋根の上でさえずる姿が確認された. 出現率は18.4%であり, 本調査地ではしばしば見られる種であった. また, 本調査で巣や幼鳥は確認されていないが, 今後は調査地内での繁殖の可能性もある.

オオヨシキリは4月から6月に北の池のヨシが生育する湿地, 口池の東にある空き地の草地でさえずりが確認された. 出現率は13.3%であり, 本調査地では初夏によく見られる種であった. 複数個体確認されることもあるが, 巣や幼鳥はまだ確認されていない.

ヒドリガモ, キンクロハジロ, オオバンについては, 10月から5月におおさん池で単独もしくは少数の群れで確認されており, それぞれ出現率が6.1%, 28.6%, 16.3%であった. 本調査で新たに確認された種であるが, 冬季においてしばしば見られる種であった.

フクロウについては調査日時外に調査地内でさえずりと, ペリット・羽毛が落ちているのが確認された. 2015年9月13日に常緑広葉樹林内で風切羽が落ちており, 調査地内において初めて痕跡が確認されていた. 以降, 2018年から2022年の間に調査地内において羽毛が落ちているのが確認された. 2016年5月23日, 2019年3月23日に調査地内でペリットが落ちているのが確認された. また2022年1月18日にさえずりを確認した. 本種は夜間に活動する種であり, 本調査では調査時間を午前中に設定しているため調査中に確認されなかったと考えられる.

コチドリは調査日時外の2019年11月21日に口池で4羽確認された. ただし2019年10月から12月の間, 口池の水量が非常に少なく, ほとんど湖底が見える状態であった. 今後, 水量が大幅に減少することがない限り本種が口池で確認されることはほとんどないと思われる.

トラツグミは調査日時外の2018年1月21日に常緑広葉樹林内で確認された. 本種は低地から山地の林で繁殖するが, 非繁殖期には低地に移動し公園などでも確認されるため (高野, 2015), 本調査地へも越冬地として飛来したと考えられる.

アカハラは調査日時外の2019年2月19日, 2020年4月16日でも確認された. 生息区分は冬鳥としたが出現率は2.0%と低く, 季節移動の中継地として利用しているとも考えられる.

アオゲラ, アカシヨウビン, エゾムシクイ, センダ

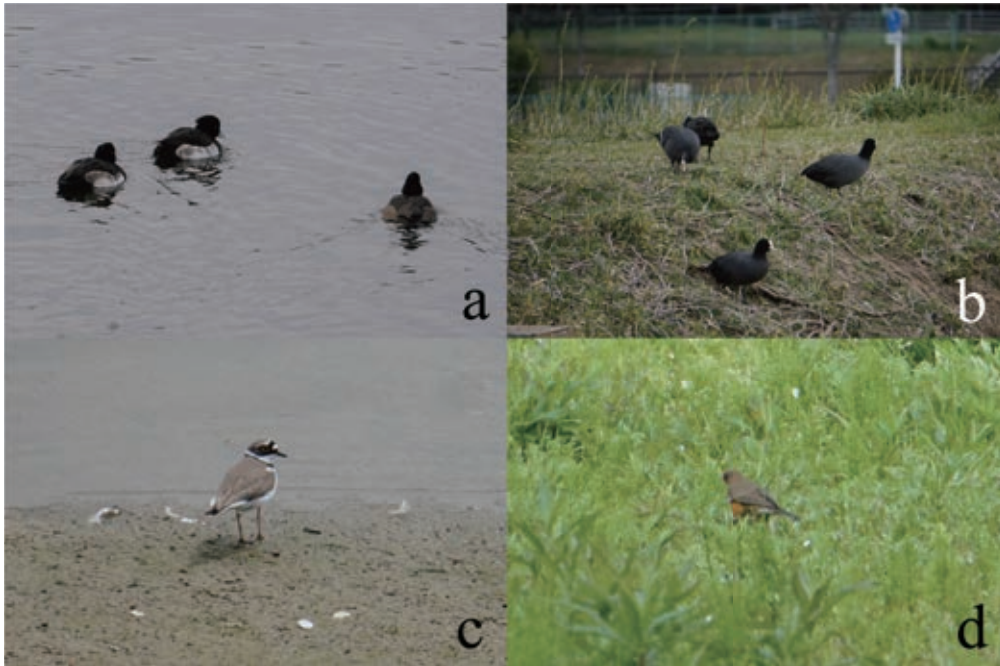


図4. 本調査で新たに確認された鳥類。
 a, キンクロハジロ (2019年12月15日撮影); b, オオバン (2019年3月22日撮影);
 c, コチドリ (2019年4月12日撮影); d, アカハラ (2020年4月16日撮影).

イムシクイ, サメビタキ, キビタキ, オオルリ, マヒワ, シメについては, 本調査地には季節移動の中継地として利用する際に確認されたと思われる。このうちセンダイムシクイは調査日時外の2019年3月28日にさえずりが確認された。また調査日時外においてセンダイムシクイ, サメビタキ, キビタキ, オオルリは当館建物に衝突したのを確認した。

2. 本調査で確認されなかった種について

1995年および2009年の調査で記録され(市川ほか, 1996; 日本設計・環境科学, 2010), 本調査では確認できなかった種はチュウサギ *Egretta intermedia*, アマツバメ *Apus pacificus*, ケリ *Vanellus cinereus*, タシギ *Gallinago gallinago*, イソシギ *Actitis hypoleucos*, ハイタカ *Accipiter nisus*, サシバ *Butastur indicus*, ヒバリ *Alauda arvensis*, メボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas*, ルリビタキ *Tarsiger cyanurus*, タヒバリ *Anthus rubescens*, イカル *Eophona personata*, の12種であった。

このうちシギ類2種は, タシギが2019年2月22日, 3月30日, 4月12日に(稲垣玲弥, 未発表), イソシギが2016年12月17日に(平井ほか, 2017), 調査範囲外の近隣池で記録されており, 調査地周辺に生息し

ていることが確認されている。今後も調査地内で確認される可能性がある。

メボソムシクイについては過去の調査では5月に調査地内でさえずる個体が確認されており(日本設計・環境科学, 2010), 季節移動の個体と考えられる。本調査において確認はできなかったが, メボソムシクイ上種が2018年10月7日, 2019年10月20日, 10月23日, 2020年10月1日に当館建物ガラスに衝突したのを確認した。メボソムシクイ上種の外見からの同定は難しく, これらの個体がメボソムシクイである可能性があり, 今後も調査地内で確認される可能性がある。

ルリビタキ, イカルについては主に山地や森林に生息する種であるが, 冬季は低地でも確認されることがあり(高野, 2015), 今後調査地内において確認される可能性はある。

ケリ, チュウサギについては, 主に水田などでみられることが多い種であり(高野, 2015), 本調査地内にそのような環境はないが近隣地域には生息しているため, 上空を通過するなど今後確認される可能性はある。

アマツバメ, サシバについては過去の調査では季節移動の個体が確認されたと思われる。今後, まれに確認される可能性はあるが, 定期的に確認される可能性

は低いと思われる。

ヒバリ、タヒバリについては、ヒバリは草原・畑・川原などに、タヒバリは川岸・水田・湿った耕地などに生息する種であり（高野，2015），当館の建設にあたり本種の好む環境が改変されたため確認されなかったと考えられる。ヒバリについては近隣地域の水田に生息しているのを筆者が確認しており今後飛来する可能性はあるが、定期的に確認される可能性は低いと思われる。

3. 近隣地域との比較

調査地の近隣では2014年から2017年に三重大学構内（津市栗真町屋町）で33種の鳥類が確認されている（上田ほか，2016，2019）。本調査で確認された鳥類と比較すると、両調査地ともに記録された種類はヒヨドリ、ムクドリ、スズメ、カワラバト（ドバト）など28種で、市街地においてもよく見られる種であった。本調査地のみで確認された鳥類は38種であり、このうち約半数はカモ・サギなどの水辺に生息する種類であるため、ため池の環境がある本調査地のみで記録されたと考えられる。

4. 今後の調査および課題について

今回の調査では66種の鳥類が確認され、新たに21種の鳥類が確認された。ここ近年で調査地に定着していると考えられる種もあり、繁殖状況や個体数の推移を確認していく必要がある。また、夜間に活動する種類が確認されており、夜間調査を実施し生息状況を確認する必要がある。渡りをする鳥はその年により飛来する数変動するため、短期の調査結果による個体数の変化は本調査地の環境改変が原因であるとは断定できない。そのため長期的な調査を行い生息状況の確認していくことが望ましく、今後も本調査地での調査活動に努めていく。

また、当館の周囲500m内に調査地である口池、おおさん池、北の池を含むため池が9ヶ所あり、主にカモ・カイツブリ・サギ類などの水辺を利用する種はこれらの池を生息域として移動していると考えられる。そのため本調査の結果だけでは種・個体数の全容を把握しているとは言えず、調査範囲内だけでなく近隣ため池全体で種数・個体数が変化しているか観察していく必要がある。これは今後の課題である。

謝辞

本調査にあたり、三重県総合博物館の田村香里氏、三重県総合博物館職員の皆様、とくに警備員の皆様には調査地内の鳥類の生息情報や、鳥類の建物への衝突などについてご教授いただいた。三重県総合博物館の大島康宏博士と三重県総合博物館ミュージアムパートナーの昆虫調査参加者の皆様には調査地内に鳥類の痕跡についてご教授いただいた。三重県総合博物館の森田奈菜氏には調査地内の植生についてご教授いただいた。日本鳥学会の川路則友博士には原稿に対して有益なご助言をいただいた。ここに記し厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 平井正志・笹間俊秋・三曾田 明（編）. 2017. 探鳥会報告. しろちどり, 91: 21-24.
- 市川雄二・木村裕之・木村京子. 1996. 三重県センター博物館（仮称）建設予定地の鳥類. *In*: 三重県センター博物館（仮称）建設予定地自然調査報告書. pp.45-48. 三重県自然環境調査会, 津.
- 日本鳥学会目録編集委員会（編）. 2012. 日本鳥類目録 改訂7版. 438pp. 日本鳥学会, 三田.
- 日本設計・環境科学. 2010. 新三重県立博物館予定地自然環境調査報告書. 新県立博物館予定地自然環境調査. 305pp. 三重県, 津.
- 大島康宏・森田奈菜. 2022. 三重県総合博物館ミュージアムフィールドにおけるチョウ類相（昆虫綱；チョウ類）について. 三重県総合博物館研究紀要, 8: 1-21.
- 清水善吉・今堀聖史・市川雄二. 2018. 三重県の鳥類. *In*: みえ生物誌－哺乳・爬虫・両生類, 鳥類. pp. 103-152. 三重自然誌の会, 松阪.
- 高野伸二. 2015. フィールドガイド 日本の野鳥 増補改訂新版. 392pp. 公益財団法人 日本野鳥の会, 東京.
- 上田 衛・鳥丸 猛・長谷川幸子・宮武新次郎・坂本竜彦. 2016. 市街地緑地と都市近郊林における鳥類相の組成. 中部森林研究, 64: 61-64.
- 上田 衛・鳥丸 猛・長谷川幸子・宮武新次郎・坂本竜彦. 2019. 三重県津市における市街地緑地と都市近郊林の鳥類相の比較. 三重大学大学院生物資源学研究科紀要, 45: 1-10.

付表1. ミュージアムフィールドおよび周辺ため池における鳥類調査結果（2018年3月～2019年2月）.

生息 状況	種名	2018-2019																								2018 Mar- 2019 Feb Total	
		Mar		Apr		May		Jun		Jul		Aug		Sep		Oct		Nov		Dec		Jan		Feb			
		4 7:30- 8:20	18 7:20- 8:20	1 7:20- 8:20	17 7:10- 8:20	6 7:20- 8:20	20 7:20- 8:20	4 7:20- 8:20	17 7:10- 8:20	1 7:10- 8:10	14 7:10- 8:10	5 6:00- 7:00	19 7:10- 8:10	3 7:20- 8:10	16 7:10- 8:10	7 7:10- 8:15	21 7:10- 8:15	4 7:10- 8:20	18 7:10- 8:20	2 7:10- 8:20	16 7:15- 8:20	6 7:10- 8:20	21 7:10- 8:20	3 7:10- 8:15	17 7:10- 8:10		
1 RB	コジュケイ							1																		1	
2 WV	ヒドリガモ																										
3 WV	マガモ																										
4 RB	カルガモ	4		8	8	5		1			1	1		2	4		4		1	5	10	3		1		58	
5 WV	ハンビロガモ	66	14	8	50																	5	120	143	80	486	
6 WV	コガモ																										
7 WV	ホシハジロ																			1	1	1				3	
8 WV	キンクロハジロ																1	3	3	4	1					12	
9 RB	カイツブリ	1	5	11	6	6	9	8	7	7	11	6	6	2	3	3	4	1	3	4	7	4	2	2	2	120	
10 RB	キジバト	12	7	5	8	5	5	2	5	2	4	3	6	3	5	2	2	5	5	2	2	8	2	4	7	111	
11 RB	アオバト																		1							1	
12 RB	カワラバト	6	6	3	13	6	2	11	8	8		2	3	3	8	5	3	4	19		4	2		2	118		
13 RB	カワウ	1	1	3	2	2				1												2	6	1		19	
14 RB	ゴイサギ																										
15 RB	アオサギ		1		1	1			2		1	1		1												8	
16 RB	ダイサギ			1								1	5	1	1											9	
17 RB	コサギ													1	1											2	
18 RB	バン																										
19 WV	オオバン	1	1	1																				1	1	5	
20 MB	ホトトギス																										
21 RB	ミサゴ																				1					1	
22 RB	オオタカ																										
23 MB	アカショウビン																										
24 RB	カワセミ				1				1																	2	
25 RB	コゲラ	3	4	1	2	2		2	1	1			2	1	2	2	2		3	3	2	1	2	5	4	45	
26 RB	アオゲラ				1	1																				2	
27 RB	モズ		1															1	1	1	1				2	7	
28 RB	ハンボソガラス	7	13	12	8	7	10	2	3	3	3	7	1		3	7	4	6	8	6	4	5	5	4	5	133	
29 RB	ハンフトガラス	1		1				1						4	3				2	1	1	1	2			17	
30 RB	ヤマガラ		1			4								1	1	4			3		2	3	7	4	8	38	
31 RB	シジュウカラ	1	6		4	2		3	1	1					7	2										27	
32 MB	ツバメ			3	1	8	7	9	5	5	1	1	2													42	
33 RB	ヒヨドリ	8	11	14	18	11	10	15	14	8	4	4	6	6	11	11	10	22	15	15	9	9	8	9	8	256	
34 RB	ウグイス	1	2	2	3		2	1	1	1	1								2							16	
35 RB	エナガ				1																					1	
36 PV	エゾムシクイ																										
37 RB	メジロ	5	2	2	4	1	2	5	2			6			1	16	10	12	23	17	23	21	38	26	216		
38 MB	オオヨシキリ						1	1																		2	
39 RB	ムクドリ			4	2	3	2	4	14							1										30	
40 WV	シロハラ	1	1	3																1					2	8	
41 WV	アカハラ				1																					1	
42 WV	ツグミ	1	5	6																	1	1		1	4	19	
43 WV	ジョウビタキ		1																	1	1	2	2	2	1	12	
44 RB	イソヒヨドリ					1																				1	
45 PV	キビタキ														1											1	
46 RB	スズメ	11	2	5	5	19	23	22	11	15	13	7	20	4	4		2	3				3			169		
47 RB	キセキレイ	1																								1	
48 RB	ハクセキレイ				1	1	1	1	2	2					3		2	3	2	1	1			1	1	22	
49 RB	セグロセキレイ	1		1	1	1			1																	5	
50 WV	ビンズイ			2			1																	1		4	
51 RB	カワラヒワ	5	7	4	4	1	4	2	1			1								7		1	3	5	45		
52 WV	マヒワ																										
53 WV	シメ																										
54 RB	ホオジロ	3		1	1															2					1	8	
55 WV	カシラダカ				3																		2	2		7	
56 WV	アオジ	2	6																						7	20	
	総種数	22	21	23	22	20	14	19	15	15	9	11	12	11	14	10	13	11	17	15	16	17	12	19	16	45	
	総個体数	142	97	101	146	84	82	92	62	71	40	34	62	27	54	35	55	58	84	75	65	75	180	233	157	2111	

種名・種の配列については日本鳥類目録改訂7版（日本鳥学会目録編集委員会，2012）に従った。
生息状況については三重県の鳥類（清水ほか，2018）に従ったが，調査地の状況を加味して区分した。
RB：留鳥，MB：夏鳥，WV：冬鳥，PV：旅鳥

付表3. ミュージアムフィールドおよび周辺ため池における鳥類調査結果 (2020年3月～2021年2月).

生息 状況	種名	2020-2021												2020 Mar- 2021 Feb Total													
		Mar			Apr		May		Jun		Jul		Aug		Sep		Oct		Nov		Dec		Jan		Feb		
		6:30-7:35	7:10-7:30	7:30-7:40	6:00-7:10	5:50-7:10	5:50-7:10	5:20-7:10	6:00-6:25	5:00-7:05	5:00-6:00	5:00-6:00	5:00-6:00	5:00-6:00	5:30-6:40	5:30-6:40	6:00-7:05	6:00-7:10	6:10-7:15	6:35-7:40	6:45-7:40	7:00-8:00	6:45-7:50	6:50-8:00	6:45-7:50	6:30-7:40	
1 RB	コジュケイ																										
2 WV	ヒドリガモ																										
3 WV	マガモ																										
4 RB	カルガモ	1	2		2	7	2	1					1		2						2	6		1		3	
5 WV	ハンビロガモ	175	14		23														4	2			2	2	54	59	
6 WV	コガモ	2																									2
7 WV	ホシハジロ	2				2																2			1		7
8 WV	キンクロハジロ	2	5		6	6	4										2		4	1				2	3	1	36
9 RB	カイツブリ	3			4	4	3	4		2	3	1	2	6	3	5	5	3	7	4	4	4	2	5	5	5	80
10 RB	キンバト	5	3	3	3	1	2	3	3		3	4	8	3	5	3	2	2	1	5	2	2	2	2	4	4	73
11 RB	アオバト														1												1
12 RB	カワラバト	5	1	2	6	2	7	16	10	11	6	5	11	7	2	10	2	4	5	3	3	2					120
13 RB	カワウ		1	3	2																	1	5	1	1	1	15
14 RB	ゴイサギ										1		1														2
15 RB	アオサギ					1	1	2		1	2	1		1													9
16 RB	ダイサギ									1			3	51	2	1											58
17 RB	コサギ												1				1										2
18 RB	バン				1																						1
19 WV	オオバン	2	1		2																	1					6
20 MB	ホトトギス																										
21 RB	ミサゴ	1																									1
22 RB	オオタカ				1				1																		2
23 MB	アカショウビン																										
24 RB	カワセミ				1	2	1		1	2		3	2	1	1	2	1										17
25 RB	コゲラ	1	3	2	2	2	4	3	3	3	2	1	2	3	2	1	1	4	3	1	3	2	2	1	3	54	
26 RB	アオゲラ																	1				1					2
27 RB	モズ		1	1	1												2	3	1	1							10
28 RB	ハシボソガラス	4	10	5	5	7	8	6	7	22	28	8	47	23	45	20	18	23	9	16	14	13	19	20	18	395	
29 RB	ハシブトガラス	1	2	2	2	1	1			2		2		1	1	1	1		1		1	1	1	1	1	22	
30 RB	ヤマガラス	2	3	2	2		1	2	4	7	2		5	5	5						3					53	
31 RB	シジュウカラ	2	1	7	2	3	6	5	4	8		2	8	4	3	10	8	14	4	8	8	5	5	1		118	
32 MB	ツバメ				3	8	1	4	5	7	5	3	1														37
33 RB	ヒヨドリ	15	10	6	19	20	12	10	11	12	5	9	9	4	9	8	17	18	21	20	12	13	9	10	13	292	
34 RB	ウグイス	3	2	1	2		2	2	2	1	2	1					1	1		1	2	1	2	1	1	28	
35 RB	エナガ	4	3	2	2	5	2															8	2			29	
36 PV	エゾムシクイ																										
37 RB	メジロ	28	27	28	34	18	8	5	3	5	9	5	13	4	5	7	9	20	27	31	31	43	25	45	34	464	
38 MB	オオヨシキリ					1	2	2																			5
39 RB	ムクドリ			4	7	4		7	54	18	17	11				3											125
40 WV	シロハラ	1	1	1															3	1		1				2	
41 WV	アカハラ					1																					1
42 WV	ツグミ	3	5	6	5	3													3	2	4	2	3	6	4	46	
43 WV	ジョウビタキ	1	1	1														3	3	1	1	1	1	1	3	17	
44 RB	イソヒヨドリ					1	1					1	1			1											5
45 PV	キビタキ																										
46 RB	スズメ		2	1	5	6	10	18	13	29	16	19	33	12	12	3	5	8	9		3	5		3	3	215	
47 RB	キセキレイ														1								1				2
48 RB	ハクセキレイ		2		2	1		2		2					1	3	1	4	1		2	2				23	
49 RB	セグロセキレイ					1	2							2		1	1								1		8
50 WV	ビンズイ																										
51 RB	カワラヒワ	8	13	2	4	14	15	9	9	2	5	2				3		3	2	8	3	6	11	11	7	137	
52 WV	マヒワ																										
53 WV	シメ																										
54 RB	ホオジロ				1												1							1			3
55 WV	カシラダカ																										
56 WV	アオジ																									2	2
	総種数	21	22	19	26	23	20	16	20	16	14	19	14	16	20	17	20	17	17	19	20	19	17	22			45
	総個体数	265	112	75	152	115	92	96	86	166	120	79	153	130	99	80	84	115	115	102	105	120	95	172	172		2900

種名・種の配列については日本鳥類目録改訂7版(日本鳥学会目録編集委員会, 2012)に従った。
 生息状況については三重県の鳥類(清水ほか, 2018)に従ったが, 調査地の状況を加味して区分した。

RB: 留鳥, MB: 夏鳥, WV: 冬鳥, PV: 旅鳥

研究ノート

2020年に伊勢湾岸に死亡漂着したアカウミガメ *Caretta caretta* の消化管内容物について

The contents of the digestive tracts of the loggerhead turtles, *Caretta caretta*, stranded off the coast of Ise Bay in 2020

米川弥寿代¹⁾・田村香里²⁾

¹⁾ 〒510-0263 三重県鈴鹿市郡山町2000-4 ウミガメネットワーク三重

²⁾ 〒514-0061 三重県津市一身田上津部田3060 三重県総合博物館

キーワード：ストラランディング，食性，魚食，漁法，三重県

(2022年10月31日 受付)

Yasuyo YONEKAWA^{1)*}, and Kaori TAMURA²⁾

¹⁾Sea Turtle Network Mie

Kohriyama 2000-4, Suzuka, Mie 510-0263, Japan

²⁾ Mie Prefectural Museum

Isshinden-kouzubeta 3060, Tsu, Mie 514-0061, Japan

*Corresponding author: umigamenetmie@gmail.com

Abstract

In 2020, we surveyed the contents of the digestive tracts of six loggerhead turtles, *Caretta caretta*, stranded off the coast of Ise Bay. Results of the investigation confirmed that all of them ate fishes while some also ate crustaceans, mollusks, cephalopods starfish, and a small amount of plastic debris. It was suggested that these turtles ate fishes in the fishing nets netted as by-catch in Ise Bay.

Key words: stranding, food habit, fish eating, fishing method, Mie Prefecture

はじめに

アカウミガメ *Caretta caretta* は温帯から亜熱帯にかけて生息し、現生する7種のウミガメ類の中で、例外的に温帯域で産卵する種である(松沢, 2012)。筆者のひとり米川が代表を務めるウミガメネットワーク三重(以下ネットワーク)は、2014年に発足した市民団体で、伊勢湾に面する三重県四日市市から津市の海岸で、毎年ウミガメの調査・保護活動を行っている。産卵のために三重県の沿岸にやってくるアカウミガメ

の中には混獲等で死亡するものがあり(谷口・亀崎, 2011; 若林ほか, 2021)、伊勢湾岸にも多数が死亡漂着している(図1)。筆者らは2019年に死亡漂着し、消化管内容物が分析できた6個体すべてから魚類を確認しており(米川・田村, 2022)、これは、自然条件下ではすばやく動く魚類を捕食できる可能性は低いとされる報告(石原, 2012)とは異なる。一方、定置網で混獲されたアカウミガメは漁網内で魚類を摂食しているとの報告(岩本ほか, 2006)もあり、また、国外で



図1. 2020年に伊勢湾岸に死亡漂着したアカウミガメ。
 a, 2020年5月30日三重県鈴鹿市北長太町；b, 背甲の前部に位置する付着物がはがれた漂着个体（2020年8月8日鈴鹿市寺家）；c, 頭部に擦り傷がある漂着个体（2020年9月4日津市河芸町）。矢印は付着物がはがれた箇所を示す。

は、本種は同じ海域で操業する漁業によって混獲され、廃棄された魚類を摂食しているとする報告（Di Benedetto *et al.*, 2015）もあるため、伊勢湾におけるアカウミガメが魚類を摂食する条件について明らかにするべく、さらなる調査事例の蓄積に加えて、伊勢湾内の漁業の操業状況についても調査を行った。

本報では2020年に死亡漂着した9個体のうち、確認できた消化管内容物について報告するとともに、伊勢湾内で操業する漁法についても言及し、湾内におけるアカウミガメの魚類摂食条件についても若干の考察を行う。

材料と調査方法

調査範囲は三重県四日市市から津市までの伊勢湾岸の砂浜で、調査期間は2020年5月から9月までである。津市河芸町から津市白塚町の海岸については、5月から8月までの期間は原則として2日に1度、踏査した。それ以外の場所については、ネットワーク会員や地元住民、釣り人、三重大学ウミガメ・スナメリ調査・保全サークル「かめっぷり」から情報提供を受けた際に現地を確認した。ウミガメ類の死体を発見した場合は、亀崎（1994）に従って外部形態から種を特定し、ノギスで標準直甲長および直甲幅を測定した。その後、解

剖して消化管を三重県総合博物館に持ち帰り、冷凍保管し、後日、解凍して内容物を取り出した。取り出した内容物は、水洗したのち自然乾燥させた。本論ではこの自然乾燥重量を乾燥重量とし、種同定のために、液浸標本とした一部の消化管内容物は分析対象から除外した。得られた消化管内容物については、目視により魚類、甲殻類、ヒトデ類、貝類、人工ごみ、およびその他の6分類に選別し、可能な範囲で同定を行った。なお、選別不能なものはその他に含めた。なお、魚類骨の部位名称は、木村（2010）に準じた。

また、伊勢湾内で行われている漁とその数については、農林水産省が公開している「2018年漁業センサス第3巻海面漁業に関する統計（市区町村編）」（<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003420677>, 2022年10月26日閲覧）より、同時期に伊勢湾内で操業している経営体数やその漁法についてまとめた。

結果と考察

調査期間を通じて死亡漂着を確認したウミガメ類は9個体であり、すべてアカウミガメであった。各個体の標準直甲長、直甲幅、発見日と漂着場所、消化管調査部位、および消化管内容物を表1に示す。これらのうち6個体を解剖し、消化管の内容物を分析した。その平均標準直甲長は789.7 mm (range: 712-891 mm)であった。消化管内容物の平均乾燥重量は、27.2 g (4.0-70.0 g)であった。

判別できた内容物について、乾燥重量では魚類の出現頻度（調査個体数に対する各品目が検出された個体の割合）が最も高く、100%、次いで、甲殻類が83.3% (5/6)、貝類が66.7% (4/6)、頭足類33.3% (2/6)、ヒトデ類、海藻類がそれぞれ16.7% (1/6)であった。魚類については、骨および鱗条、鱗片を確認し、ボラ類の脊椎骨、鱗片が確認できた（図2）。甲殻類では、カニ類の外皮、フジツボ類の周殻、貝類では、バイ *Babylonia japonica*、アカガイ *Anadara broughtonii* を確認した。頭足類はイカ類の顎板を確認した。ヒトデ類は骨片を確認した。人工ごみは、人工繊維と硬質プラスチックを確認した。魚類の乾燥重量が0.1 g未満の1個体を除いた5個体では、消化管内容物全体の39～96%を魚類が占めた。

前報（米川・田村, 2022）の結果と同様に、消化管内容物を分析できたすべての個体が魚類を摂食してお

表1. 2020年に伊勢湾岸に死亡漂着したアカウミガメの外部計測値と消化管内容物。

No.	計測値 (mm)		発見日	漂着場所	調査部位	内容物の乾燥重量g (全重量に占める割合%)					計	
	標準直甲長	直甲幅				人工ごみ	魚類	甲殻類	ヒトデ類	貝類		その他
1	ca. 850	未計測	8月25日	鈴鹿市江島町	e, g, i	67.3 (96.1)	0.9 (1.3)	1.8 (2.6)	+	+	+	70.0
2	774	629	7月18日	津市栗真町屋町	g, i	+	+	+	+	+	+	57.6
3	778	628	7月26日	津市阿漕町津興	e, g, i	16.5 (94.8)	0.9 (5.2)	+	+	+	+	17.4
4	712	586	8月2日	津市末広町	e, i	3.6 (39.1)	1.5 (16.3)	2.4 (26.1)	+	+	+	9.2
5	835	676	8月8日	鈴鹿市寺家	e, g, i	3.7 (78.7)	+	+	+	+	+	4.7
6	891	701	9月4日	津市河芸町	i	3.3 (82.5)						4.0
7	748	589	5月30日	鈴鹿市北長太町	-							
8	不明	不明	7月1日	津市栗真町屋町	-							
9	不明	不明	8月9日	鈴鹿市南若松	-							

No.7の内容物については未調査。No.8は発見後流失、No.9は損壊した状態で漂着のため計測および調査不能。

調査部位：e, 食道；g, 胃；i, 腸管。乾燥重量において+は0.1 g未満であることを示す。

内容物において、その他は頭足類、海藻類を含む。サンプルの一部はDNA分析のため、液浸標本とし、表記の乾燥重量には含まれない。



図2. 伊勢湾岸に死亡漂着したアカウミガメの消化管内容物。

a, 魚類の鰓蓋骨; b, c, 魚類の脊椎骨; d, 魚類の鱗条; e, ボラ類の鱗片; f, ボラ類の脊椎骨; g, ボラ類の腰帯と腹鱗棘; h, 魚類の尾骨; i, 魚類の歯骨; j, ヒトデ類の骨片; k, イカ類の顎板; l, 人工ごみ (硬質プラスチック); m, 甲殻類の外皮; n, フジツボ類の周殻; o, バイの殻片; p, アカガイの殻片。

り、内容物のほとんどを魚類が占める個体もあった。今回調査した個体が生きた魚類を捕食したのか、死体を摂食したのかは依然不明であるが、調査個体すべてで魚類を確認したことから、自然条件下ではなく、特殊な条件下での摂食の可能性がある。

また、今回調査した9個体のうち、背甲に全ての鱗板が残っていた3個体では、頭部、および背甲の前部に位置する鱗板の藻やフジツボなどの付着物が不自然に剝がれていた (図1b, c)。これらの個体は漁網で強く擦られた可能性があり、混獲によって死亡したのかもしれない。さらにこのことは、高頻度の魚類摂食が混獲という特殊な条件下で発生した可能性も示唆する。

石原ほか (2014) によると、ウミガメの混獲頻度が高い漁法は、大型定置網、小型定置網、刺網、底ひき網、船びき網、延縄、まき網、釣り、ひき網の9漁法とさ

れる。伊勢湾沿岸では、三重県では木曾岬町、桑名市、川越町、四日市市、鈴鹿市、津市、松阪市、明和町、伊勢市、鳥羽市の10市町、愛知県では伊勢湾に面した8市町村のうち、美浜町、南知多町、常滑市の3市町で漁が行われている。これらの市町で多く行われている漁は、上記9漁法のうち、小型底びき網、船びき網、その他の刺網、その他の釣であり (表2)、大型定置網は伊勢湾内にはない。若林ほか (2021) でも報告されている中型定置網、および小型定置網による漁についても、湾外での漁を含む鳥羽市を除く三重県と愛知県を合わせて34と伊勢湾内で多くはなく、影響は少ないと推測される。一方、伊勢湾内で多く行われている1隻、あるいは2隻の船で網をひき、魚を捕獲する小型底びき網や船びき網は、誤ってウミガメが漁網内へ侵入しやすく、さらにアカウミガメが伊勢湾内を回遊する4月から11月までの時期に漁が行われる

表2. 伊勢湾内で操業する漁業経営体数と漁法の種別.

漁法	三重県										計	
	愛知県					三重県						
	美浜町	南知多町	常滑市	桑名市	四日市市	鈴鹿市	津市	松阪市	明和町	伊勢市	鳥羽市*	
小型底びき網	19	116	82	73	11	38	57	7	11	11	45	470
船びき網	1	98	0	18	9	33	14	0	0	0	27	200
その他の刺網	13	132	32	3	2	10	0	10	1	32	233	468
その他の釣	15	177	14	0	0	1	0	2	1	2	286	498
小型定置網	16	9	5	1	0	2	1	0	0	0	17	51
大型定置網	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

2018年漁業センサス第3巻海面漁業に関する統計(市区町村編)をもとに作成。数字は経営体数。*湾口部に行われず、伊勢湾外で行われる漁業を含む。上記市町の他に木曾岬町と川越町でも少数の経営体が操業しているが、個人又は法人その他の団体に關する守秘のため、統計数値が公表されていない。

ため、混獲による特殊な環境を作り上げている可能性がある。

アカウミガメの死因や魚類の摂食条件については今後も調査を継続していく予定である。

謝辞

本調査を実施するにあたり、三重県津農林水産事務所水産室の高木 勲氏と愛知県水産試験場漁業生産研究所の植村宗彦氏には、伊勢湾内で行っている各県の漁業の状況や漁獲量等をご教授いただいた。三重県立特別支援学校玉城わかば学園の中野 環氏には、貝類の同定をしていただいた。志摩半島野生動物研究会の若林郁夫氏には、ウミガメの解剖方法についてご指導いただいた。道の駅紀宝町ウミガメ公園の伊藤柗也氏には、ウミガメの生態や部位の名称についてご教授いただいた。三重県総合博物館研究協力者の佐野 明氏には、原稿をまとめるにあたり数々の助言をいただいた。また、死亡漂着したウミガメ類の調査を共同で行っている三重大学ウミガメ・スナメリ調査・保全サークル「かめっぶり」のみなさま、ウミガメ類の死亡漂着についてご連絡をいただいた地域のみなさま、解剖と消化管内容物の取り出し作業にご協力いただいた三重県総合博物館の稲垣玲弥氏とウミガメネットワーク三重の会員のみなさまに心から感謝申し上げます。

引用文献

- Di Benedetto, A. P. M., de Moura, J. F. and Siciliano, S., 2015. Feeding habits of the sea turtles *Caretta caretta* and *Lepidochelys olivacea* in south-eastern Brazil. *Marine Biodiversity Records*, 8: 1-5.
- 石原 孝. 2012. 生活史 成長と生活場所. *In*: 亀崎直樹 (編). ウミガメの自然誌—産卵と回遊の生物学. pp. 57-83. 東京大学出版会, 東京.
- 石原 孝・亀崎直樹・松沢慶将・石崎明日香. 2014. 漁業者への聞き取り調査から見る日本の沿岸漁業とウミガメの関係. *野生生物と社会*, 2: 23-35.
- 岩本太志・亀崎直樹・松沢慶将・石原 孝・日野明德. 2006. 室戸岬沿岸に来遊するアカウミガメ (*Caretta caretta*) の摂餌特性. *爬虫両棲類学会報*, 2006(1): 53-54.
- 亀崎直樹. 1994. 種類. *In*: 紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会 (編). ウミガメは減っ

- ているか～その保護と未来～. pp. 4-5. 紀伊半島ウミガメ情報交換会, 田辺.
- 木村清志(監). 2010. 新魚類解剖図鑑. 216pp. 緑書房, 東京.
- 松沢慶将. 2012. 繁殖生態. *In*: 亀崎直樹(編). ウミガメの自然誌-産卵と回遊の生物学. pp. 115-140. 東京大学出版会, 東京.
- 谷口真理・亀崎直樹. 2011. 熊野灘に出現するウミガメ類. 南紀生物, 53: 65-67.
- 若林郁夫・中村みつ子・半田俊彦・岡 由佳理. 2021. 熊野灘北部海域の定置網によるウミガメの混獲. 南紀生物, 63: 133-138.
- 米川弥寿代・田村香里. 2022. 2019年伊勢湾岸に死亡漂着したアカウミガメ *Caretta caretta* の消化管内容物による死亡原因推定の試み. 三重県総合博物館研究紀要, 8: 31-35.

研究ノート

三重県における雑煮の地域的特色 —「お雑煮プロジェクト」のデータ分析を通して—

Regional characteristics of “Ozoni” in Mie Prefecture, Japan:
Based on the results of data analysis of “Ozoni Project”

門口実代・福田良彦

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060 三重県総合博物館

キーワード：雑煮，食文化，三重県

(2022年10月28日 受付)

Miyo KADOGUCHI* and Yoshihiko FUKUTA

Mie Prefectural Museum, 3060 Isshinden-kouzubeta, Tsu, Mie 514-0061, Japan.

*Corresponding author: kadogm00@pref.mie.lg.jp

1 はじめに

三重県の雑煮は、県内の地域ごとに多様であるとともに、全国的な視野からみると、東日本と西日本の両方の特徴を有しているといえる。たとえば、餅の形状については、東日本は角餅、西日本は丸餅が多い傾向にあるが、三重県には両方が分布している。汁の種類も同様で、すまし汁の家庭もあれば、味噌汁の家庭もある⁽¹⁾。三重県の雑煮分布からは、東西の食文化の接点としての三重県の位置づけが浮かび上がってくる。

三重県の雑煮研究として、もっともまとまったものに「三重雑煮考-郷土の民衆文化を雑煮から見る-」（大川，2000）がある。大川は、文献等を用いて、大正時代から昭和10（1935）年頃までの期間を対象として、餅の形状、味付けのベース、具の種類、餅の原料、餅の調理方法という5つの指標から、県内の雑煮の特徴を分析している。そして、県内の雑煮からは東西文化の分水嶺として位置づけられる三重県の姿がみてとれるとして、その多様性に言及している。図1は、大川が各地域の特徴を表しているとした9種類の雑煮（大川，2000）について、2011年時点においても、その作り方を継承している家庭で調理したものである。

さて、大川が対象とした時代から80年以上経過し



図1. 9つの地域の雑煮。

た現在、三重県の雑煮をめぐる状況はどのように変わっているのだろうか。以前とは生活スタイルや家族構成が変わり、また進学や就職、通婚などの影響で人の移動がより活発になってきたことにより、雑煮の地域的分布や内容に変化がもたらされていると予想される。そこで、三重県総合博物館において、三重県全域の雑煮をめぐる現状を明らかにすることを目的に、2011年度に「お雑煮プロジェクト」と名付けた調査を実施した。

本稿では、この調査によって得られたデータをもとに、雑煮の汁の種類、餅の形、具材についての分析に加えて、北勢、中勢、松阪、南勢、伊賀、東紀州という6つの地域別にその特徴を検討し、三重県における雑煮の地域的特色を考察した⁽²⁾。

2 「お雑煮プロジェクト」における調査の概要

「お雑煮プロジェクト」は、三重県総合博物館（2014年開館）が子どもたちにとって親しみやすい場所になるよう、開館前に実施してきた「新博ティーンズプロジェクト」の一環として行った。調査では、社会科の授業で地域のくらしや年中行事について学習する、小学校3・4年生を中心に調査への参加を呼びかけた。参加者は、その年の正月に自宅で食べた雑煮について写真等の記録をとり、家族から聞いた内容を「お雑煮

調査カード」(図2)に記入した。調査カードの表面に、現住所、雑煮を作る人、作る人の出身地、汁の種類、餅の形、餅を焼くか、および具材の記入欄を、また裏面にはエピソードの自由記入欄と雑煮の写真を添付する欄を設けた。そして、収集した調査カードは、子どもたちとともに分類・整理作業を行い、餅の形と汁の種類分布を表した「お雑煮マップ」を作成した。年度末には成果報告書（みえミュージアム活性化事業実行委員会、2012a）と、子ども向けの報告冊子（みえミュージアム活性化事業実行委員会、2012b）を刊行したが、詳細な分析にまでは及ばなかった。

調査カードの総数は3,491件であった。収集した調査カードの数は、市町により差があるものの、北は木曾岬町から南は紀宝町まで、県内ほぼすべての市町から調査カードを収集することができた。年代は、9割以上が小学生からの回答であった。なかには、県外の雑煮についての貴重な報告例もあったが、本稿では三重県内における雑煮の現状を考察することを目的としたため、県外在住者の回答や、県外の祖父母宅などで雑煮を食べた例、あるいは無回答に近い例は除外し、3,260件を有効回答とした。また、雑煮は三が日を中心に、数日にわたって食べる家もあるが、本稿では1月1日の朝（元旦）に食べる雑煮に限定して分析を行った。

図2. 「お雑煮調査カード」.

以下、調査カードの質問項目の順に従って結果を示すが、現在は合併により面積が拡大した市町もあるため、より地域的な特色が表れると考えられる、平成の合併前の旧 69 市町村を指標として分析する⁽³⁾。また、現代においては家族の好みの違いなどにより、元旦に複数の種類の雑煮を作るという家庭もある。こうした事例について、具材の分析では複数の事例として扱ったため、項目によって分析総数が異なることを注記する。

3 調査データの分析

(1) 正月に雑煮を作るか

まず、「正月に雑煮を作るか」という設問に対して、「作る」3,164 件、「作らない」96 件となり、「作る」という回答が全体の 97.1% を占めた。食生活や行事のあり方が大きく変わってきた現代においても、これほど多くの家庭で正月の雑煮が作られている状況は注目される。市町村別の回答をみても、とくに際立って「作らない」という回答が多い地域は見受けられず、どの地域でも概して雑煮が作られている様子うかがえる。

「外国人の家庭なので出身国の正月料理を作る」や、「家族が雑煮を好まない」などが雑煮を作らない理由として挙げられていたが、ここで着目したいのは、勢和村を中心とした一部地域にみられる「歯固め」と呼ばれる習わしである⁽⁴⁾。歯固めは、勢和村の丹生・上出江・下出江・色太・車川などで行われてきたという報告があるが、焼いた餅に干し柿をはさむという例もあれば、逆に干し柿を割いて、その間に餅をはさむという例もある(伊勢民俗学会, 1985)。いずれにしても、元旦はこの歯固めを食するのが習わしであり、雑煮を食べることはしない。ただし、2日以降の正月期間中には雑煮を食べる機会があるため、餅を食べることを禁忌とする「餅なし正月」とは性格の異なるものである。

図 3 は、1951 年生まれの女性が、勢和村下出江の実家で行っていた歯固めを再現したものである。この女性の実家では、干し柿を半分に分けて種を取り出し、その間に焼いた角餅をはさんで一緒に食べたという。興味深いのは、実家の隣近所の家々において、かならずしも歯固めが行われていたわけではなく、同一集落においても歯固めの習慣がある家は限定されるという点である。



図 3. 歯固め (多気町土屋).

(2) 雑煮の調理者

次に、図 4 から雑煮の調理者について県全体 (n=3164) の傾向をみると、「母」50.1%、「祖母」33.0%、「母、祖母」8.6%と、母および祖母が作るという回答が9割を超えている⁽⁵⁾。「母、祖母」という回答には、母親と娘という例と、義母と嫁という例があると思われるが、上の世代から下の世代へと、その家の雑煮が継承されると考えられる。また、エピソード欄の記述をみると、家でどのような雑煮が作られるかという点では、調理者である母および祖母の実家で作られてきた雑煮の影響を色濃く受ける傾向がある。

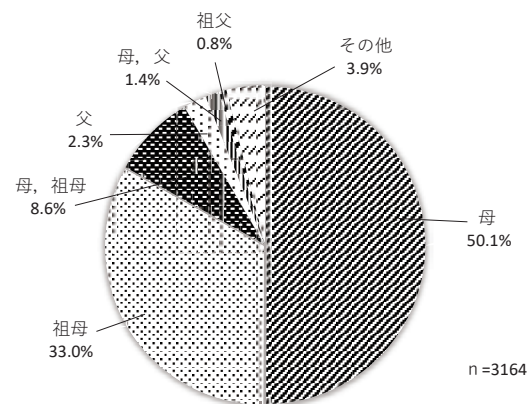


図 4. 調理者の割合.

調理者について祖母に対する母の比率 (母 / 祖母) を見ると、桑名市 (2.04)、四日市市 (1.69)、鈴鹿市 (2.10)、津市 (1.66) など、人口の多い地域では、祖母に比べ母が作る比率が 1.5 倍以上となった一方、安濃町 (0.67)、嬉野町 (0.70)、上野市 (0.85)、大王町 (0.75)、熊野市 (0.60) などでは、調理者は母より祖母の方が高い傾向にあった⁽⁶⁾。後者の地域では、祖父母と同居している家庭や、正月を祖父母とともに過ごす家庭が多いと考えられるため、祖母の比率が高かったと推察される。

このように、回答の大半は母と祖母であるが、そのほか祖父や父などの男性が調理をおこなうという回答もある。具体的には、父が関与する例が121件、祖父が関与する例が29件あり⁽⁷⁾、数は多くはないものの、見逃すことはできない。なぜなら、雑煮は本来、神に供えた餅を下ろしてきて、季節の野菜とともに調理するものであり、日常の料理を担うのが女性であっても、雑煮は家長の男性が調理するのが習わしだからである(門口, 2019)。元日の早朝に家長が若水を汲み、その水を使って茶を沸かしたり、雑煮を作ったりする家庭もある。調査カードのエピソード欄にも、「正月のおぞうには、父(家の当主)が作ることになっています」(伊賀市波敷野)⁽⁸⁾、「うちでは、父がおぞうをつくることになっています」(松阪市御麻生菌町)といった記述がみられ、雑煮にかかわる習俗が継承されていることがうかがえる。

(3) 汁の種類と餅の形 [表1・2]

雑煮を「作る」と回答のあった3,164件について、地域別に汁の種類と割合を示した表1と、同様に餅の件数と割合を示した表2から、三重県内の雑煮の傾向を考察する。

表1. 地域別汁の種類.

地域		すまし汁	味噌汁	その他	合計
北勢	小計	1140	117	23	1280
北勢	割合	89.1	9.1	1.8	100.0
中勢	小計	306	237	17	560
中勢	割合	54.6	42.3	3.0	100.0
松阪	小計	239	73	6	318
松阪	割合	75.2	23.0	1.9	100.0
南勢	小計	494	76	24	594
南勢	割合	83.2	12.8	4.0	100.0
伊賀	小計	157	202	11	370
伊賀	割合	42.4	54.6	3.0	100.0
東紀州	小計	35	5	2	42
東紀州	割合	83.3	11.9	4.8	100.0
県全体		2371	710	83	3164
県全体	割合	74.9	22.4	2.6	

表2. 地域別餅の形.

地域		角餅	丸餅	花びら餅	その他	合計
北勢	小計	1102	132	2	44	1280
北勢	割合	86.1	10.3	0.2	3.4	100.0
中勢	小計	463	74	1	22	560
中勢	割合	82.7	13.2	0.2	3.9	100.0
松阪	小計	245	61	0	12	318
松阪	割合	77.0	19.2	0.0	3.8	100.0
南勢	小計	307	254	1	32	594
南勢	割合	51.7	42.8	0.2	5.4	100.0
伊賀	小計	62	259	29	20	370
伊賀	割合	16.8	70.0	7.8	5.4	100.0
東紀州	小計	26	14	0	2	42
東紀州	割合	61.9	33.3	0.0	4.8	100.0
県全体		2205	794	33	132	3164
県全体	割合	69.7	25.1	1.0	4.2	

まず、汁の種類では、県内全域ですまし汁が74.9%と高い割合を示し、とりわけ北勢地域では89.1%と顕著に割合が高くなっている。一方、味噌汁の雑煮が多いのは伊賀地域(54.6%)⁽⁹⁾であり、中勢地域(42.3%)でも一定数、味噌汁との回答があった。また、あずきの雑煮がみられることは、三重県の特徴の一つであるが、鳥羽市を中心とした地域に限定されるため、地域別の項で詳述する。そのほか、かつてはみられなかったような、コーン味やカレー味、中華スープ、鶏がらスープ、あんかけ、お吸い物の素を使ったものなど、家族の好みを反映した雑煮や新しい味に挑戦した雑煮が作られる例がでてきたのは、現代的な様相である。

続いて、餅の形については、全域的に角餅が69.7%と割合が高く、とくに北勢地域(86.1%)と中勢地域(82.7%)では8割を超えている。一方、丸餅が多いのは、伊賀地域(70.0%)である。

また、餅の形について特色があるのは、伊賀地域の花びら餅(7.8%)である。花びら餅は丸餅を上から押し、中央部分を少しくぼませた餅のことを指し、かつてはムシロの上で押したので、餅に網目がついたという(暮らしの文化探検隊, 1999)。伊賀地域では「花びら餅」、東紀州地域等では「押し餅」とも呼ばれるが、丸餅の形状を少し変えたものであることから、丸餅の一種としても理解できる。

この花びら餅は、焼いて食べるのが一般的だという特色がある。表3は、角餅・丸餅・花びら餅のそれぞれについて「焼く」か「焼かない」かの回答数を表したものであり、角餅や丸餅に比べ、花びら餅は全32件のうち31件は「焼く」と、きわめて高い割合で「焼く」ことがうかがえる。参考に、県内全体においては、「焼く」と「焼かない」の回答は同数程度であり、両方の餅を用意するという家庭や、年によって焼いたり焼かなかったりするという家庭も複数みられた。

表3. 餅の形状別の調理方法.

	焼く	焼かない
丸餅	399	375
角餅	970	1208
花びら餅	31	1

(4) 具材 [表4・5]

雑煮の分析は、これまで餅の形状や味付けのベースを指標に行われることが多く、具材について大川は「具材の種類は、なっば（葉菜）と呼ばれる青菜系か、大根と里芋系か、豆腐やその他の野菜を加える多種野菜系かである」（大川,2000）として、地域別に分析を行っているが、データをもとに具体的な分析が行われたことはほとんどなかった。今回、旧市町村別、地域別に平均具材数や各具材の使用割合を比較することで、地域ごとの特徴を明確にすることができた。なお、今回の調査では葉物野菜について、最も記載が多かった「白菜」以外は、「葉物野菜」として一括りにして分析した。まず、具材の種類の平均値は県全体 3.6 で、地域的

には東紀州（4.1）、松阪（4.0）、伊賀（4.0）でやや高い傾向、北勢（3.4）、南勢（3.5）でやや低い傾向がみられた。北勢地域については、大川の報告においても簡素であることが紹介されており（大川, 2000）、数値にもその傾向があらわれたといえる。

次に地域ごとの具材の使用割合をみた。北勢地域では、葉物野菜が73.2%で、正月菜、もち菜と具体的な記述が目立つ。「蒲鉾・練物」の比率も高く、「かつおぶし」の使用は県内他地域に比べ飛びぬけて高い。中勢地域では、「葉物野菜+白菜」「大根」「人参」「里芋」の順に使用割合が高く、「大根」+「人参」+「里芋」の組み合わせが目立った。松阪地域では、「葉物野菜+白菜」「人参」「蒲鉾・練物」「大根」「きのこ類」の

表4. 地域別具材.

地域名	北勢	中勢	松阪	南勢	伊賀	東紀州	県全体
データ数	1278	560	320	599	369	42	3168
具材の種類	3.4	3.7	4.0	3.5	4.0	4.1	3.6
白菜	27.3	25.5	32.5	43.2	7.0	76.2	28.8
葉物野菜	73.2	45.4	55.6	56.6	32.0	26.2	58.0
ねぎ	7.1	17.1	23.8	21.2	10.6	28.6	13.9
他野菜類	1.6	2.0	2.2	1.3	0.8	2.4	1.6
人参	30.0	46.3	50.6	38.4	64.8	38.1	40.7
大根	22.2	55.9	36.9	29.4	77.5	26.2	37.5
里芋	10.3	38.0	21.6	11.0	59.6	23.8	22.4
ごぼう	3.9	5.0	5.9	2.2	5.7	4.8	4.2
他根菜類	2.1	3.6	3.1	2.2	3.0	4.8	2.6
コンニャク	1.1	2.0	1.3	0.8	2.2	0.0	1.3
蒲鉾・練物	43.8	32.3	46.9	46.6	23.8	47.6	40.3
豆腐	2.6	4.3	6.6	3.5	41.7	31.0	8.4
油あげ	11.1	15.0	15.9	7.8	10.8	4.8	11.6
麩	2.3	3.4	6.3	5.8	2.4	2.4	3.6
きのこ類	20.2	23.8	35.0	27.4	12.2	40.5	23.0
海藻類	3.8	4.1	2.2	5.8	3.3	7.1	4.1
かつおぶし	30.5	10.0	6.6	6.5	14.9	7.1	17.8
他海産類	7.0	5.4	6.9	7.7	6.8	2.4	6.8
鶏肉	23.9	20.2	24.7	22.2	13.0	21.4	21.7
他肉類	4.9	2.9	3.1	2.5	1.9	2.4	3.5
ゆず	3.1	4.8	5.3	4.8	5.7	4.8	4.3
小豆	0.2	0.5	0.3	1.0	0.0	0.0	0.4
あん	0.1	0.2	0.0	0.2	0.0	0.0	0.1
その他	4.3	4.6	3.4	3.5	2.7	4.8	3.9

※具材の数値は、地域ごとのデータ数に対する各具材の百分率（%）を表す。

50%以上

30~50%

表5. 地域別葉物野菜.

地域	北勢	中勢	松阪	南勢	伊賀	東紀州	県全体
データ数	1278	560	320	599	369	42	3168
白菜	27.3	25.5	32.5	43.2	7.0	76.2	28.8
もち菜	35.6	19.8	22.5	23.0	3.3	0.0	24.9
ほうれん草	9.8	7.7	10.9	15.4	9.8	14.3	10.6
小松菜	14.5	6.1	7.5	3.7	3.3	0.0	8.7
みつば	3.5	5.4	5.3	5.5	8.9	7.1	5.1
みずな	1.6	1.6	3.8	3.0	4.9	0.0	2.4
なばな	0.1	0.5	0.6	0.2	0.8	0.0	0.3
チンゲン菜	0.3	0.2	0.6	0.2	0.0	0.0	0.3
しゅんぎく	0.1	0.4	0.3	0.3	0.0	2.4	0.2
せり	0.4	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.2
まな	0.2	0.2	0.3	0.0	0.0	0.0	0.1
その他	0.3	0.7	0.0	0.8	0.3	0.0	0.4
不明菜	6.6	2.7	3.4	4.2	0.5	0.0	4.3

※具材の数値は、地域ごとのデータ数に対する各具材の百分率（%）を表す。

50%以上

30~50%

順に使用割合が高い。「大根」+「人参」+「里芋」の組み合わせもあるが顕著ではなく、「きのこ類」の使用が目立っている。南勢地域では、「葉物野菜+白菜」の合計は99.8%と高い。北勢地域と類似した傾向を示すが、「白菜」の使用が高く、「かつおぶし」はあまり使われない。伊賀地域では、圧倒的に「大根」+「人参」+「里芋」の組み合わせの比率が高く、「豆腐」も多く使われている一方で、「葉物野菜」+「白菜」の割合が著しく低い。東紀州地域では、「葉物野菜」+「白菜」や「蒲鉾・練物」の割合が高く、「きのこ類」の割合も高い。

具材別の特徴としては、「葉物野菜」+「白菜」の割合は100%に近い地域が多いが、伊賀地域は39.0%と極端に低い。中勢地域も70.9%と他地域に比べて低く、隣接する伊賀地域の影響がうかがえる。なお、「葉物野菜」+「白菜」のなかで最も使用が多い白菜(28.8%)以外は「葉物野菜」として一括したが、もち菜(24.9%)、ほうれんそう(10.6%)、小松菜(8.7%)、みつば(5.1%)、みずな(2.4%)の順に多い。白菜は伊賀地域を除いて、各地域共に使用が多いが、東紀州(76.2%)では非常にその割合が高い。もち菜は、愛知県尾張地方で栽培されてきたアブラナ科の在来種(タキイ種苗株式会社出版部、2002)で、正月菜とも呼ばれており、北勢地域では35.6%と、白菜(27.3%)より使用割合が高い。また、「みえの伝統野菜」に選定されている「なばな」や、多気町の相可菜(おうかな)、鳥羽市の堅神菜(かたかみな)など地域で栽培されている野菜が使われていることも、特筆すべきことといえる。

また、「大根」+「人参」+「里芋」の組み合わせの比率は伊賀地域で圧倒的に高く、中勢地域や松阪地域

も比較的高い傾向がみられる。「蒲鉾・練物」は全県的に40.3%と高い割合を示しているが、伊賀地域では低い。「豆腐」は全県的な比率は低いが、伊賀地域や東紀州地域では高い比率を示している。「かつおぶし」は北勢地域で高い割合を示している。肉類では「鶏肉」の割合が全県的に20%以上と高い割合を示しているが、伊賀地域では13.0%と低い傾向にある。

なお、肉類については、門口が全国的な傾向として、「鶏肉を入れる例は散見されるが、牛肉や豚肉を用いるという例は、ほとんどみられない」(門口、2019)と指摘しているが、県全体での「鶏肉」の割合の多さは、東海地方でもその類例が見られることから、全国的な傾向との差異について今後、検討したい。

4 地域別の特徴

表6は、汁の種類と餅の形の組み合わせを、地域別に件数と割合を示したものである。以下では本表に基づいて、県内6地域の雑煮の特徴について述べる。

(1) 北勢地域

「すまし汁・角餅」が全体の78.9%と、同一の種類の雑煮が際立って多いのが本地域の特色である。具材は「葉物野菜」が73.2%と割合が高く、なかでも正月時期に合わせて栽培される「もち菜」(35.6%)が多いことは前述のとおりである。次いで、「蒲鉾・練物」(43.8%)、「かつおぶし」(30.5%)の割合が高く、「かつおぶし」については全地域のなかで最も高い使用率である。すまし汁に角餅と葉物野菜を入れ、好みによって上からかつおぶしをかけるという北勢地域の雑煮の定型は、隣接する名古屋のシンプルな雑煮の影響を受

表6. 地域別汁の種類と餅の形組み合わせ。

地域	すまし汁			味噌汁			その他	合計
	角餅	丸餅	花びら餅	角餅	丸餅	花びら餅		
北勢 小計	1010	93	1	77	36	1	62	1280
北勢 割合	78.9	7.3	0.1	6.0	2.8	0.1	4.8	100.0
中勢 小計	248	47	1	201	25	0	38	560
中勢 割合	44.3	8.4	0.2	35.9	4.5	0.0	6.8	100.0
松阪 小計	195	37	0	46	23	0	17	318
松阪 割合	61.3	11.6	0.0	14.5	7.2	0.0	5.3	100.0
南勢 小計	266	206	1	30	39	0	52	594
南勢 割合	44.8	34.7	0.2	5.1	6.6	0.0	8.8	100.0
伊賀 小計	41	95	12	19	159	17	27	370
伊賀 割合	11.1	25.7	3.2	5.1	43.0	4.6	7.3	100.0
東紀州 小計	22	12	0	3	2	0	3	42
東紀州 割合	52.4	28.6	0.0	7.1	4.8	0.0	7.1	100.0
県全体 合計	1782	490	15	376	284	18	199	3164
県全体 割合	78.9	7.3	0.1	6.0	2.8	0.1	4.8	

けていると考えられる。こうした北勢地域の雑煮の特色は、先行研究において示されているとおりであり(大川, 2000; 松原ほか, 2015), 雑煮の地域的特色が現代まで受け継がれていると考えられる。

地域の生業との関わりでは、漁師の祖父が仕事おさめの日に採ったハマグリを使うという例(桑名市矢田)や、祖父が作った野菜を用いるという例(桑名市筒尾), 祖母が育てたもち菜を入れる例(桑名市赤尾台)などがあり、雑煮に用いる具材への思い入れが見てとれる。

(2) 中勢地域

餅は、「角餅」が82.7%と北勢地域に次いで多いが、汁はすまし汁54.6%, 味噌汁42.3%と拮抗している。旧市町村別にみると、すまし汁が多いのは津市、河芸町で、味噌汁は美里村、安濃町、白山町で多い。すまし汁は北勢地域に多く、味噌汁は伊賀地域で多いことから、それぞれに隣接する地域の影響を受けていると考えられる。

具材は、「大根」「人参」「里芋」の使用率が高く、旧市町村別には、美里村、安濃町、白山町で高く、味噌汁が多い地域と一致している。一方、「葉物野菜」の使用も多いが、旧市町村別には津市、河芸町などで高く、こちらもすまし汁が多い地域との一致が見られる。

大川は、「角餅で味噌汁の雑煮圏」「具材は大根・里芋」としている(大川, 2000)が、中勢地域北部はすまし汁の割合が高い傾向にあり、北勢地域の影響がみられる。

(3) 松阪地域

「すまし汁・角餅」の比率が61.3%と比較的高いが、「味噌汁・角餅」14.5%、「すまし汁・丸餅」11.6%も一定の割合みられる。松阪地域のすべての旧市町村において「すまし汁・角餅」の比率が高いが、「味噌汁・角餅」は明和町17.3%、松阪市15.4%、「すまし汁・丸餅」は多気町20.8%、明和町19.2%で、やや高い傾向を示している。汁をすまし汁とする比率が75.2%と高いのは伊勢地域の影響、味噌汁がやや高い傾向は中勢地域の影響が考えられる。

具材は、「葉物野菜」+「白菜」と「大根」+「人参」+「里芋」の組み合わせが比較的多く、旧市町村単位による大きな違いは見られない。また、具材の種類

の平均値は4.0で、隣接する地域の中では高く、具だくさんの傾向が見られる。また、他地域に比べて「きのこ類」の使用が高い傾向にある。

大川は、「角餅で味噌汁とすまし汁の複合地域」「山間地域では具だくさん」(大川, 2000)としているが、すまし汁がより高い傾向を示している。また、具材の種類平均値は山間地域の飯南町、多気町、勢和村、大台町で4.0以上となっており、具だくさんの傾向をみることができる。

(4) 南勢地域

「すまし汁・角餅」44.8%に次いで、「すまし汁・丸餅」が34.7%とすまし汁が主流であり、味噌汁は概して少ない。餅は、全体では角餅(51.7%)と丸餅(42.8%)が拮抗しているが、現在の志摩市域では角餅(23.0%)よりも丸餅(75.7%)の方が圧倒的に高い割合となっている。南勢地域全体において具材は、「葉物野菜」56.6%と「白菜」が43.2%が多く用いられる傾向にあり、全体の12.2%は葉物野菜と白菜を併用している。志摩市域は丸餅ですまし汁、具材は葉物の雑煮であると分析している先行研究(大川, 2000)と共通する結果となった。

また、あずきを用いた雑煮も本地域の大きな特色である⁽¹⁰⁾。あずきの雑煮は全体で10件あり、このうち5件が鳥羽市、2件が調理者の出身地が鳥羽市であった。あずき汁は、鳥羽市の離島である答志島・神島・坂手島・菅島に分布しており、ぜんざいと呼ばれることもある。「父の実家の神島では元旦の朝ゲータ祭りの後初もうでをしてからぜんざいを食べます」(津市戸木町)との記述のとおり、神島ではゲータ祭り⁽¹¹⁾との関係が深いものである。かつては塩味が主流であったが、近年は砂糖を加える家庭も多いようである。

また、10件のうち2件は、鳥羽市浦村および阿児町鶴方などに点在する「あんびん」である。あんびんというのは、丸餅の上に茹でたあずきをのせたもので、汁がないことに特徴がある。一見すると一般的にイメージする雑煮とは様相が違っているため、調査カードでも鳥羽市浦村で、「ばあちゃんに『これがお雑煮?』と聞いたら『そうやに!』と言っていました」(津市河芸町)という驚きが表されているものもあった。

(5) 伊賀地域

餅は、「丸餅」が70.0%と突出して高く、伊賀地域特有の丸餅を押しつぶした「花びら餅」7.8%を加えると約8割が「丸餅」で、「角餅」が8割近くを占める北勢地域、中勢地域、松阪地域と対照的である。また、餅を焼く割合も73.8%と他地域に比べて非常に高く、「花びら餅」はほぼ全て焼いている。

汁は味噌汁の比率が高く、「味噌汁・丸餅」が43.0%と最も高い。旧市町村単位でみると、すまし汁の比率が北部の伊賀町(80.0%)、阿山町(79.3%)で高いのに対して、味噌汁は上野市(71.8%)、大山田村(66.7%)、名張市(55.5%)で高く、南部で高い傾向が見られる。

具材は、「大根」「人参」「里芋」がほぼ6割以上と圧倒的に高い。「豆腐」も41.7%と他地域に比べると非常に高いが、「鶏肉」の割合は比較的少ない。また、名張市を中心に、雑煮の餅を椀から取り出し、きなこをまぶして食べるという奈良県に多い習慣がみられる。

大川は、「餅ははなびらと呼ぶ丸型」「里芋・大根・豆腐が基本」「北部伊賀地域はすまし汁、中南部伊賀地域では赤味噌」(大川, 2000)としている。「里芋・大根・豆腐が基本」「北部はすまし汁、南部は味噌汁」という傾向は変わらないが、以前に比べると「花びら餅」の使用は少なくなっている傾向がうかがえる。

(6) 東紀州地域

全体的にすまし汁が83.3%と多いのが特色で、餅は角餅の方が61.9%と多いものの、丸餅も33.3%と一定数みられる。また、「ねこ餅」や「ねこ」と呼ばれる餅を使う家庭があることも特徴の一つである。ねこ餅は、かまぼこ型にまとめた餅を端から切り分けていくもので、その形が背中をまるめた猫に似ていることから、こうした呼び方がなされているようである。

具材の種類のアverage値は4.1と、具沢山の雑煮が主流で、使用される割合が高い順に、「白菜」76.2%、「蒲鉾・練物」47.6%、「きのこ類」40.5%、「人参」38.1%、「豆腐」31.0%となっている。なかでも8割近く用いられる白菜は、他地域に比べてとびぬけて使用率が高いことをはじめ、しいたけを主とするきのこ類や、豆腐の使用が多い反面、他地域に比較して「葉物野菜」の使用が26.2%と少ないことも特筆される。大川は、熊野市北部では丸餅がみられるが、全体的にはすまし汁の角餅が主流であり、具材は豆腐と野菜、あるいは里芋と菜

葉の組み合わせが多いと指摘しており(大川, 2000)、里芋の使用が多いという点以外は、おおむね現代にも継承されていると考えられる。ただし、東紀州地域の調査カードは42件と多くはないため、特色を十分に考察するには、追加の調査が必要であると考えられる。

5 まとめ

以上、「お雑煮プロジェクト」において集まった3,260件の調査データから、三重県内の雑煮の地域的な特色を考察してきた。調査結果からは、現代的な家庭状況を反映した新しい雑煮もみられるようになったものの、大枠では、大川が研究の対象とした大正時代から昭和10(1935)年頃までの雑煮の分布と、ほぼ変わらない状況であることが明らかになった。時代とともに伝統的な食文化が変容してきているなか、地域に継承されてきた雑煮の特色や、雑煮にかかわる食習慣がいまに伝えられていることは特筆される。

さて、本調査から明らかになった三重県の雑煮について、全国的な視野からみると、どのような特色が分かるだろうか。まず、汁の種類に関しては、味噌汁の雑煮は、京都、大阪、奈良、和歌山、滋賀を中心とした近畿地方と、福井、香川、徳島に限られ、そのほかの地域ではすまし汁が多いのが全国的な状況である(門口, 2019)。三重県内では、近畿地方と接する伊賀地域では味噌汁が、愛知、岐阜と近接する北勢地域ではすまし汁が多い傾向にあり、地理的・文化的な影響を受けていると考えられる。

一方、餅の形の全国的な状況は、東北から関東、中部にかけての東日本は角餅、近畿から中国、四国、九州にかけての西日本は丸餅が多く分布している(門口, 2019)。この点についても、地理的な近接性から、角餅と丸餅の分布域が規定されていることが見てとれる。雑煮は、たとえ同一の集落内であっても家による相違があるため、汁の種類や餅の形について境界線を引くことは難しいが、全国的にみて、両者の特徴が混ざり合う場所に三重県の雑煮が位置していることは確かだといえる。

そのほか、鳥羽市の離島や沿岸部を中心にみられるあずきの雑煮は、「小豆汁」、「小豆雑煮」、「ぜんざい」などと呼ばれ、石川の能登地方と、鳥取、島根の出雲地方に色濃く分布するほか、いくつかの地域に点在する程度である。全国的にも限定されている雑煮の種類

が三重県にも分布することは着目すべき点であり、他の分布地域との関係性を検討する必要がある。また、雑煮の餅にきなこをつけて食べる習慣は、三重県では名張市にのみ濃厚に分布しているが、「美杉村太郎生を含む名張地域には、雑煮のめずらしい食べ方がある。雑煮椀から餅を取り出して、『黄な粉』をまぶして食べるのだが、これは現在も奈良一円に伝わる大和の食文化である」(駒田ほか, 2013) との記述のとおり、奈良の雑煮文化とのつながりがうかがえる食習慣である。

なお、「お雑煮プロジェクト」の後、2019年度には現多気町の小学生を対象に「お雑煮プロジェクト2」を実施し、全258件の調査カードから分かったことについて、多気町立勢和図書館を会場とした移動展示において発表した。同様に、2022年度には伊賀市の小学生を対象として、雑煮調査をおこなう予定であり、今後も継続して地域別の追加調査を重ねていくことを通して、三重県内の雑煮の特色について考察を深めていきたいと考えている。

その際には、本稿では扱えなかった、個別の調査カードの分析という視点も求められると思われる。家庭の雑煮は変わらずに継承されていくものだと考えられがちであるが、実際は時代の変化や、結婚、子どもの成長など家族のイベントなどともなまって少しずつ形を変えていく例が多く見受けられる。こうした、雑煮の背景にある家の歴史や家族の嗜好、家族の関係性といったことにも踏み込んで分析をすることで、三重県の雑煮の特色をより豊かに描けるのではなかろうか。本稿でおこなった調査カード全体を対象としたデータ解析に加えて、聞き取り調査を含めた個別例の検討もおこない、この両者をともに分析の俎上に乗せることが今後の課題である。

註

(1) 1976年に刊行された『三重県民俗地図』の「正月の雑煮」の項では、「角餅」と「丸餅」、「すまし雑煮」と「味噌雑煮」という指標により、その分布が示されている。図から、角餅は北勢地域から中勢地域、松阪地域に多く、丸餅は南勢地域から東紀州地域、伊賀地域に多いことが見てとれる。また、汁の種類については、伊賀地域から伊勢市にかけての県中央地域は味噌雑煮が多く、それ以外の地域では

すまし雑煮が多いことが示されている。

- (2) 本稿は、1, 2, 3 (1) (2) (3), 4 (1) (4) (6), 5を門口, 3 (4), 4 (2) (3) (5)を福田が分担執筆した。
- (3) 本文中では旧69市町村での表記を基本とし、現在の市町で表記する際には、その都度言及した。また、調査カードの住所は、現行の市町での記載となっているため、町名や学校名から旧市町村に変換した。ただし、情報が不足して旧市町村が不明なものもあり、それらについては、例えば津市であれば旧津市とするなど、人口の最も多い旧市町村に含めた。
- (4) 本調査では、勢和村に隣接する多気町井内林における事例もあった。エピソード欄に書かれた「はがための作り方」によると、「おもちをやいておわんに入れます。ほし柿をたんざくに切り、おもちの上ののせ、しお少しょうふり、お茶をたっぶり入れます。」(読点, 筆者)とある。
- (5) 図4の円グラフにおいて、「その他」「空欄」「不明」は「その他」として一括して表している。
- (6) ここでの比率は、「母」および「祖母」が単独で調理をしている例のみを対象として計算した。
- (7) 図4の「その他」には、「父、祖母」などの組み合わせも含まれており、これらも合わせて、父および祖父が関与する件数を示した。
- (8) 括弧内は、現在の住所である。以下も同様に、エピソードを引用している箇所の住所は、現在の住所を記している。
- (9) 今回の調査では、味噌の種類については問うていないが、三重県および奈良県の北東地域を対象とした聞き取り調査によると、旧名張市は白味噌と赤味噌(玉味噌)が半々で使用されているが、伊賀市は大半が玉味噌との結果が示されている(駒田ほか, 2013)。
- (10) 三重県内で「ぜんざい」、「あんびん」、「あずきもち」などと呼ばれる「あずき雑煮」を食べる地域としては、鳥羽市の離島(答志島、坂手島、神島、菅島)、鳥羽市石鏡、志摩市鷯方、南伊勢町贅浦などが報告されている(小島, 1991, 松原ほか, 2015)。
- (11) ゲーター祭りは、大晦日から元日にかけておこなわれる、神島の八代神社の祭りで、三重県の無形民俗文化財の指定を受けているが、2017年を最後に休止している。

謝辞

末筆ではあるが、「お雑煮プロジェクト」に参加していただいた皆様をはじめ、調査カードの配布および回収の際にご協力を賜りました各小学校、各市町教育委員会の方々に、心より感謝申し上げます。また、調査の実施にあたり、貴重な助言をいただいた学校法人大川学園学園長の大川吉崇氏にも厚くお礼申し上げます。なお、「お雑煮プロジェクト」は、平成23年度文化芸術振興費補助金みえミュージアム活性化事業の一環として実施された。

引用文献

- 伊勢民俗学会（編）. 1985. 勢和村の民俗. 311pp. 光出版, 松阪.
- 門口実代. 2019. 雑煮-正月と餅-. In: 関沢まゆみ(編). 日本の食文化2 米と餅. pp. 167-198. 吉川弘文館, 東京.
- 小島大枝. 1991. 伊賀・上野地区のお雑煮. 伊賀盆地研究会会報, 113:1-8.
- 駒田亜衣・藪本治子・谷口水穂. 2013. 奈良・京都と伊勢を結ぶ歴史街道（初瀬街道と伊勢本街道）周辺に見られる食文化の特徴-雑煮と神饌を中心に-. 地研年報, 18: 1-21
- 暮らしの文化探検隊（編）. 1999. 暮らしの文化探検隊レポート1～伊賀で生まれた暮らしの文化を見つけよう！～. 23pp. 暮らしの文化探検隊, 伊賀.
- 松原由貴子・松原豊・武田美穂. 2015. ふるさとの味わが家の味 三重のお雑煮. すばらしき“みえ”,

189: 1-12

- 三重県教育委員会（編）. 1976. 三重県民俗地図 昭和49. 50年度民俗文化財緊急分布調査報告書. 61pp. 三重県教育委員会, 津.
- みえミュージアム活性化事業実行委員会（編）. 2012a. お雑煮プロジェクト～新博ティーンズプロジェクトPARTⅢ～成果報告書. 24pp. みえミュージアム活性化事業実行委員会, 津.
- みえミュージアム活性化事業実行委員会（編）. 2012b. お雑煮プロジェクト～新博ティーンズプロジェクトPARTⅢ～三重のお雑煮ブック. 10pp. みえミュージアム活性化事業実行委員会, 津.
- 大川吉崇. 2000. 三重雑煮考-郷土の民衆文化を雑煮から見る-. In: 三重民俗研究会（編）. 論集 三重の民俗 三重県の伝承文化をさぐる. pp. 39-62. 三重大学出版会, 津.
- タキイ種苗株式会社出版部（編）. 2002. 都道府県別地方野菜大全. 359pp. 社団法人農山漁村文化協会, 東京.

〔附表〕

- 附表1 市町村別調理者の割合
附表2 市町村別汁の種類と餅の形組み合わせ
附表3 市町村別具材

※附表1～3は、下記、三重県総合博物館のホームページよりダウンロードしていただけます。

<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/p0031300010.htm>

研究ノート

「お雑煮プロジェクト2」多気町での調査から見えてくること

What we learned from the survey data of the "Ozoni Project 2" conducted in Taki Town

福田良彦・田村香里

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060 三重県総合博物館

キーワード：郷土料理, 食文化, 三重県

(2022年10月27日 受付)

Yoshihiko FUKUTA* and Kaori TAMURA

Mie Prefectural Museum

Isshinden-kouzubeta 3060, Tsu, Mie 514-0061, Japan.

* Corresponding author: fukuty01@pref.mie.lg.jp

はじめに

三重県総合博物館では、2011年度に県内全域を対象として、県内の小学3・4年生を中心に自分の家の雑煮を調べる「お雑煮プロジェクト」（みえミュージアム活性化事業実行委員会，2012a，2012b）を実施しているが、2022年2月11日～23日に多気町で開催した移動展示に際して、より地域の特徴を詳しく知るために、町内の小学生を対象とした「お雑煮プロジェクト2」を実施した。

三重の雑煮に関する研究としては、「三重雑煮考-郷土の民衆文化を雑煮から見る-」（大川，2000）があり、多数の文献を引用しながら、大正時代から昭和10（1935）年頃までを対象に県内の雑煮の特徴が考察されている。この中で、大川は多気郡の典型的な雑煮は角餅のすまし汁で、具だくさんであるとしたうえで、多気町のうち、平成の合併前の旧勢和村に関しては『勢和村の民俗』（伊勢民俗学会，1985）を挙げ、具材は杓子菜、水菜、相可菜、ネギなど適当な菜葉を入れるとしている。また、『度会・多気山村習俗調査報告書』（三重県教育委員会，1969）を引用し、油あげ、切り昆布、ごぼう、人参、大根、豆腐、ねぎ、あるいは、ねぎ、豆腐、油あげ、里芋、白菜、蒲鉾、コンニャク等を入れるとしている。

調査概要

調査は2019年12月に、多気町立相可小学校、佐奈小学校、津田小学校、外城田小学校、勢和小学校に在学している児童804名を対象に、参加を呼びかける「調査リーフレット」と、調べたことを書き込む「お雑煮調査カード」（以下「調査カード」という）を配布し、小学校ごとに調査カードを集約した。

調査カードの項目は、「住所」「雑煮調理の有無」「調理する人と出身地」「汁の種類」「餅の種類・調理・購入の有無等」「具材」「食べる時期」「エピソード」などで、2020年の1月に、正月の雑煮について調査を実施し、258件の調査カードを収集した。このうち、雑煮を作ると回答した255件のデータをもとに分析を行った（表1，表2）。また、調査カードを分析する過程で特徴的にみられた、もち米にうるち米を混ぜて作る「やじろ」の雑煮への使用と、文献にみられる元日の朝に、まず雑煮ではなく、焼いた餅に干し柿などをはさんで食べる「歯固め」の習俗について（伊勢民俗学会，1985），移動展示の際に質問ボードを設置して追加調査を実施した。

結果概要と考察

1. 汁と餅

汁と餅の形について分類した結果（表1）、多気町の雑煮で最も多いのは、これまでの報告（大川、2000）と同様に、「角餅のすまし汁」で、今回の調査結果でも68%と7割近くを占めた。次に多いのは「角餅の味噌汁」13%と「丸餅のすまし汁」8%で、丸餅の味噌汁の比率は5%と低い。また、餅の調理方法については、焼く53%、焼かない47%で、ほぼ同数であったが、角餅では56%と焼く比率がやや高く、丸餅では68%が焼かないという結果になった（表3）。

2. やじろ

餅のこだわりについて、回答者の約1割（9.4%）24人が、「やじろ」を使うと記載している。「やじろ」は、もち米にうるち米を混ぜて作る餅で、喉ごしが良くくて食べやすく、中勢地域と南勢地域で広く作られており、同様の餅は、北勢地域では「たがね」と呼ばれている。今回、調査項目に設問がないにもかかわらず、「やじろ」を使うとの回答が多数あったことから、移動展示の際に、多気町（旧多気町、旧勢和村）在住者を対象に、雑煮に「やじろ」を使用するか、また、元日と2日目以降に違いがあるかを調査した。その結果、115人から回答があり、52人（45%）が雑煮に「やじろ」を使

表1. 小学校別の汁の種類と餅の形組み合わせ.

小学校名	すまし汁		味噌汁		あずき汁	その他	計
	角餅(割合)	丸餅(割合)	角餅(割合)	丸餅(割合)	角餅(割合)		
佐奈	9 (56)	1 (6)	2 (13)	1 (6)	1 (6)	2 (13)	16
津田	10 (53)	0	3 (16)	2 (11)	0	4 (21)	19
外城田	23 (72)	7 (22)	1 (3)	1 (3)	0	0 (0)	32
相可	68 (73)	8 (9)	8 (9)	4 (4)	0	5 (5)	93
勢和	63 (66)	4 (4)	19 (20)	4 (4)	0	5 (5)	95
全体	173 (68)	20 (8)	33 (13)	12 (5)	1 (<1)	16 (6)	255

数値はデータ数、割合は回答総数に占める百分率(%)を示す。<1は、1%未満であることを示す。

表2. 小学校別の具材の種類.

小学校名	佐奈	津田	外城田	相可	勢和	全体
データ数	16	19	32	93	95	255
平均種数	3.9	3.4	3.1	3.5	4.2	3.7
白菜	8	9	20	44	43	124
人参	8	10	11	36	52	117
葉物野菜	6	4	13	41	38	102
蒲鉾	4	6	13	34	40	97
大根	4	8	8	20	45	85
ねぎ	4	8	7	28	26	73
鶏肉	6	4	3	23	25	61
油あげ	4	3	2	15	25	49
きのこ類	2	1	5	17	20	45
椎茸	3	2	5	8	18	36
里芋	1	2	2	11	11	27
豆腐	2	2	2	5	8	19
他	11	5	9	45	44	114

平均種数は、具材の種類の数々の平均値。

ほうれん草、もち菜、小松菜、せり、相可菜、三つ葉、なばな、水菜、春菊の回答をまとめて葉物野菜とした。しめじ、まいたけ、えのき、まつたけの回答をまとめてきのこ類とした。

うと回答した。地域別では、旧勢和村の84人中45人(54%)が使用すると回答し、そのうち、元日の朝は使わないとした回答した人が9人(20%)で、元日の朝と他の日を区別する意識をみることができた(表4)。

3. 具材

調査の結果(図1)、白菜、人参、葉物野菜を使うという家庭が40%を超え最も多かった。なお、もち菜、ほうれん草、小松菜、せり、相可菜、三つ葉、なばな、水菜、春菊をまとめて葉物野菜とした。続いて、蒲鉾、大根、きのこ類(椎茸と他のきのこ類の合計)が30%以上、ねぎ、鶏肉も20%以上の回答があり、野菜を中心に多様な具材が使われていた。相可菜は地域で栽培されている野菜で、多気町における特徴的な具材と言える(図2)。

「お雑煮プロジェクト」の成果をもとに作成したレプリカでも、具材の多さが特徴的であり、今回の調査結果についても、具材の種類数の平均値が3.7で、3~5種類の具材を使うことが多く、最も具材の多い家庭では11種類を使っており、具だくさんの雑煮の姿をうかがうことができた(表2)。

表3. 餅の形状別の調理方法。

餅の形	焼く		焼かない		計 データ数
	データ数	割合(%)	データ数	割合(%)	
角餅	114	56	89	44	203
丸餅	10	32	21	68	31
全体	124	53	110	47	234

調理方法の記載なしと餅の形および調理方法が不明確なものはデータ数に含まれない。

表4. お雑煮への「やじろ」の使用(多気町)。

居住地	使う		使わない
	3が日も使う	元日の朝は使わない	
旧多気町	7	0	24
旧勢和村	36	9	39
計	43	9	63

数値は回答数(人)を示す。

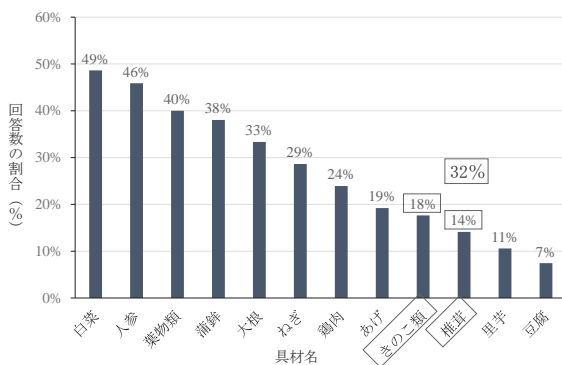


図1. 雑煮の主な具材(多気町)。

4. 雑煮の調理者

雑煮の調理者は、母が46%で約半数を占め、祖母も36%と多く、母と祖母13%を含め、祖母および母が調理をする例が多く、男性はごく少数だった(図3)。

ところで、今回の調査で、雑煮へのこだわりとして、味噌は白味噌を使うという記述が6件、あん入りの餅を使うという記述が3件、あずき汁という記述が1件あった。白味噌は関西地方から香川県、徳島県にかけて、あん入りの餅は香川県、あずきの汁ものは石川県の能登地方や鳥取県や島根県の出雲地方に多く、三重県では鳥羽市の離島で使われているとされている(門口, 2019)。これらの雑煮は南勢地域ではあまりみられないため、調査カードを確認したところ、全ての事例で調理者は上述した関西や四国、鳥羽等の出身者であった。調査カードの雑煮のエピソードにも、父母の出身地の雑煮を継承していることが多く記されており、通婚圏が広がった現代だからこそ、雑煮は、地域として、家庭として受け継がれ、父母や祖父母の味を大切に継承していることを改めて感じた。



図2. 「相可(おうか)菜」写真提供 西井睦美氏。

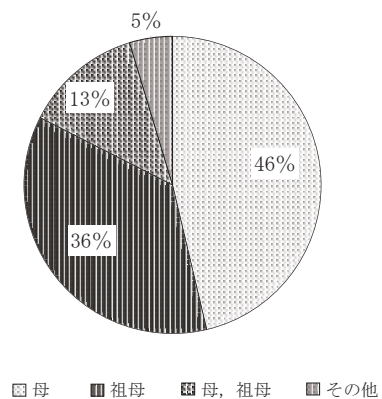


図3. 雑煮の調理者(多気町)。

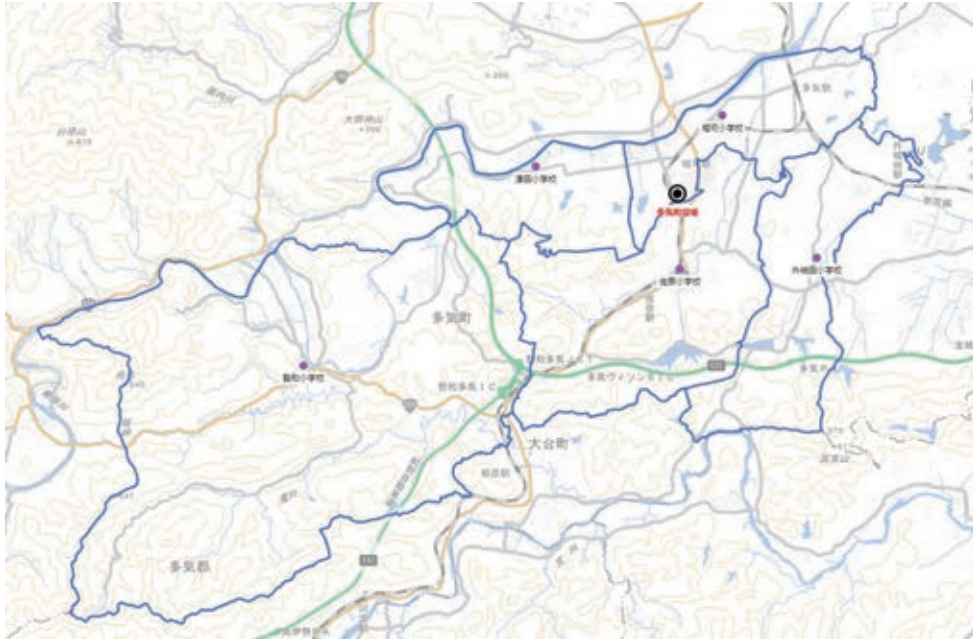


図4. 多気町の小学校区 出典：学区マップ (school.mapexpert.net).

5. 多気町内の地域差

大川は、南勢地域の雑煮圏を「松阪市内が中勢地域の雑煮と重複するため、櫛田川沿いの和歌山街道と宮川沿いの熊野街道の間と考えることができる」(大川, 2000)としている。多気町は北側に櫛田川、南側に宮川が流れており、南勢地域と中勢地域の特徴の堺に位置すると考えられる。今回の調査結果は、図4に示した小学校区を単位として調査カードを集約しており、町内の5つの小学校区別に傾向をみることで、隣接する圏域の影響や町内の地域差について考察した。

①汁と餅

「角餅のすまし汁」の比率は、最も高い相可小学校区で73%、最も低い津田小学校区でも53%であり、どの小学校区においても非常に高かったが、玉城町や度会町に接する外城田小学校区では、「丸餅のすまし汁」の割合が町全体の平均8%に対して22%と高く(図5)、大台町や松阪市に接する勢和小学校区では、「角餅のみそ汁」の割合が町全体の平均13%に対して20%と高かった(図6)。

2011年度の「お雑煮プロジェクト」の結果と比較すると、「丸餅のすまし汁」は、外城田小学校区に隣接する玉城町、度会町でも21%、29%と比較的高く、伊勢地域の雑煮の特徴とされる「丸餅のすまし汁」の影響を受けている可能性がある。一方、「角餅の味噌汁」は、勢和小学校に隣接する大台町と松阪市では、

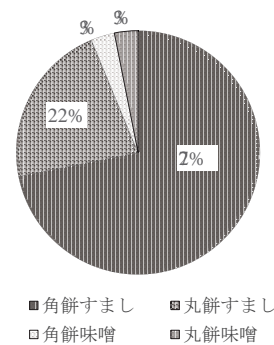


図5. 汁と餅の種類 (外城田小学校区)。

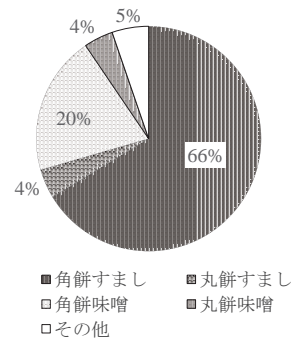


図6. 汁と餅の種類 (勢和小学校区)。

それぞれ8%、15%とそれほど高くなかった。「角餅のみそ汁」は、中勢地域の雑煮の特徴であり、松阪市はこの圏域に含まれるとされている。勢和小学校区に隣接する旧飯南町でも11%あり、中勢地域の雑煮の影響が及んでいる可能性が考えられる。また、「やじろ」を使うと記載した24人のうち、勢和小学校区が10人と数が多く、移動展示会場の質問ボードでの回答傾向と整合していた。

②具材

具材については、小学校区による地域的な差異はほとんどみられなかった。具材の種類の数々の平均値は町全体では3.7であったが、最も多い勢和小学校区と最も少ない外城田小学校区では、具材の種類の数々の平均値に1.1の差がある(図7)。外城田小学校区は、具材が少ないとされている伊勢地域に隣接しており、その影響を受けている可能性が考えられる。

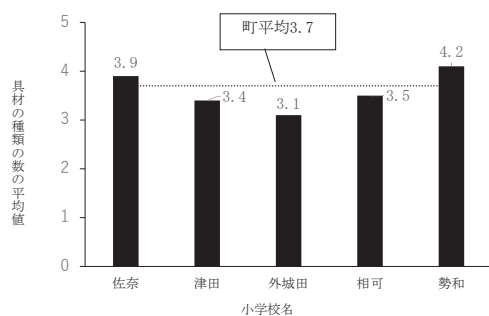


図7. 具材の種類の数々の平均値(多気町)。

むすびにかえて

2011年度に県内全域を対象として実施した「お雑煮プロジェクト」では、多気町全体で調査データは29件(旧多気町27件, 旧勢和村2件)であったが、今回の調査では、258件ものデータを得ることができた。さらに、小学校単位での情報の蓄積や展示会場での調査などでのデータ収集により、地域的な特徴を検討することができた。

また、多気町内の丹生、上出江、下出江、色太などでは、元日の朝には、まず雑煮をいただくのではなく、焼いた餅に干し柿などをはさんで食べる「菌固め」という興味深い風習があったことが、『勢和村史通史編』(勢和村史編集委員会, 1999)や『勢和村の民俗』(伊

勢民俗学会, 1985)にも記載されている。今回、展示会場の質問ボードで回答を募ったところ、5件の回答があり、上出江、色太では、現在も「菌固め」を行なっていることを確認できたことも大きな成果といえる。

末筆ではあるが、雑煮は、伝統的な食文化や地域の文化を考えるうえで、非常に重要なテーマであり、調査に協力していただいた皆さんをはじめ、各小学校、多気町教育委員会様のご協力にお礼を申し上げたい。

引用文献

- 伊勢民俗学会(編). 1985. 勢和村の民俗. 311pp. 光出版, 松阪.
- 門口実代. 2019. 雑煮-正月と餅-. In: 関沢まゆみ(編). 日本の食文化2 米と餅. pp. 167-198. 吉川弘文館, 東京.
- 三重県教育委員会(編). 1969. 度会・多気山村習俗調査報告書. 380pp. 三重県教育委員会, 津.
- みえミュージアム活性化事業実行委員会(編). 2012a. お雑煮プロジェクト~新博ティーンズプロジェクトPARTⅢ~成果報告書. 24pp. みえミュージアム活性化事業実行委員会, 津.
- みえミュージアム活性化事業実行委員会(編). 2012b. お雑煮プロジェクト~新博ティーンズプロジェクトPARTⅢ~三重のお雑煮ブック. 10pp. みえミュージアム活性化事業実行委員会, 津.
- 大川吉崇. 2000. 三重雑煮考-郷土の民衆文化を雑煮から見る-. In: 三重民俗研究会(編). 論集 三重の民俗 三重県の伝承文化をさぐる. pp. 39-62. 三重大学出版会, 津.
- 勢和村史編集委員会(編). 1999. 勢和村史通史編. 793pp. 勢和村, 勢和.

(33) 矢穴の時期については私見による。また、以下の論文も参照した。金子浩之「石材矢割り技法の展開」(『芙蓉芳の考古学』六一書房、二〇一〇年)。

(34) 「山雄田荒廢記」に見える記載と関連する事項を追記する。この史料で「満山の会所」があったとする「寄合洞」は、当地の南部に「大洞」(井生)・「洞」(川口)という小字地名があり、それとの関係が考えられる。また「満山の風呂」があったとする「風呂屋之谷」は、当地の西方約1kmに「風爐之谷」の小字地名があり、これとの関係が想定される。ここは江戸期に銅鑿が出土した場所として知られる。なお、辻本豊氏は「風爐之谷」が川口白山社から1km以上離れるため、そこに風呂(湯屋)があったことについては疑義を示されている(辻本前掲論文)が、根来寺(和歌山県岩出市)で検出された大湯屋遺構(平成一五年度岩出市教育委員会調査)は中心伽藍から七〇〇mほど離れた場所に位置するため、川口の風呂(湯屋)も中心部から離れた場所にあった可能性は捨てきれない。

(35) 前掲『勢陽五鈴遺響』三。

(36) 白山町郷土史編集刊行委員会編前掲註(1) 文献所収。

(37) 森田克行「畿内における近世瓦の成立について」(『撰津高槻城跡―本丸跡発掘調査報告書―』(高槻市教育委員会、一九八四年)。

(38) 白山町郷土史編集刊行委員会編前掲註(1) 文献など。

(39) 来迎寺宝塔(伊賀市上友田)など。来迎寺宝塔の詳細は、三重県教育委員会『三重県の文化財保護平成30年度』(二〇二〇年)を参照されたい。

(40) 川口白山比咩神社本殿前にある元亀四年銘石造燈籠についても、当該期の白山社整備の一環で把握できるのではないだろうか。

(41) 時枝務『霊場の考古学』(高志書院、二〇一四年)。

(42) 拙稿前掲註(17) 文献。

(43) このことについては、拙稿「中近世移行期の石塔に見る受容・醸成・変容・発信」(『地方史研究』四一八、二〇二二年)を参照されたい。

- (12) 藤木氏編前掲註(7) 文献。
- (13) 三重県教育委員会編『三重の中世城館』(一九七七年)、小玉道明他「三重県」(『日本城郭体系』10、新人物往来社、一九八〇年)など。
- (14) 福原氏前掲註(7) 文献、竹田憲治「中世北畠氏関連の城郭群―雲出川上流域を中心に―」(『Mehistory』11(二〇〇〇年))。
- (15) 当地にかかる文献として、津市教育委員会編『はくさんの石造物―川口地区編―』(二〇一〇年)を挙げておく。
- (16) 拙稿前掲註(3) 文献。
- (17) 小稿で詳細に検討する川口井生白山坊院跡・南出白山坊院跡・布引坊院跡については、拙稿「伊賀・霊山山頂遺跡と歴史的重層性」(『忍者学大全』東京大学出版会、二〇二三年)で一部触れている内容と重複することをお断りしておく。
- (18) 『勢陽五鈴遺響』三(三重県郷土資料刊行会、一九七六年)など。他には、白山大権現、白山妙理権現などとも呼ばれる場合がある。
- (19) 祭神を伊弉諾(伊弉冉ではない)・泉守道者(伊弉諾の和魂)・菊理媛(伊弉冉の荒魂)とする説もある(前掲『勢陽五鈴遺響』三)。
- (20) 『勢陽五鈴遺響』三では、雲出川中流域への白山社勧進縁起として、白山権現を笈に背負ってやって来た鎮徳上人が瀬戸ヶ淵(白山町家城付近)に腰掛けたところ、そこから七羽の鷲が飛び出し、七箇所降り立ったという。その七箇所が小倭・竹原・飯福田・山田野・八対野・井生川口・家城で、そこに白山権現を祀った、とする。もちろん、伝説の域を出ない話ではあるが、こういった縁起が地元で大切にされていることは認識しておきたい。なお、天文二二年の鎮徳上人伝承については、色井秀讓氏が示唆するように、筆者も白山社の「再興」を示す時期だと考える。
- (21) 玉井敬泉「白山の祭神と信仰」(『白山信仰』民衆宗教史叢書第一八巻、雄山閣出版、一九八六年)。「神社明細帳」は三重県神社庁蔵。
- (22) 前掲『勢陽五鈴遺響』三。
- (23) 「成願寺文書」(『三重県史』資料編編中世二)。なお、「山雄田白山」は南出の白山社を指すとするが、「山雄田」の呼称は当地の白山社を考えるうえで重要である。というのも、川口、南出、八対野(山雄田氏子中)、飯福田(山雄田白山権現社)など、いずれも「山雄田」の地名が登場する。なぜ「山雄田」という地名が共通するのか、筆者は未だに定見を持ち合わせないが、注意すべき重要なポイントだと考えている。
- (24) 家城神社蔵。翻刻文は、参道に掲示されている解説板の画像から活字化した。
- (25) 真言院境内にある法印祐榮の供養塔には、祐榮が伊賀の愛宕山(現在の愛宕神社・伊賀市上野愛宕町)開基となった小天狗清蔵の弟子で、「第二小天狗」を名乗ったことが記されている。津市教育委員会編前掲註(15) 文献。
- (26) 蔵王権現を祀る津市美杉町三多気の本福院蔵王堂には、「三嶽山／奉寄進／蔵王権現／川口／正白山／法印／快盛」の銘がある馨がある。快盛は、真言院墓地の碑銘では「快誓」とあり、元禄一四年三月に没している。前掲『はくさんの石造物―川口地区編―』。
- (27) 色井氏前掲註(6) 文献所収。
- (28) 「西大寺諸国末寺帳」(松尾剛次『勧進と破戒の中世史』吉川弘文館、一九九五年所収)。
- (29) 熊崎氏前掲註(9) 文献に掲載。
- (30) 津市教育委員会編前掲註(15) 文献。
- (31) 熊崎氏前掲註(9) 文献。
- (32) 採集遺物は、津市教育委員会が保管されている。

流布（伝播）する状況は見られない。当地は、石造宝塔という文化を受容し醸成しつつも、他地域には発信しなかった。このことは、当地で醸成された石造宝塔という密教系文化が、あくまでも受容（消費）としてのそれであり、発進力（それと表裏関係にある求心力）を伴うものではなかったと現段階では見ておきたい。⁽⁴³⁾

また、石造宝塔が多く造立される一四世紀後葉から一五世紀中葉頃にかけての時期は、経塚造営期（一二世紀後葉）と坊院群隆盛期（一五・一六世紀）とをつなぐ時期であることも注目できる。詳細な調査が進めば経塚・石造宝塔・坊院群それぞれの性質の違いも明らかとなるだろうが、大きく見て三者が有機的な関係にある点は重視できると考えている。

一五世紀に天台真盛宗の開祖・真盛上人が登場した雲出川中流域。この地には、白山社・石造宝塔・坊院群など、真盛上人誕生以前から独自の仏教文化が展開していたのである。真盛上人の登場は、もちろん彼自身の修練によるところが大きいのであろうが、彼を育んだ雲出川中流域の地域的特色はより一層の評価が必要であろう。

小稿は、令和三年一〇月三〇日に三重県総合博物館で開催された第二九回企画展「寺院に伝わる戦国の残像―北畠氏のいた時代―」連続講演会で、「密教系寺院と白山権現社（白山比咩神社）のある風景」と題して行った報告の内容を基に成稿したものである。現地調査にあたっては、地元の方々に大変お世話になり、川口白山比咩神社宮司の宮路千行氏には資料閲覧の便宜を図って頂きました。また、成稿にあたっては、熊崎司、山路裕樹の各氏から有益な助言をいただきました。記して感謝いたします。

註

- (1) 高田寺や開泉寺をはじめとした密教系寺院の概略については、白山町郷土史編集刊行委員会編『三重一志白山町文化誌』（白山町教育委員会事務局、一九七三年）等を参照した。
- (2) 下出積與編『白山信仰』（民衆宗教史叢書第一六巻、雄山閣出版、一九八六年）。
- (3) 「成願寺文書」（『三重県史』資料編編中世二）。
- (4) 拙稿「中世石造物を受容すること―畿内近隣（伊賀・伊勢・志摩）の宝塔を素材に―」（『中世石造物の成立と展開』高志書院、二〇二〇年）。
- (5) 瀬田勝哉「中世末期の在地徳政」（『史学雑誌』七七―九、一九六八年）。
- (6) 色井秀讓『小倭成願寺文化誌』（三重県郷土資料刊行会、一九七三年）。
- (7) 矢島有希彦・福原圭一・窪田涼子「成願寺・城・五輪塔」（藤木久志編『莊園と村を歩く』校倉書房、一九九七年）、矢島有希彦・涌井美夏・阿諏訪青美・窪田涼子「戦国期小倭成願寺と村の復元」（『三重県史研究』一四、一九九八年）。
- (8) 吉田幸平『伊勢白山信仰の研究』（三重県郷土資料刊行会、一九八六年）。
- (9) 熊崎司「白山町川口白山比咩神社境内出土の経塚資料について」（『Miehistory』一六、二〇〇五年）。
- (10) 辻本豊『山雄田興廃記』を読み解く（上・下）（『三重の古文化』一〇四・一〇五（二〇一九・二〇二〇年）、同「七白山の信仰と歴史」（『三重の古文化』一〇六（二〇二一年））。
- (11) 瀬田氏前掲註（5）文献。

第1表 雲出川中流域の石造宝塔一覧

	名称	所在場所	構成	状況	石材	塔身形態	備考
1	南出白山社1号塔	津市白山町南出（白山比咩神社）	一石	相輪欠	砂岩	無地	
2	成願寺1号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	笠	花崗岩		下面に納孔
3	西住寺塔	津市白山町上ノ村（西住寺西）	組合式	笠	花崗岩		
4	成願寺2号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	笠	凝灰岩		下面に納孔
5	成願寺3号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	塔身	溶結凝灰岩	梵字	上面に納
6	真光寺塔	津市白山町中ノ村（真光寺）	組合式	塔身	花崗岩	扉形	上面に納
7	成願寺4号塔	津市白山町上ノ村（成願寺）	組合式	塔身	溶結凝灰岩	扉形（半面）	上面に納
8	的場観音寺塔	津市白山町川口（的場観音寺跡）	組合式	塔身	花崗岩	扉形	
9	川口白山社塔	津市白山町川口（白山比咩神社）	組合式	相輪先端欠	砂岩	扉形	
10	南出白山社2号塔	津市白山町南出（白山比咩神社）	組合式	塔身欠	花崗岩		台座は砂岩（後補）

化された棧唐戸は、大和・伊賀では確認できない。このことから、図案化棧唐戸表現は雲出川中流域が独自に創作した表現と考えられる。

細部手法では、塔身と笠との接続方法に特徴がある。5・7では、塔身上端に柄を設けている（したがって笠下面に柄孔がある）。伊賀の石造宝塔では、塔身上面は平らに調整されるものが見られる⁽³⁹⁾ので、柄式も当地の特徴である可能性がある。

石造宝塔の所属時期については、基礎と相輪の形態から推測すると、横長の基礎を呈する1・9・10は、いずれも一四世紀後葉・一五世紀初頭以前と考えられる。なかでも1（南出白山社1号塔）は、一石調整という特殊なあり方で、大振りの相輪で基礎が著しい横長を呈することから、一三世紀後葉頃にまで遡る可能性が高いと見ている。部材のみである2・8は、概ね一五世紀中葉以前のものと考えられる。

さて、当地の石造宝塔を以上のように整理すると、一三世紀後葉の南出白山社1号塔を初現としながらも、その後しばらく空白期が続くことになる。これにつ

いては推測の域を出ないが、南出白山社1号塔は経塚標識塔として造成されたもので、一四世紀後葉頃に隆盛を迎える当地の石造宝塔の動向とは一線を画すると考えている。

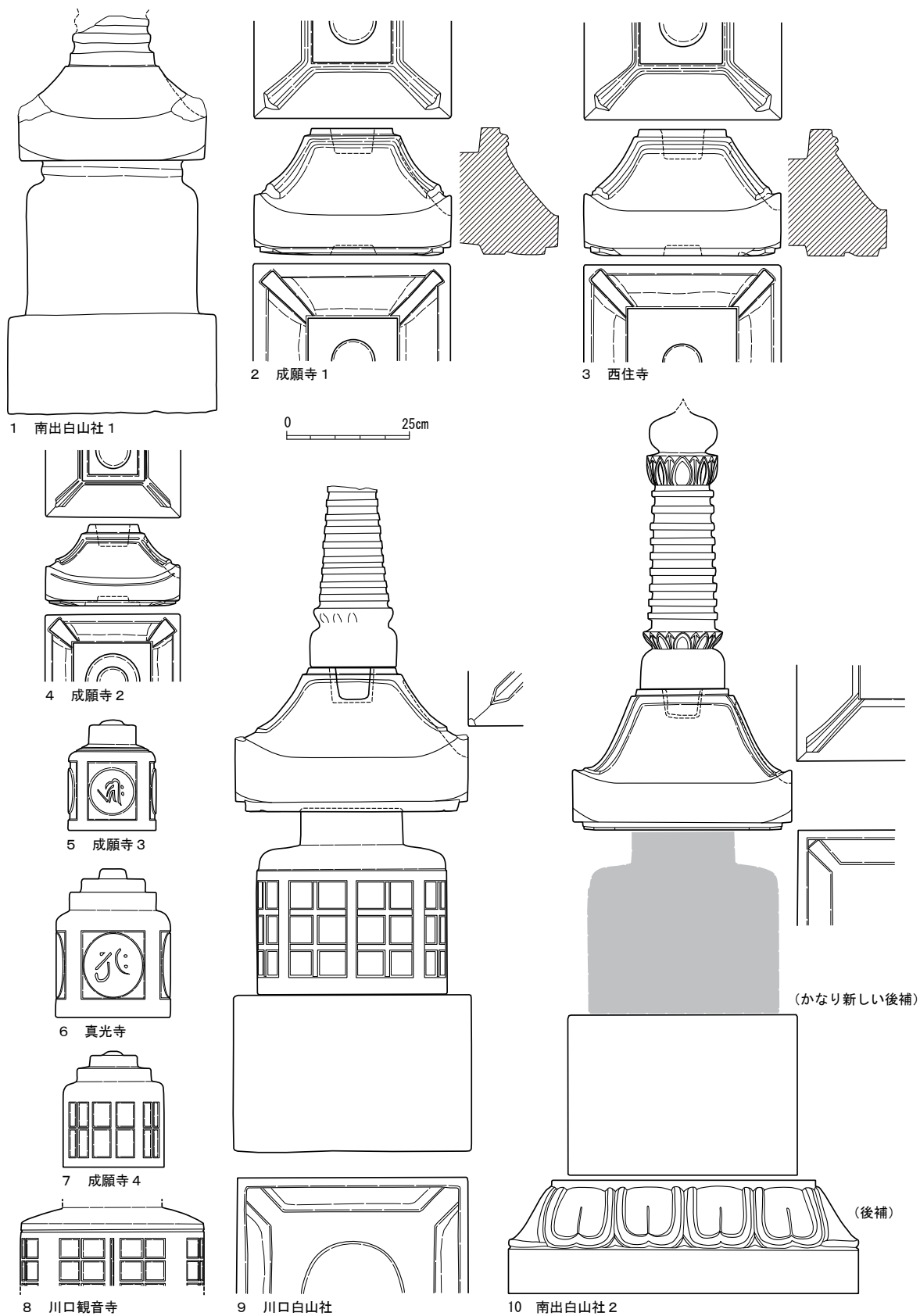
なお、南出白山社2号塔の台座は一六世紀後半頃に後補されたものである。これについては、当地に残る珍徳上人による白山社勧請伝承（天文二年とされる）が、実際には白山社（坊院を含む）の整備時期を示しているのではないかと考えている⁽⁴⁰⁾。

おわりに〜今後の課題〜

小稿では、雲出川中流域で特徴的に展開した白山社と中世寺院を考えると、遺跡としての坊院跡と石造宝塔の資料提示を行った。小稿の主題が研究基礎資料の提示にあるため、結論的なことを述べる段階ではないが、さしあたりいくつかの見通しと課題を示しておく。

まず、坊院群が成立・展開する契機として、平安末期頃の経塚造営が重要な意味を有している可能性が高いことである。今回調査を行った川口井生白山坊院跡や布引坊院跡では、一二世紀末頃の経塚が確認されている。南出白山坊院跡では現地調査で経塚は確認されなかったが、境内に立つ石造宝塔（南出白山社1号塔）は経塚標識塔の可能性が高いと考えている。時枝務氏は、経塚の造営はその地が「聖地」として展開する契機になるとしており⁽⁴¹⁾、今回紹介した事例はその解釈に符合する。これまでの研究は、経塚を単独で採り上げて検討したものが多いが、重層的な遺跡が展開するきっかけとして経塚の再評価が必要である⁽⁴²⁾。

石造宝塔については、伊勢唯一の集中地域として雲出川中流域は特筆できる。なかでも、塔身の扉形に当地独自の棧唐戸表現が見られることは、石造宝塔が当地で根付き、それを制作する石工が誕生していたことを示唆する。ただし、雲出川中流域が起点となり石造宝塔が他地域へと



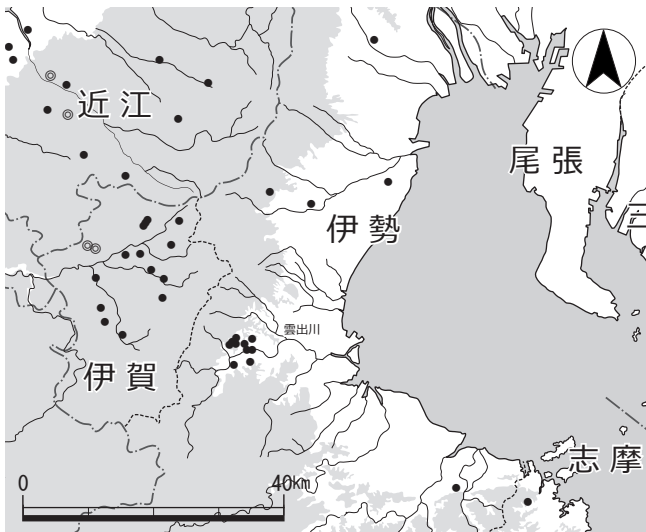
第 6 図 雲出川中流域の石造宝塔実測図

現在確認している布引坊院跡よりも高所に、別の坊院跡（遺跡）が存在する可能性もある。布引坊院跡から西方三〇〇mほどの間にその形跡は見いだせなかったが、さらに奥地で新たな坊院跡が発見される可能性は残されている。

5 石造宝塔

a 石造宝塔の傾向

つぎに、雲出川中流域における石造宝塔の状況を見る。石造宝塔は、巨視的には密教（天台系・真言系）の教義に基づく仏塔を石造物として表現したものである。初現は平安末期にまで遡るが少例で、鎌倉前期（一二世紀中葉）頃から増加する。また、念仏に関連した宝塔も鎌倉後



第5図 旧伊勢国近隣の石造宝塔分布（●：宝塔、◎：多宝塔）

期から存在し、これは天台系に由来する浄土教との関わりが考えられる。

石造宝塔が最も多く造立されるのは一四世紀前半頃から一五世紀前半頃である。近隣では近江（滋賀県）に事例が多い。三重県内では、伊賀と雲出川中流域に多く見られる（第5図）。伊勢で石造宝塔が集中するのは当地のみで、特筆できる。

b 個別資料の状況

雲出川中流域で確認した石造宝塔の実測図を第6図、その内容を第1表で示した。1は南出白山社境内にある。相輪部の大半を欠損するもの、全体を一石で整形する。

2～4は笠部のみの残片で、いずれも隅木を底面から挟り込んで作り出す共通する手法で整形される。4の軒面には段を意味する横線が表現されている。

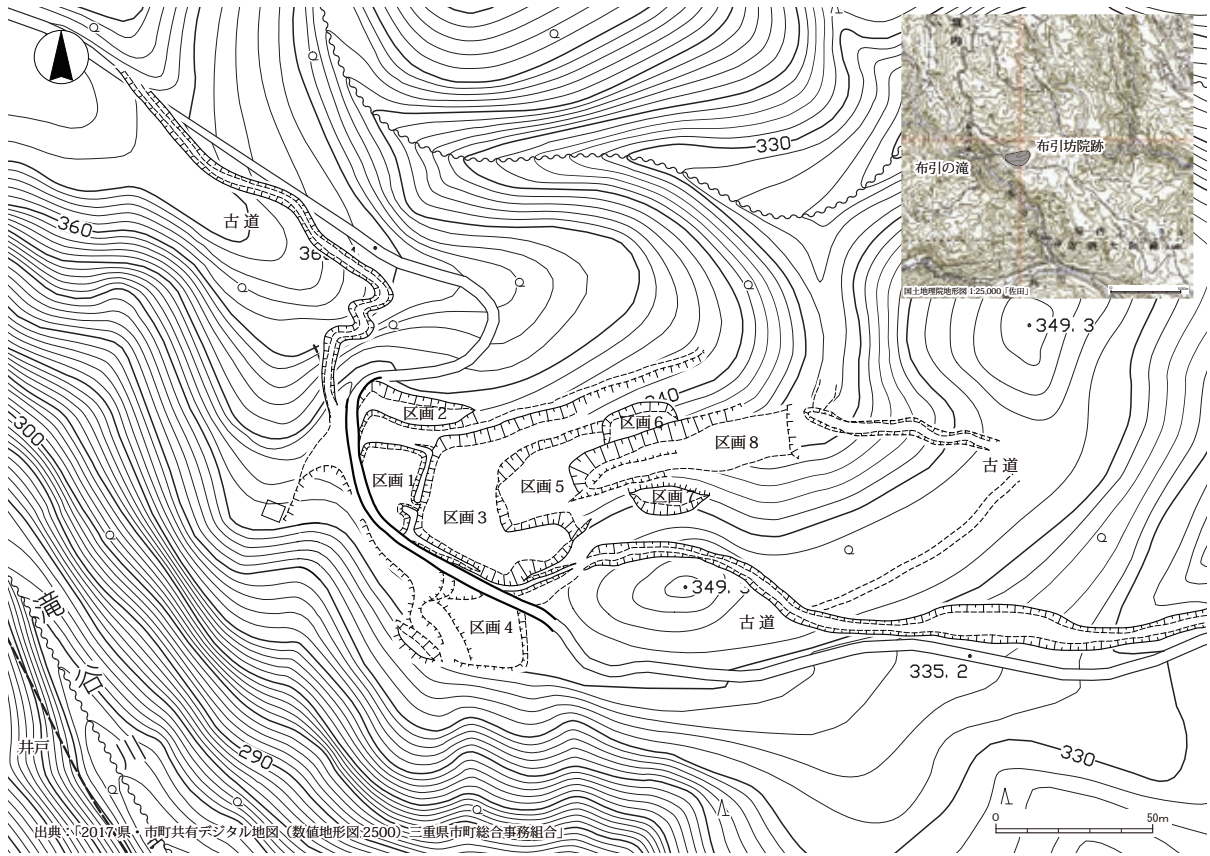
5～8は塔身部。5・6は金剛界四仏の梵字を四方側面に入れる。7・8は簡略化・凶案化された棧唐戸の扉形を刻んでいる。7は六分割した側面の三方（全体の半分）のみに扉形を表し、残る半分は無地である。8は凶案化されつつも比較的精緻な棧唐戸を側面四方に配している。

9は川口白山社の参道脇に立つ。相輪先端部を除く全体形が分かる事例として当地唯一のもの。笠部下面の隅木は2～4のような挟り出しではなく、底面から軒部までを削ることで整形している。塔身の棧唐戸は8よりも凶案化されているが、側面四方に配している。基礎は無地で側面形は横長である。

10は南出白山社境内にあり、1の横に立つ。相輪・笠・基礎は造立当時のものだが塔身と台座は後補。相輪は精緻な調整がなされ、宝珠下と伏鉢上の請花はいずれも複弁八葉。笠下面の隅木表現は9と同様である。基礎の側面形は横長。台座は硬質砂岩製で、反花の形態から一六世紀代の後補と考えられる。塔身は比較的最近の後補である。

c 特徴と時期

雲出川中流域の石造宝塔には、塔身に棧唐戸を表現する事例が複数見られる。扉形の表現は、近江では開き戸表現が主体で、大和や伊賀では棧唐戸が多い。ここから、雲出川中流域の石造宝塔は、大きくは大和・伊賀との関係が強いと見ることができ、当地で見られるような凶案



第4図 布引坊院跡の状況

という三つの滝の総称である。大日滝の名称は大日如来に起因すると考えられる。論拠としては弱いが、「大日滝」の呼称から、この坊院跡は真言密教に関係する寺院跡と考えておく。

なお、当地から東に隔たった山麓にある蓮華寺（津市白山町上ノ村）は、「寺屋敷」の子院という。これが事実であれば、布引坊院跡はかなり広大な範囲を考える必要があるが、今回の調査はそこまで及ばなかった。

a 坊院跡の状況

布引坊院跡は伊勢・伊賀を画す布引山地の標高約三四〇mの地点にある。近隣の垣内・上ノ村集落からは遠く離れている。当地の横を流れるのは滝谷川で、下流で垣内川と合流、垣内川はさらに雲出川に合流して伊勢湾へと注ぐ。滝谷川の上流にある瀑布が「布引の滝」である。坊院跡の遺構はこの滝を見下ろす位置にあるが、遺構は滝方向とは異なる北東方向に開く谷地形を中心に広がっている。

中心となる区画1はこの谷の最奥部にあたる。低い土塁を伴っており、東面の南側に虎口がある。西半部は道路の造成で破壊を受けている。区画1から北東方向に谷筋があり、この谷筋の両側に削平段が築かれている。また、現在は布引の滝を望む位置に四阿が設置されているが、この位置にも坊院に伴う施設があった可能性もある。当地が遺跡として認識される契機となった経塚関連出土品は、道の造成中に発見されたとされているので、その位置は区画1西部付近か、あるいは、その南にある現在の四阿付近と考えられる。

なお、布引坊院跡に至る参道（古道）は、東方約一・八kmにある「青山メモリアルパーク」の、さらに下方から続いている。この道は幅約三mの溝状を呈し、坊院跡近くでは幅六mほどにまで広がった箇所もある。また、この古道は区画1の西方斜面を経て尾根上に至り、さらに高所の西方へと続いている（一部は東海自然歩道と重なる）。そのため、

3 小倭南出の白山社と坊院跡

a 南出白山社の伝承

つぎに津市白山町南出に鎮座する白山比咩神社の周辺に見られる坊院跡を見る。貞享三（一六八六）年五月の年記がある「白山妙理大権現本記」（成願寺藏³⁶）には、当地は「風神森」と呼ばれ、末社・宝藏・回廊・鐘楼・風宮等が立ち並んでいたこと、天文二二年に鎮徳上人が白山権現を勧請したこと、天正年間の兵乱によって灰燼に帰したが、江戸前期の寛文・貞享年中に白山妙理大権現・若宮八幡・牛頭天王・風宮・龍神・弥勒堂・十二社などが再興されたこと、などが記されている。

南出白山比咩神社の周辺にも、川口井生白山坊院跡に類した関連遺構が展開している。当地の埋蔵文化財包蔵地名は「南出白山比咩神社遺跡」とされているが、ここでは「南出白山坊院跡」と称し、状況を見ていく。

b 坊院跡の状況

南出白山比咩神社は北西方向に派生する標高約九〇m（山麓集落部との比高差約四〇m）の低丘陵頂部に鎮座する。現在は丘陵北西隅に鳥居があり、小型車登坂用の道となっている。地元の方の話では、丘陵北西部からの道は車道用も兼ね新たに作ったとのことである（ここにある鳥居も元は現在の国道一六五号の脇に建てられていたものという）。丘陵北東裾にも鳥居があり、そこから通じる古道1が本来の参道である。また、古道1とは別に、鳥居から東尾根（区画11・12へと至る道もある（古道2））。

現在の白山比咩神社が鎮座する西尾根は「へ」の字形を呈しており、最高所に社殿等がある。尾根の頂部および南斜面部を中心に坊院跡ないしはそれに関連すると見られる削平段が連続する。白山社から一段下の削平段に二基の宝塔があり、「鎮徳上人供養塔」の看板が立てられている。

る。また、この尾根の南麓には、坊院跡に至る古道3が通じている。

東尾根の頂部には二つの幅広い平坦地が造成され（区画11・12）、東尾根と西尾根間の谷奥部にも尾根を削って平坦地が造成されている（区画10）。このうちの区画10には一六世紀前半頃の五輪塔がある。東尾根周辺では、一五世紀頃と考えられる常滑産陶器片のほか、区画11・12付近ではコビキB手法³⁷の丸瓦が数点確認できる。

以上の状況から、南出白山社の周辺にも坊院群が形成されていたと考えられる。散布する遺物からは、区画11・12には瓦葺き屋根の仏堂があったと考えられる。

なお、標高の高い南側の尾根頂部付近も踏査したが、経塚やその他の施設は目視確認できなかった。

4 布引の滝を望む坊院跡

a 既存の調査と伝承

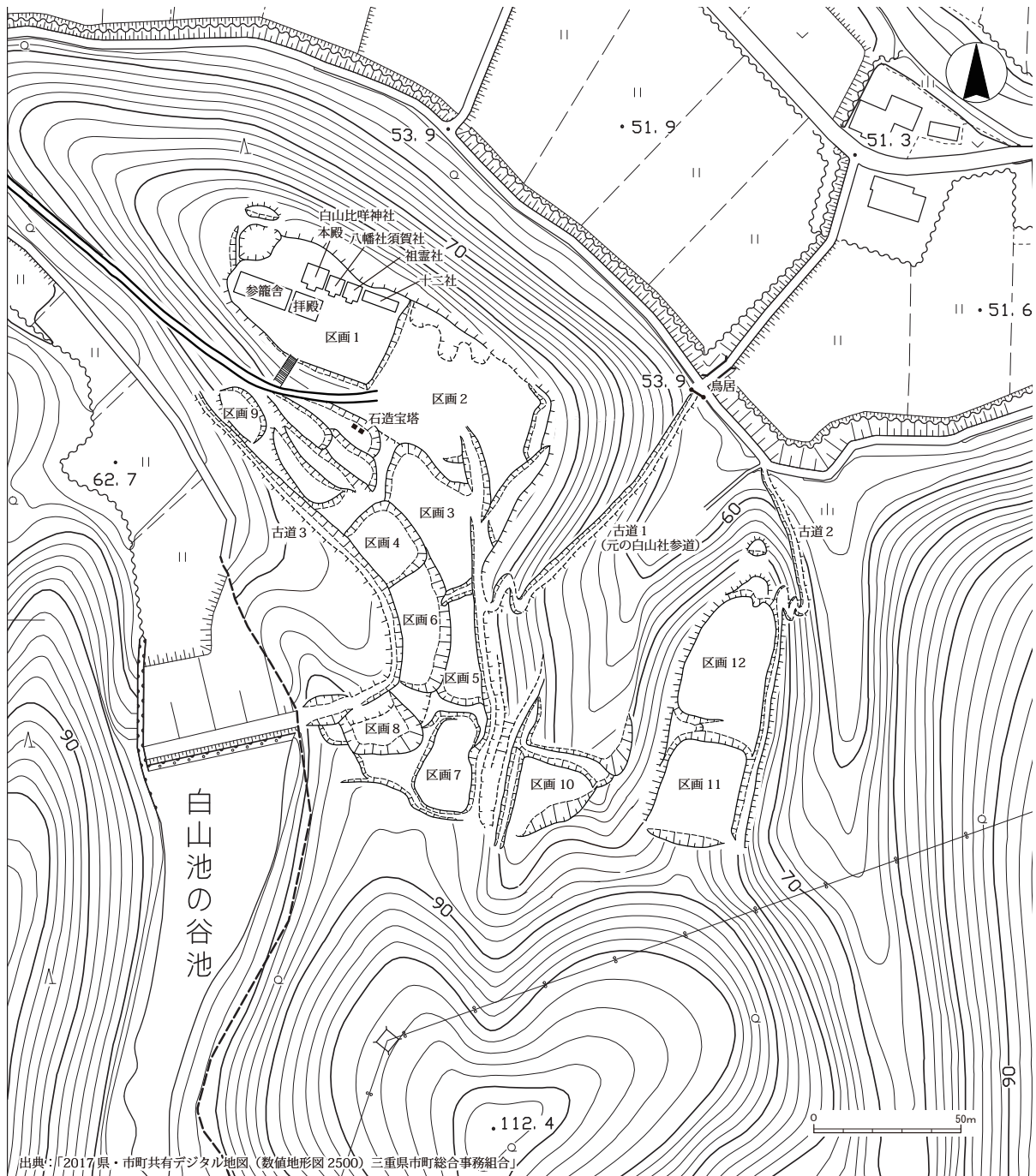
津市白山町垣内の山中、「布引の滝」の傍らにも坊院跡と考えられる遺構が展開している。当地は現在、「青山経塚」という埋蔵文化財包蔵地名で把握されているが、かつては「倭寺屋敷経塚」と呼ばれていた。昭和二四年頃、布引の滝へ至る車道建設の際に土製経筒や和鏡が出土し、当地の通称「寺屋敷」を採用してこの名が付けられたようである。出土遺物の概要は紹介されているが、これまで現地（遺跡）に関する報告はほぼ皆無である。

当地は、後述のように明らかに寺院関連と思しき遺構が見られ、一部が埋蔵文化財包蔵地である「青山経塚」の範囲に入る。しかし、「青山経塚」の名称では、遺跡全体の性格としては誤解を招き易いため、小稿では「布引坊院跡」と呼称する。

布引坊院跡の西にある「布引の滝」は、「霧生滝」、「飛竜滝」、「大日滝」

坊院（寺院）は、平安末期からあった可能性はあるが、石造宝塔が造立される一四世紀後半には存在していたのではないか。「荒廃記」の記載に拠れば、坊院群は江戸前期まで存続し、その後は真言院のみが残存していたことになる。このあたりの詳細は今後の調査を待つほか無い。

以上のことから、川口井生白山坊院跡は、平安末期から江戸期にかけて重層的に形成された遺跡と考えられる。なお、当地の現在の小字名は「山尾田」で、江戸後期の地誌『勢陽五鈴遺響』には川口村の集落として「山雄田」の名が見える。³⁵ 現在当地に民家は無いが、江戸期には何軒かの民家が存在していたものと考えられる。したがって、この遺跡も江戸期の民家による改変が加えられている可能性がある。



第3図 南出白山坊院跡の状況

江戸前期以前の当地を考えるにあたっては現地踏査と合わせ検討の価値がある。そこで、川口白山社を含めたこの地を「川口井生白山坊院跡」（埋蔵文化財包蔵地「川口白山比咩神社南西遺跡」の一部を含む）と称し、具体的に見てみよう（第2図）。

b 坊院跡の状況

現在の川口白山比咩神社には、山麓から真言院まで通じる車道が付けられている。また、真言院から本殿までの間にも関係者のみが通れる車道がある。このため、いくつかの滅失箇所があると考えられるが、それでも多くの遺構が現地に残されている。川口井生白山坊院跡は、白山比咩神社本殿から真言院にかけての区域（Ⅰ）、真言院の南から西にかけての丘陵斜面部区域（Ⅱ）、古道を挟んだ南側の区域（Ⅲ）、南西丘陵部の経塚・中世墓群およびその近隣区域（Ⅳ）に分けられる。

Ⅰの区域では、丘陵頂部に白山社がある。そこへと向かう石段の左右は雛壇状に削平段が造成され、このうちの一箇所に石造宝塔が置かれている。真言院の北東上方にあたる削平段は「鐘楼跡」とされ、鐘楼堂に相応しい四つの礎石が残る。なお、白山社本殿の横には元亀四（一五七三）年銘の石造灯籠がある。

Ⅱの区域は丘陵斜面部で、比較的面積の広い削平段が連続して造成されている。なかでも区画4から区画7の4区画は、ほぼ一直線上に並ぶ。区画6と9には区画内に江戸期以降と考えられる方形に組まれた石列がある。区画4は江戸期から現代にかけての墓地となっており、なかには天正十（一五八二）年八月銘の一石五輪塔が含まれている³⁰。西端にあたる区画12には、自然石で造られた江戸時代末期以降とみられる手水鉢がある。そこには「八幡社跡」の木製看板が立てられている。

区画8と9の間には、東西方向に幅二〜四mの古道が通っている。古道は溝状を呈しており、かつては頻繁な交通のあったことが窺われる。

この道には「井生街道」の木製看板が立てられている。道は区画9の西で三方向に分かれている。区画9は東西約30m、南北約30mの大きな一区画で、内側に江戸期以降と考えられる石列が方形に巡っている。

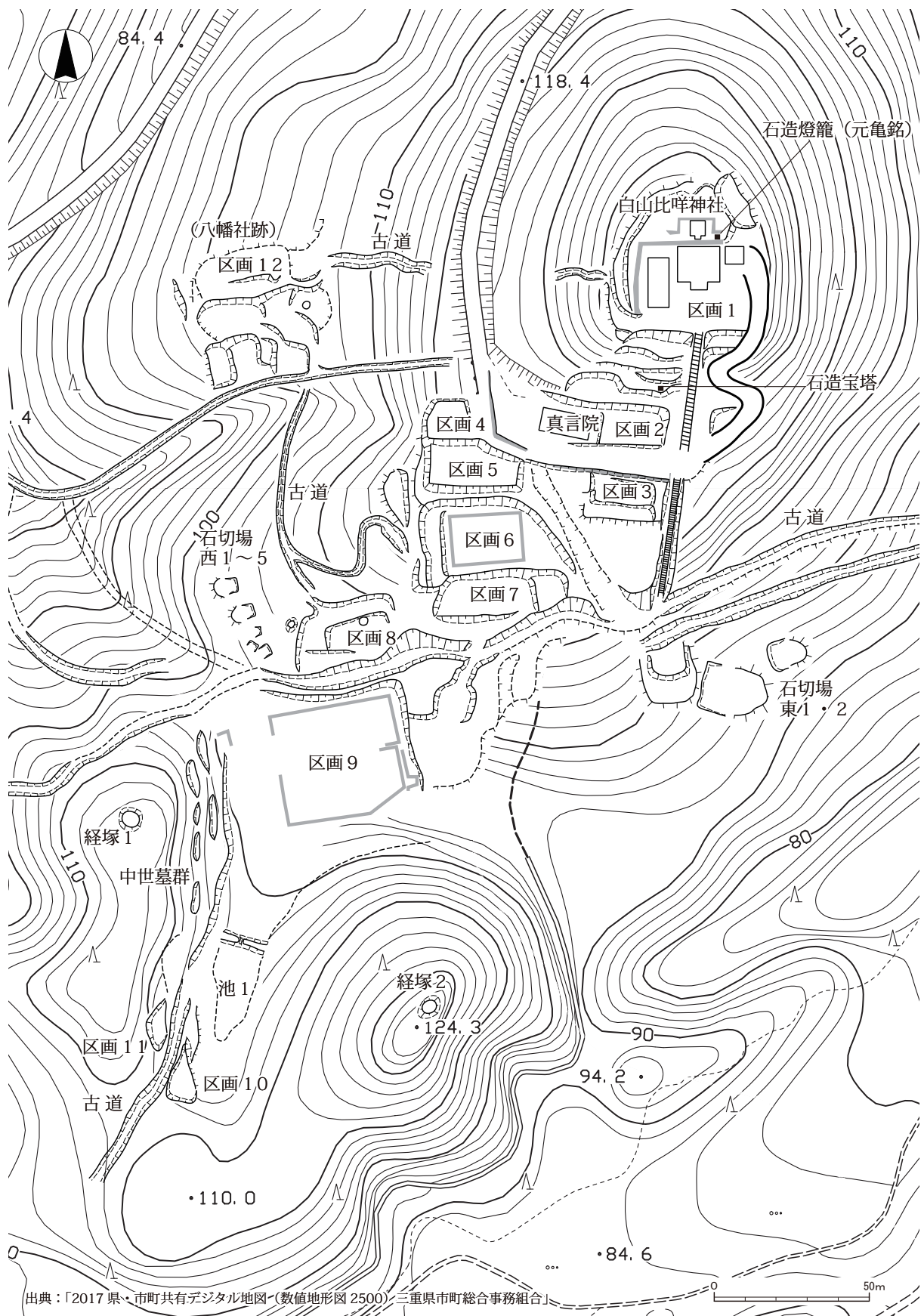
南西丘陵部には一〇箇所ほどの小規模な削平段を複数伴う中世墓群、二基の経塚、削平段が二箇所、そして人工堰堤を伴う池がある。経塚は長軸約4m、高さ1mほどで、自然石が散乱する。一二世紀後葉頃の遺物が採集されている³¹。中世墓群は小規模で不定型な削平段が連続した形状で、段上や周囲に五輪塔・一石五輪塔が散乱する。ここで採集された遺物には、蔵骨器と考えられる一三世紀後半頃の常滑産小形甕などがある³²。石塔は一五世紀後葉から一六世紀代のものである。

これ以外では、区画8の西方と区画7の南東方向に花崗岩の石切場跡がある。西石切場には、江戸中期頃の矢穴が確認できる³³。東石切場跡では江戸中期頃の矢穴も若干見られるが、大きく露天掘りした場所が二箇所あり、明治期以降も採石が続いていた可能性がある。なお、室町期石造宝塔の岩質はこの花崗岩に近似するため、これらの石切場が室町期以前に遡る可能性がある。

c 坊院跡の所属時期

川口井生白山坊院跡の現況は、「荒廃記」の記述と概ね一致する。大日如来・弥勒菩薩が本尊とする「荒廃記」の記述、および今に残る真言院という名称から、当地は白山社を鎮守とした真言系寺院の坊院群が展開していたと考えられる。ただし、具体的な堂舎の位置比定は現段階では分からない。

経塚の採集遺物から、当遺跡の形成は平安末期にはじまると考えられる。中世墓群は一三世紀頃にはじまり、散在する石塔は一五・一六世紀を中心とする。中世墓群のあり方からは、一五・一六世紀が当地の最盛期と考えられる³⁴。



出典：「2017 県・市町共有デジタル地図（数値地形図 2500）三重県市町総合事務組合」

第 2 図 川口井生白山坊院跡の状況

〔史料一〕

（前欠カ）

右志者、為一志重久同行久

同三郎、現世當生二世大願成

就 円満之状如右 大施□

□□

沙弥成念

嘉元二二年ハ丙午ヱ二月一日

*ハヱは割り文字

この記載から、北家城の旧白山社には、嘉元四（一三〇二）年に造立された社殿が存在していたことがわかる。厳密に言えば、この社殿が嘉元四年当時に白山社であったことを示す史料は無いのだが、永らく白山社の社殿であった建造物の遺品として残された木扉なので、嘉元四年の当時から白山社であった可能性を考えることは許されよう。

以上により、雲出川中流域の白山社は、明応三年以前には勧請されていたことは確実で、嘉元四年まで遡る可能性があると考えておきたい。

c 白山社と寺院

平安中期から江戸後期にかけては神仏混淆の時代である。この段階では、白山社は寺院と一体化していたと考えられる。「七白山」のうち、川口白山社では現在も真言院（現在は無住）がある。江戸期の真言院は、本寺を持たない真言宗の寺院であった。江戸前期には「小天狗」を名乗る住持や、蔵王権現を祀る真福院（津市美杉町多気）の住持を勤める者もいた。²⁶⁾「小天狗」は江戸前期に伊賀の寺院を数箇所復興した修験僧で、真福院も修験との関わりが深い。よって真言院も修験との関わりが想定される。寛文七（一六六七）年の「勢州一志郡寺改帳」²⁷⁾によると、江戸期の真言院は葬儀を行う檀寺ではないが、祈願寺として崇敬を集めていた。檀家数は五七七軒あり、これは雲出川中流域では成願寺の

七七六軒に次いで多い。

南出白山社に現在寺院は無いが、江戸前期に仏堂があったという記載がある（後述）。飯福田白山社（現在は跡地のみ残る）は真言宗醍醐派の飯福田寺の一角で、周辺は「伊勢山上」と呼ばれる修験の行場である。家城白山社は近隣に開泉寺がある。現在の開泉寺は天台真盛宗だが、南北朝末期の「西大寺諸国末寺帳」（28）に記載される「イエキ戒泉寺」にあたると思われる、南北朝期には真言律宗であったと考えられる。

竹原・山田野・八対野の白山社と寺院との関係は明確でないが、それ以外の白山社は密教系寺院や修験道との関係が窺われる。白山社は寺院の鎮守として位置づけられていたと考えられるが、当地では真言密教系と関わりのある寺院が複数見られることにも注意を要する。

2 川口井生の白山社と坊院群

a 川口井生白山社の伝承

真言院旧蔵（現在は川口白山比咩神社が所蔵）の「山雄田荒廃記」（以下「荒廃記」と呼称）という史料がある。²⁸⁾軸を欠失した卷子装で、全長四〇七・六cm、紙幅三〇・八cm、一二紙で構成されている。万治二（一六五九）年三月に真言院住職の法印快誓が作成し、宝永五（一七〇八）年三月と享保一四（一七二九）年に追記がある。この史料は全て同筆で書かれているので、享保一四年以降に作成された写しと考えられる。

この史料によると、真言院の正式名称は「正白山鎮護国家寺」といい、寺域には摩尼殿（瓦葺）があり、大日如来と弥勒菩薩が本尊で、四〇（五〇棟）の坊院（坊舎）があったとする。正白山鎮護国家寺の寺域は広く、白山社はその鎮守として位置付けられていると見られる。

現在の川口白山比咩神社周辺には、後述のように坊院跡と考えられる遺構が点在している。「荒廃記」には誇張表現があると想定されるが、

城館遺跡については悉皆調査報告等があり、⁽¹³⁾ 福原圭一氏や竹田憲治氏による分析もある。⁽¹⁴⁾ 石造物については、『はくさんの石造物』として旧白山町域全体を悉皆調査した報告書が刊行されているし、⁽¹⁵⁾ 当地の石造宝塔に関しては筆者も若干の分析を行っている。⁽¹⁶⁾

このように、当地の歴史的特色を解明するための研究は次第に深化しているのだが、いずれも個別分散的である。とくに白山社をはじめとした社寺に関する検討は未だ希薄である。地に足を付けて地域の歴史を解明するためには、最終的には通史的総合的な視座が求められるが、前提として個別事象の実態解明が必要である。当地に即せば、未だ検討が深化していない白山社をめぐる場の状況を知ることが先決となる。

そこで小稿では、総合的検討の足がかりとなる基礎資料の提示を最大の目的として、白山社関連遺跡を中心とした遺跡（遺構）と、当地の特徴である石造宝塔、それぞれの状況を見ていく。⁽¹⁷⁾

1 白山社（白山比咩神社）のこと

a 白山社の呼称と本地仏

まずは白山社に関する情報を整理しよう。現在の白山社は「白山比咩神社」と呼ばれている。これは明治期以降の呼び名で、江戸期までは「白山権現」、あるいは「白山三所権現」などと呼ばれていた。⁽¹⁸⁾ 「三所権現」は、白山妙理権現（伊弉冉）・大行事権現（菊理媛）・大汝権現（大己貴命）⁽¹⁹⁾ を指す。また、白山権現の本地仏は十一面観音（白山妙理）、聖観音（大行事）、阿弥陀如来（大汝）とされ、山岳信仰と修験道及び密教が融合した神仏習合の形態と概ね理解されている。

b 雲出川中流域の白山社

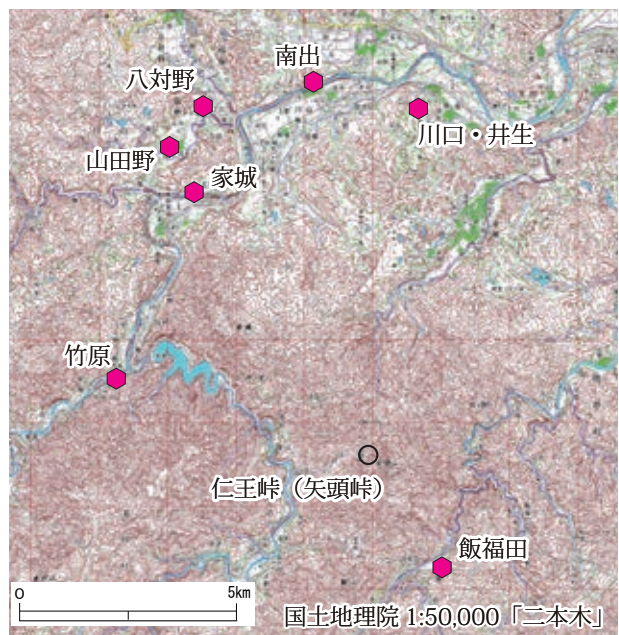
つぎに、当地の白山社の状況を見る。現在、雲出川中流域には地元で「七白山」と呼ばれる七社の白山比咩神社があり（第1図）、⁽²⁰⁾ 三重県内唯

一の白山比咩神社集中地となっている。

しかし、「神社明細帳」によると、明治段階の雲出川流域に白山比咩神社は一二社存在し、三重県内全体では二六社あったという。⁽²¹⁾ 江戸期以前、白山信仰は今以上に盛んであったと考えられる。

当地の白山社は、『勢陽五鈴遺響』によれば天文二二（一五五三）年に鎮徳上人が勧請したとする。⁽²²⁾ しかし、明応三（一四九四）年九月一日付、小倭一揆衆起請文（「同」）に「山雄田於神前可為御鬮」とある。⁽²³⁾ したがって、明応三年以前から当地には白山社があり、そこが起請文に登場するほどの崇敬を集めていたことは疑いない。

では、当地での白山社成立はいつまで遡るのか。これに関しては、北家城に鎮座していた白山社（現在は合祀により跡地のみ残る）の木扉（現在は家城神社蔵）に記された銘文が参考となる。⁽²⁴⁾



第1図 「七白山」の位置

雲出川中流域の中世寺院跡と石造宝塔

伊藤 裕 偉

はじめに、雲出川中流域の特徴

伊勢平野の中央を流れる雲出川の中流域（現在の三重県津市白山町・一志町域）は、室町後期に天台真盛宗の開祖となった真盛上人（一四四三～一四九五）を輩出した地域である。この地域には、鎌倉・室町期の真言系・天台系寺院として高田寺（廃寺、現在の津市白山町川口に所在）や開泉寺（同市同町家城、現在は天台宗）などが点在しており、当時作られた仏像が今も各所に残されている^①。これら社寺によって形成された文化的土壌により、この地に真盛という高僧が出現したと考えられるのである。

真盛の存在により、現在この地に天台真盛宗寺院が集中するのは当然なのだが、一方で白山社（白山比咩神社。以下、歴史的動向をいう際には「白山社」、現在の状況をいう際には「白山比咩神社」と記す。）の集中があり、見逃せない特色となっている。旧加賀・飛騨国境（現在の石川・岐阜県境）に聳える白山連峰を源とする白山信仰は、大きく捉えれば修験道と密教の融合によって普及したのだが、鎌倉・室町期の畿内近隣で最も集中的に白山社が造立され、今なお信仰が続く特徴的な地域として当地は特筆できる。白山社と前記寺院群とが有機的な関係を有すると見ることも、蓋然性の高い推測として許されるであろう。

さらに、真盛上人の活動期と重なる一五世紀後半には「小倭一揆」と呼ばれる地域結合がこの地で機能していた^②。この地域結合は真盛上人へ誓書を献ずる形で取り結ばれているのだが、その文中にも白山社が登場している^④。つまり白山社は、中世の段階からこの地の精神的支柱となる存在だったと認識できる。

また、当地に特徴的な中世仏教資料に石造宝塔がある。巨視的に密教系と見られるこの石造物は、旧伊勢・伊賀国（以下、「伊勢」等と表記）全体としては決して多くないが、当地には集中分布する。そして、後述するが白山社とも無縁とは考えられないのである。

中世の雲出川中流域は、以上のように多彩な文化的要素が見られる地域である。なかでも白山社の密集は当地最大の特徴といえ、その状況解明は、この地の歴史的特色を知るうえで欠かせないと考えられる。

では、雲出川中流域はこれまでどのように検討されてきたのか。まず、天台真盛宗と成願寺・真盛上人については色井秀讓氏の^⑤労作のほか、立教大学日本史研究会による調査がある^⑥。白山信仰に関しては吉田幸平氏の^⑦整理があり、川口白山比咩神社と真言院に関する課題が熊崎司氏^⑧によって提示されている。近年では辻本豊氏^⑩によって白山社に関する検討が深められている。また、小倭一揆については瀬田勝哉氏^⑨による先駆的な研究^⑪や、藤木久志氏指導のもとでの検討もなされている^⑫。当地に残る

筆者は、論文構築にあたり、生産高論を前提にして論を組み立てているためここでの理論が誤っていることとなる。そのためにさらなる検討の必要性があり、史料の内容をどのように解釈するのかが争点となるが、ここでは、事例を紹介するに留めたい。

ただ、尾川村の免割帳分析でも、数値上では延宝二年の事例のように年貢徴収の基盤となる田方高率がほぼ全員一〇〇%以上であることに、どのように生計を立てていたのかなど疑問も残る一方、寛文五年の事例では、手元にながしかの米が残るようなこととなっている。この時期の災害等による不作で米収穫事態が少なくなった可能性も捨てきれず、この点についてはさらに検証を進めることとし、現時点で木下氏や池上氏が用いたような史料も見つかっておらず、本稿では従来の説に従って検証を行う。

(60) 尾川区有文書「延宝二年寅之年扣留帳」。

(61) 同右「延宝三年卯年扣留帳」。

(62) 同右。

(63) 百姓成立を念頭に年貢減免していく中で、各村落にとって最適な租率・年貢高に収斂していった可能性があり、さらに言えば、定免法導入にあたり調査した租率・年貢高が後年の租率や年貢高基準となったのではないかと考えるが、この点についてはさらに検証を進めていきたい。

【付記】

資料所蔵者である熊野市教育委員会や曾根浦区、複製物所蔵機関である三重県歴史公文書班には、資料利用や掲載にあたりさまざまな便宜を図っていただいた。ここに記して感謝いたしたい。

(元三重県環境生活部文化振興課歴史公文書班職員 藤谷彰)

(52) 尾川区有文書「延宝二年尾川村寅之年扣留帳」。

(53) 同右「寛文十三(延宝元)年丑ノ免定」。

(54) 註(52)。

(55) 延宝二年の災害については、三月二十七日夜大水、七月二十六日頃の日照り後、二十七日晩大水、八月十日大水、同月十七日大水があった(註(52))。また、十月五日条には「当年も世間損毛ニ付、来春も飢饉ニて可有之様ニ風聞有之候間、百姓之食物兼而合用意いたし」とあり、水害の多い年で飢饉を警戒して食料準備をしていたようである。ただ、その年の割付状では年貢減免は行われていない。

(56) 尾川区有文書「寛文五年巳年免ならし帳」。

(57) 尾川区有文書「延宝元年丑ノ歳郷免割帳」。

(58) この数値には、長井村入作百姓・村中が含まれる。

(59) 安良城盛昭氏は、豊臣政権誕生以降、寛文・延宝期までを幕藩体制社会第一段階と捉え、封建領主は百姓より全剰余労働を年貢・諸役として搾取することを意図し、それが貫徹されていた時期であるとし、元禄・享保期以降は寄生地主・小作関係発生の起点となり、封建領主は年貢・諸役を搾取でなくなったとした。そして、第一段階には大名領主の恣意により年貢額決定されること、その徴収法が見取であること、近世中期以降の定免制は封建領主と農民間の契約として存在することを指摘した。また「石高制に基づく米納年貢制」の特質を、耕地は田畑とも一様に米を生産するものとして石高で表されて、水田は封建地代の給付の場で、畑地が農民再生産の場であるというところに本質があるとした(『増補版幕藩体制社会の成立と構造』御茶の水書房、一九六四年)。

また佐々木潤之介氏は、全剰余労働の搾取形態から第一段階を慶長〜寛永期、第二段階を慶安・寛文・延宝期、第三段階を元禄〜享保期、

第四段階を元文〜天明期とした。第一段階に該当する十七世紀の年貢の機能を河内国の幕領を事例にして検証を行った。そこでは元和初年(寛永中期は、畿内が幕藩制的分業の中に位置づけられる過程で、領主の年貢需要の激しい変動があった時期とし、寛永中期〜慶安期は農政生産が安定化し、領主の年貢搾取の安定期であったことなどを明らかにした(『幕藩権力の基礎構造』御茶の水書房、一九六四年)。

この主張に従えば、本稿で対象とする時期は寛文・延宝期であり、農業生産が安定していたため、百姓より全剰余労働を年貢・諸役として搾取することが貫徹されていた時期である。また水田は封建地代の給付の場、畑地が農民再生産の場ともあり、ここで検証した尾川村の事例も該当する可能性がある。

一方で、近年木下光生氏は近世農村の家計記録をもとに貧困問題について分析している。その中で所持石高(持高)の有無や多寡で「貧農」を規定する方法や貧農・農村荒廃研究で、「免定」の免率(公定年貢率)や高免撤廃嘆願史料から百姓が重税にあえいでいたこと、公定年貢率が実質税率であったのか等について疑問を呈している。こうしたことから「免定や検地帳といった公文書に登録・表記された村高・持高や年貢率は、実際の生産量や税率を計るうえで、まったくあてにならず、ゆえに、そこから幕藩権力による「重税」の賦課や「収奪」を主張することも、実証方法として完全に破綻した」としている。その上で、村高を算出するための斗代(石盛)が、実際の生産力に近い値であろうことが暗黙の前提となっていることや、太閤検地で確定された村高が生産高に近似しているとの評価について、池上裕子氏が提示した「斗代≠年貢高で、年貢賦課基準高」に基づいて従来の重税論を批判している(木下光生「村の「貧困」「貧農」と近世日本史研究」『貧困と自己責任の近世日本史』(人文書院、二〇一七年)。

口六郡では各組に一人配置されていた（『和歌山県史 近世』）。

(38) 註(24)。

(39) 尾川村では、延宝二年に二石三斗九升二合が「寅之改出し」と新田として高入された（「延宝二年寅之免定」）。その後貞享四年にさらに高入され、三石二斗四升（田方一石七斗四升四合、畑方八斗四升八合）となった（「貞享四年免定」）。元禄六年には新田が三石四斗八升（田方二石三斗五升二合（二斗四升が定二つ取、二石一斗一升二合が三つ一分五厘七毛）、畑方八斗四升八合）となった（「元禄六年酉之免定」）。さらに元禄九年になり、新田が五石五斗四升四合となった。そのうち田方は二石三斗三升六合が定二つ取、一石八斗二升四合が七つ一厘一毛、五斗三升六合が定一つ五分の三種類（「元禄九年子免定」）となり、二種類の田地は既に定免となっていることから、準備段階では定免となっていない石高一石八斗二升四合の田地が毛見調査対象地となった。

(40) 大石慎三郎氏は、享保期に導入された幕領の定免法を分析し、定免法の実施目的を定免法の利点を生かすだけでなく、恩恵的に年貢免率を引き上げていき、相応の取箇にするところにあつたとして、定免法の導入には年貢増徴の意図があつたことを主張した（同「享保改革における年貢増強政策について」（『享保改革の経済政策』御茶の水書房、一九六一年）。紀州藩の場合、増免の理由として郡奉行からの通達にあるように、凶作年の毛見費用を含めていたためとしている。

(41) 粉所区有文書「享保十七年粉所村子減米書付」。尾川村でもこの年六石六斗二升の年貢減免があつた（註(13) 前前掲書）。

(42) 註(13) 前前掲書。

(43) 同年の年貢割付状がないために、同年に近い割付状で確認する。「元文元年粉所村免定」では田方取米は三九石三斗六升八合であり、「享

保十一年粉所村免定」では田方取米は三九石五斗五升七合となつている。また「宝永二年免定」での田方取米も、三九石七斗四升二合であり、田方取米は四〇石弱としても問題ない。したがって、ここでは田方取米を四〇石として算出する。

(44) 曾根浦区有文書「正徳元年卯免定」。

(45) 粉所区有文書の年貢皆済目録で検討する。

(46) 粉所区有文書「寛文七年辰年粉所村御年貢米皆済状之事」。

(47) 『熊野市史』上巻では奥熊野代官所役人とあるだけで、その職制までは記されていないが、註(30)で割付状発給者が郡奉行であつたことから推測した。

(48) 年貢納入が遅延する事例は県内にあつた幕領村落で確認され、遅延事例が紀州藩に限られるものではない。伊奈氏支配の幕領であつた武蔵国秩父郡太田部村での児玉典久氏での事例（同「近世前期武蔵幕領における伊奈氏の徴租法と年貢収取」（『埼玉県立文書館紀要』第5号、一九九一年）や三河国山間部の年貢割付状・年貢皆済目録・年貢小請取といった年貢文書の史料学的な検討を試みた山本英二氏の研究にも見られる（同「幕藩前期三河国における年貢収取の史料学的考察」（『国文学研究資料館紀要アーカイブズ研究篇』第4号、二〇〇八年）。

(49) 粉所区有文書「寛文十二年書上申戌年迄御未進銀之事」。

(50) 註(24)によれば、当時粉所村には二三軒の家数があつた。約四半世紀の差があるが、家数は大きくは変化しないものと考え、この数値を参考にした。

(51) 粉所区有文書「延宝二年亥年粉所村御年貢米皆済状之事」、「延宝二年子年粉所村御年貢米皆済状之事」。ただし、寛文十二年までの未進銀の累積記録であり、何年間の蓄積なのか、その後どのようにして皆済したのかは不明である。

たもので、高一〇〇石につき一石三斗であった。

(24) 尾川区有文書「元禄十年入鹿組本新田畑御毛見指出帳ひかへ」。

(25) 紀州藩の徴租法については、廣本満氏が免定・免割・宝永新田畑検地・定免制について精力的な研究をしており、特に免定・定免制については、本稿でも取り上げており、多くの示唆を受けた(註(12) 廣本前掲書)。

(26) 尾川区有文書には、正保二(一六四五)年から慶応三(一八六七)年までの年貢割付状が、一部欠損年があるものの一五五通残されている。

(27) 尾川区有文書「正保二年尾川村西ノ年免定之事」。

(28) 同右「元禄十年尾川村免定之事」。この年から定免法が導入され、以降検見取法と定免法が実施されている。定免法採用以後は、年季切り替え年に年貢割付状が発給されていた。

(29) 粉所区有文書「寛文六年午免定」。なお、粉所村は尾川村の近村で、その文書は現在に熊野市教育委員会に保管されている。

(30) 延宝期の割付状の発給者である神前半九郎・川嶋助九郎は奥熊野郡奉行(八〇石クラス)であった(「和歌山分限帳 全(延宝五・六頃)」『和歌山県史 近世史料一』一九七七年)。

(31) 租率の算出は、村高に対する比率(村高率とする)、村高から引高(年貢控除高)を差し引いた残高である毛付高に対する比率(毛付高比率とする)、本途物成納入の収穫物を耕作する田地の石高(田方石高とする)に対する比率(田方高率とする)などが考えられるが、このうち毛付高率は耕作不能地に相当する土地の石高を控除しているため、遜色の可能性もあるが、村高率よりは実態に近いものと考え、この率の動向を分析する。

(32) 廣本満氏は、紀州藩の徴租法の研究の中で、定免制についてもふれ、

定免施行年については、和歌山県域、尾鷲、松坂地域村落の事例を検討して、元禄十年の近年で特定年に一斉に実施されたものではなく、紀州藩の徴租法は定免制が導入されたが、主体は毛見法であったとの結論を導いている(「紀州藩の徴租法」(註(12) 廣本前掲書)。また、『和歌山県史 近世』によれば、紀州藩での定免制の導入は元禄期で、元禄期中ごろより正徳期に盛んに奨励したとあり、最も早い事例は、元禄元(一六八八)年であった。ただ、この仕法は藩領すべての村に強制したものではなく、定免制を願い出た村にのみを実施したという。以上のように、定免法は施行年代は異なるが、一斉実施されていないことが共通している。

(33) 註(28)。

(34) 宛所の頭百姓の表記は、正保二年、三年に見られるが、正保四年には「尾川村庄や百姓中」となり、慶安元年には「尾川村庄屋惣百姓中」となる。

(35) 曾根浦区有文書「元禄十年免定」。牟婁郡にあった山村・長尾村でも定免法が元禄十年から導入されている(大家家文書「貞享二丑年元禄十五年午迄御免定写」。ただ、紀州藩の定免法採用を元禄十年としたが、地域や村落により一斉に導入されたものではないと考えられる(註(32))。これについては、廣本前掲書や近世中期から津藩や亀山藩で採用された請免法が村落により採用時期が異なることも参考となる。

(36) 曾根浦区有文書「元禄九年奉行衆出書付扣」。また、通達には「山中筋其外少高之村々者毛見入用多懸り候而定免いたし可然候」ともあり、毛見費用が多くかかることを理由に定免導入を藩が進めていることもわかる。

(37) 杖突とは、大庄屋のもとに置かれ、大庄屋事務や記録を担当し、

History』第10号三重歴史文化研究会、一九九九年）、同「近世前期における桑名藩農政と年貢」（『地方史研究』二八七号、二〇〇〇年）、同「近世中・後期の桑名藩年貢政策」（『地方史研究』第三一二号、二〇〇四年）、これら桑名藩年貢関係論考は、のち拙著『桑名藩家臣団と藩領社会』清文堂出版、二〇二一年に所収）に収載したので参照していただきたい。

(16) 筆者は以前に桑名藩領員弁郡小原一色村を事例に、個別村落の年貢諸役負担についての論考を発表した（拙稿「桑名藩領村落社会と年貢村請制」（『桑名藩家臣団と藩領社会』清文堂出版、二〇二一年））。

(17) 紀州藩領国支配や農政全般に関する先行研究は、和歌山県側で盛んである。平山行三『紀州藩農村法の研究』（吉川弘文館、一九七二年）、野村弘子「紀州藩の支配形態」（安藤精一編『近世和歌山の構造』（名著出版、一九七三年）、伊東多三郎「近世封建制度成立過程の一形態——紀州藩の場合——」（同『近世史の研究』四 吉川弘文館、一九八四年）、安藤精一先生記念論文集出版会編『和歌山地方史の研究』（宇治書店、一九八七年）、廣本満『紀州藩農政史の研究』（宇治書店、一九九二年）、上村雅洋『近世日本海運史の研究』（吉川弘文館、一九九四年）、笠原正夫『紀州藩の政治と社会』（清文堂出版、二〇〇二年）、同『近世熊野の民衆と地域社会』（清文堂出版、二〇一五年）、小山譽城『徳川御三家付家老の研究』（清文堂出版、二〇〇六年）、同『徳川将軍家と紀伊徳川家』（清文堂出版、二〇一一年）、藤本清二郎『城下町世界の生活史』（清文堂出版、二〇一四年）などがある。

(18) 藤本清二郎「紀州藩の正保三年『家中ならし』について」（『紀州経済史文化史研究所研究紀要』7号、一九八七年）。藩士知行地には、今高という擬制石高が採用され、知行地であったところが蔵入地となったとしても、今高はそのまま継続する。

(19) 註(13)の『尾鷲市史』上巻では奥熊野代官所設置を元和九（一六二二）年とし、郡奉行所と代官所が併存していたが、寛政十一（一七九九）年の改革で郡奉行所が廃止され、代官所が全体を統括するようになったという。一方で、『熊野市史』上巻では奥熊野代官所が設置されたのは徳川支配以前の慶長年代とし、代官所機構や代官所役人についてふれている。また『和歌山県史 近世』は、『尾鷲市史』を引用しているため、元和九年説を採用している。この設置時期については、後考を期したい。

(20) 伊東多三郎「近世封建制度成立過程の一形態——紀州藩の場合——」（同『近世史の研究』四 吉川弘文館、一九八四年）、小山譽城「紀州藩の地士制度」（安藤精一先生記念論文集出版会編『和歌山地方史の研究』宇治書店、一九八七年、のち『徳川将軍家と紀伊徳川家』清文堂出版、二〇一一年に再録）。浦組に関しては、笠原正夫『近世漁村の史的研究』（名著出版、一九九三年）がある。

(21) 平山行三『紀州藩農村法の研究』（吉川弘文館、一九七二年）。

(22) 尾川区有文書「元文三年奥熊野御蔵領大指出帳扣」。尾川区有文書は、熊野市尾川区に残された文書で、前千雄氏により整理され『尾川区古文書目録』（私家版、一九八二年）が刊行されている。また同氏はこの文書を用いて『百姓と年貢』（光出版、一九七六年）を発売している。

(23) 『和歌山県史 近世』によれば、指口は年貢米一〇〇石につき四石五斗の割合で課され、それは目減り分補填と代官所経費等にあてられた。二夫米は江戸参勤の人夫二人が慶安元（一六四八）年に米納となり高一〇〇石につき二石、糠藁代は馬飼料としての糠藁で高一〇〇石に一斗九升が課され、慶安元年に米納となった。そのほか一分三厘米（郷役米）は池・河川普請の人夫役が承応二（一六五三）年に米納となっ

などの定納されるものと、水車運上や質屋冥加など年により上納額が異なるものや臨時的なものがあつた。

- (2) 森杉夫『近世徴租法と農民生活』（柏書房、一九九三年）。
- (3) 渡邊忠司『近世社会と百姓成立』（佛教大学出版会、二〇〇七年）、同『近世徴租法成立史の研究』（清文堂出版、二〇二〇年）、同『近世徴租法と年貢収取』（清文堂出版、二〇二一年）。
- (4) 水本邦彦「近世土免制の研究」（『近世の村社会と国家』（東京大学出版会、一九八七年））。
- (5) 田中誠二『近世の検地と年貢』（塙書房、一九九六年）。
- (6) 松下志朗『幕藩制社会と石高制』（塙書房、一九八四年）。
- (7) 青野春水『免・免相・土免の成立と展開』（溪水社、二〇一七年）。
- (8) 佐藤孝之『近世前期の幕領支配と村落』（巖南堂書店、一九九三年）。
- (9) 本間勝喜『近世幕領年貢制度の研究』（文献出版、一九九三年）。
- (10) 本城正徳『近世幕府農政史の研究』（大阪大学出版会、二〇一二年）。
- (11) 鎌谷かおる・佐野雅規・中塚武「日本近世における年貢上納と気候変動―近世史研究における古気候データ活用の可能性をさぐる―」（『日本史研究』六四六、二〇一六年）。
- (12) 廣本満『紀州藩農政史の研究』（宇治書店、一九九二年）。『和歌山県史 通史』（一九九〇年）にも「年貢の徴収」の項目があり、紀州藩の年貢徴収の概要や定免制の導入について叙述されている。
- (13) 中田四朗・松村勝順・渡辺勲晏・野地新平「免札について」（三重大学教育学部歴史研究会『ふびと』29号、一九六八年）では尾鷲南浦の免札の分析を行い、宝永六年以後に五年、三年、二年の定免制が採用され、宝永四年の津波被害が大きかったため年貢減免を行ったと述べる。そのほか和田勉「近世漁村の貢租体系―紀州藩を中心として―」（三重大学学芸部歴史研究会『ふびと』19号、一九六二年）がある。自治

体史として、『尾鷲市史』上巻（一九六九年）があり、ここでは、尾鷲地域では宝永年間のころに定免制が採用されるまで、年貢収納法は検見取法であつたとし、宝永四年の津波被害の減免についてもふれている。また『熊野市史』上巻（一九八三年）では、尾川村や湯谷村の年貢動向を掲載しているが、徴租法については記載されていない。さらに、『和歌山県史 近世』（一九九〇年）では、紀州藩は近世初期から検見取法であつたが、元禄期に定免制を導入した。定免制の最も早い事例は元禄元年であつたとし、定免期間は三年から五年、十年であつた。前千雄『百姓と年貢』（光出版、一九七六年）は、本稿の分析対象である尾川村の近世期の年貢動向や災害分析、村の年中行事などの関係史料を丹念に分析した労作である。しかし、徴租法に関して、元禄十年まで毎年毛見により一年毎に定めたとあり、同九年までは検見取法であつたことがわかるが、十年以降については三年の平均で上納するとして定免法については詳しくは触れていない。

以上のように、牟婁郡地域の特に定免法の導入時期が詳細になつておらず、その方法についても後述するように修正の必要がある。

(14) 新宮領の年貢研究については、廣本氏の一連の精力的な研究がある。

(15) 註(13)でも若干指摘したが、紀州藩についての定免法導入にあたる記述が曖昧であることや、自治体史の性格上、和歌山県域・熊野・尾鷲地域を合わせる形での年貢研究がなされていない。この点も意識しながら分析を進めたい。なお、筆者は伊勢・志摩国の年貢徴租法や動向、制度などについて言及した。その成果は、拙稿「亀山藩の年貢に関する一考察」（『四日市市史研究』11号四日市市、一九九八年）、同「津藩の伊勢国における年貢政策について」（『ふびと』51号三重大学歴史研究会、一九九九年）、同「菰野藩の年貢徴租法の変遷について」（『Mie

高は、毛付高よりもさらに少なくなる。年貢納入が最優先であるため、それを差し引いた高が田地からの取り分となる。それを表したものが田方高率であり、平均で一・六・九%と、長井村市左衛門・同宇右衛門・宮田を除きすべてが一〇〇%以上となっている。

数値上からは田の収穫高すべてが年貢高となるが、それ以上に年貢が課せられていることになる。寛文五年にはまだ手元には田方高の一〇%ほど米が残る計算となっていたが、事態はさらに悪化した。その欠を補うために前述したような稗・芋・大豆・小豆などが百姓の主食となり、材木伐採などの僅かな稼ぎにより生計を立てていた可能性もある。⁽⁵⁹⁾翌二年の御用留には、「書上申草臥百姓之事」として、七家族二七人が「右之者共当月十頃分葛わらひばかり被下候而、米分も不被下候故、殊外只今ハ葛ニわらひニ掘りくたひれ、其作ニ取付兼可申と存候、此外村中共ニくすわらひ掘り罷有候」と米ではなく葛・蕨でのお救いでは足りず、葛・蕨掘りに草臥れたとの窮状を訴えている。同三年にはさらにその人数が増え飢人が一九軒、四六人にもなった。⁽⁶⁰⁾当時尾川村は四二軒、二一二人であったので、軒数の四五%、村人の二一・六%が該当する。これらの百姓には「書上之人数ニ壺合ツ、積先日数十日分ほとツ、米借し渡し可申候」とあり米の貸付けも行っている。ここで示した延宝二年の草臥百姓の田方高率は一五〇%以上の高率が三人、残りは平均以下となっている。高率の三人は所持高も一石台以下で、田方高・所持高が影響している可能性がある。

おわりに

紀州藩の藩領支配状況を確認の上、熊野地域の本藩領の村落を事例に年貢徴租法や動向を見てきたが、それをまとめると次のようになる。

紀州藩本藩領（南牟婁郡）の熊野地域では、近世初期から元禄九

（一六九六）年までは租率が高くそれによって年貢高も多かった。その間、検見取法という徴租法により毎年の年貢高の増減が見られ、変動幅も大きかった。元禄十年以降は、租率がやや低下することで年貢高が減少した。しかし、租率は安定傾向が見られる。それは、年貢徴租法の変更、すなわち定免法の導入によるものであった。定免法導入当初は三年季であったが、その後は三年、五年季も見られる。この定免法の採用により藩収入が以前よりは安定したものと思われる。

このような状況下の村落では、割付状に記された本途物成以外にも、指米・口米・二夫米・一分三厘米・糠藁代を年貢米に付加して徴収していたため、その負担が大きく、寛文期の粉所村では村落の半数が未進をせざるを得ない状況であった。尾川村でも年貢米の納入後に手元に残る米は僅かで、それを畑作物や葛・蕨でのお救いで補っていたと考えられる。

いずれにしても、百姓の生活がぎりぎりである以上、粉所村・尾川村の事例に見たように年貢納入にも影響し、遅延や未納が発生していた。この現象の最中に災害が追い打ちをかけ、状況はさらに悪化したものと思われる。それは尾川村の年貢動向に見るように年貢減少として現れる。結果的に、藩としては、救恤を行い、百姓の生活が成り立つ状況まで年貢減額をせざるを得なかったことと引き換えに、定免法導入による安定化を得たのではないかと考える。⁽⁶¹⁾

註

(1) 年貢・諸役の内、年貢は田畑から収穫される生産物や屋敷に賦課される本途物成（本年貢）と口米などの付加税で百姓負担の多くを占めた。諸役は小物成や高掛物・国役・夫役であり、藩により様々な名目で課されていた。小物成には山年貢・野年貢・草年貢・池役・網役

表5 延宝元年尾川村百姓所持高・免割表

名請人	所持高石	見捨高石	毛付高石	田方高石	畑方高石	小以(取米)石	持高高率%	見捨高率%	毛付高率%	田方高率%	備考
武兵衛	14.305	3.440	10.865	9.666	1.199	9.915	69.3	24.0	91.3	102.6	
作兵衛	12.5785	3.730	8.8485	6.6525	2.196	7.878	62.6	29.7	89.0	118.4	
権重郎	9.740	1.723	8.017	6.426	1.591	7.177	73.7	17.7	89.5	111.7	
六兵衛	9.0635	1.960	7.1035	6.3515	0.752	6.576	72.6	21.6	92.6	103.5	
六次郎	8.7095	1.680	7.0295	5.8435	1.186	6.326	72.6	19.3	90.0	108.3	
三之丞	8.696	2.420	6.276	4.874	1.402	5.684	65.4	27.8	90.6	116.6	組頭
伊兵衛	8.692	1.250	7.442	5.182	2.260	6.287	72.3	14.4	84.5	121.3	庄屋
次郎兵衛	8.655	1.690	6.965	5.3055	1.6595	6.189	71.5	19.5	88.9	116.7	
清右衛門	8.611	1.790	6.821	5.619	1.202	6.145	71.4	20.8	90.1	109.4	
源六	8.5175	1.810	6.7075	5.1625	1.545	5.996	70.4	21.3	89.4	116.1	
徳大夫	8.185	0.780	7.405	5.877	1.528	6.620	80.9	9.5	89.4	112.6	
徳助	8.171	1.990	6.181	4.966	1.215	5.591	68.4	24.4	90.5	112.6	
大左衛門	8.1495	1.650	6.4995	5.2535	1.246	5.829	71.5	20.2	89.7	111.0	
利平次	7.5605	1.590	5.9705	4.6245	1.346	5.316	70.3	21.0	89.0	115.0	
喜三郎	7.4375	1.400	6.0375	4.7175	1.320	5.346	71.9	18.8	88.5	113.3	
三左衛門	7.4245	1.260	6.1645	3.8425	2.322	5.212	70.2	17.0	84.5	135.6	
徳左衛門	7.3125	1.108	6.2045	5.0025	1.202	5.548	75.9	15.2	89.4	110.9	
加左衛門	7.3105	1.670	5.6405	3.9435	1.697	4.987	68.2	22.8	88.4	126.5	
太郎大夫	7.1505	1.780	5.3705	4.6085	0.762	4.903	68.6	24.9	91.3	106.4	
次五兵衛	7.1185	1.260	5.8585	5.1295	0.729	5.345	75.1	17.7	91.2	104.2	
忠兵衛	7.055	1.580	5.475	4.700	0.775	4.982	70.6	22.4	91.0	106.0	
善兵衛後	6.955	1.230	5.725	4.569	1.156	5.118	73.6	17.7	89.4	112.0	
重兵衛	6.9465	1.340	5.6065	4.9555	0.651	5.142	74.0	19.3	91.7	103.8	
小平次	6.782	1.770	5.012	3.460	1.552	4.431	65.3	26.1	88.4	128.1	
久五郎	6.3905	1.290	5.1005	4.2145	0.886	4.632	72.5	20.2	90.8	109.9	
左五兵衛	6.364	1.280	5.084	4.382	0.702	4.596	72.2	20.1	90.4	104.9	
弥次兵衛	6.2195	1.290	4.9295	3.7735	1.156	4.388	70.6	20.7	89.0	116.3	
重郎兵衛	5.712	0.920	4.792	3.710	1.082	4.218	73.8	16.1	88.0	113.7	
久蔵	5.611	1.016	4.595	4.047	0.548	4.220	75.2	18.1	91.8	104.3	
惣吉	5.525	1.030	4.495	3.755	0.740	4.067	73.6	18.6	90.5	108.3	
勝介	5.272	1.740	3.532	2.591	0.941	3.229	61.2	33.0	91.4	124.6	
惣左衛門	5.068	0.550	4.518	3.368	1.150	3.974	78.4	10.9	88.0	118.0	
忠左衛門	4.653	1.915	2.738	2.294	0.444	2.573	55.3	41.2	94.0	112.2	
武右衛門	4.559	0.770	3.789	3.195	0.594	3.431	75.3	16.9	90.6	107.4	組頭
助重郎	4.5125	1.110	3.4025	2.1035	1.299	2.963	65.7	24.6	87.1	140.9	
作右衛門	4.333	1.110	3.223	2.673	0.550	2.889	66.7	25.6	89.6	108.1	
惣大夫	3.618	0.370	3.248	2.824	0.424	2.955	81.7	10.2	91.0	104.6	
新三郎	3.3435	1.070	2.2735	2.0675	0.206	2.118	63.3	32.0	93.2	102.4	*
とうもと	2.9395	0.140	2.7995	1.5275	1.272	2.367	80.5	4.8	84.6	155.0	
権吉	2.554	0.530	2.024	1.469	0.555	1.802	70.6	20.8	89.0	122.7	
林右衛門	2.015	0.170	1.845	1.439	0.406	1.648	81.8	8.4	89.3	114.5	
三平	1.845	0.850	0.995	0.564	0.431	0.894	48.5	46.1	89.8	158.5	
作次郎	1.464	0.120	1.344	0.720	0.624	1.120	76.5	8.2	83.3	155.6	
久七	0.846	0.090	0.756	0.364	0.392	0.641	75.8	10.6	84.8	176.1	
まつもと	0.485	0.050	0.435	0.190	0.245	0.315	64.9	10.3	72.4	165.8	* 宮田分
村中	0.470	0	0.470	0.470	0	0.414	88.1	0.0	88.1	88.1	
長井 市左衛門	0.465	0.120	0.345	0.345	0	0.323	69.5	25.8	93.6	93.6	
長井 宇右衛門	0.445	0	0.445	0.445	0	0.414	93.0	0.0	93.0	93.0	
清九郎	0.294	0	0.294	0.294	0	0.319	108.5	0.0	108.5	108.5	屋敷分

尾川区有文書「延宝元年丑ノ歳郷免割帳」による。
*は算違い。

所持高率で六二・四％、毛付高率で七二・八％、田方高率で九〇・五％であった。田方高率が平均で九〇％を超え、松本・加左衛門・庄助・久米之助・林右衛門・三十郎・清九郎の七人は一〇〇％以上となっていることから決して油断できない状況であったことが推測される。

延宝元年の尾川村百姓の年貢等負担平均は、所持高率で七二・四％、毛付高率で八九・六％であり、所持高率は一〇〇％超・五〇％以下が三人いるが、多くは九〇％から六〇％でややばらつきが見られる。毛付高率は所持高率よりも増減幅が小さく、九四から八三％、特に九〇％に集中している。所持高率・毛付高率とも寛文五年と比較すると、所持高率で一〇％、毛付高率で四％ほど増加している。つまり、年貢増徴となったのである。また、これらの算出は、基本的に毛付高に一定の比率を乗じているようである。今日のようない累進課税とはなっていない。したがって、その納入高（小以高）は、最大の所持者武兵衛の一〇石弱を筆頭に、まつもとの三斗一升五合まで区々ではあるが、所持高順にほぼ比例する形での納入形式となる。

しかし、実際に各百姓には耕作不能地と考えられる見捨高が記されており、それを差し引いた毛付高や毛付高率で見ると、さらに負担割合は高くなる。そして、年貢米収獲地となる田方

第五章 村落内での年貢割付

この章では、前章で検討した年貢納入にあたり、なぜ未進米が出るのかを村落内の年貢割付状況を確認することで、年貢納入の村へ影響などを検証する。

尾川村に残る寛文五（一六六五）年の「巳年免ならし帳」延宝元（一六七三）年の「丑ノ歳郷免割帳」⁽³⁷⁾には、村落内の年貢割付状況が記されている。村方での年貢負担は、割付状以外に指米・口米・二夫米・糠藁代・引米・一分三厘米などの付加米が一定の割合で課された。本途物成と付加米の総計を村人に割り付けるのである。

寛文五年と延宝元年の尾川村百姓の所持高を所持高順に並び替えをしたものが表4、表5である。これによれば、寛文五年は一〇石以上が二人、その内の一人、喜三郎が一四石余を所持する最大の百姓である。以下、九石台四人、八石台二人、七石台八人、六石台七人、五石台六人、四石台七人、三石台四人、二石台二人、一石台一人、一石未満四人の四七人の百姓が書き上げられている。七石から四石が中心階層である。延宝元年は、一〇石以上が二人、その内の一人、武兵衛が一四石余を所持する最大の百姓である。以下、九石台二人、八石台九人、七石台八人、六石台六人、五石台五人、四石台四人、三石台二人、二石台三人、一石台二人、一石未満六人の四九人の百姓が書き上げられている。八、七石台が中心階層で、寛文期に比べて石高減少によるばらつきが見られる。

この所持高に課された寛文五年の年貢等負担平均は、

表4 寛文5年尾川村百姓持高・免割表

名請人	所持高 石	見捨高 石	毛付高 石	田方高 石	畑方高 石	小以(取米) 石	所持高率 %	見捨高率 %	毛付高率 %	田方高率 %	備考
喜三郎	14.4875	1.830	12.6575	10.0985	2.559	9.093	62.8	12.6	71.8	90.0	
忠三郎	12.8885	2.650	10.2385	9.3825	0.856	7.724	59.9	20.6	75.4	82.3	
二郎兵へ	9.783	1.170	8.613	6.9535	1.6595	6.261	64.0	12.0	72.7	90.0	
六治	9.7395	1.240	8.4995	7.3185	1.181	6.277	64.4	12.7	73.9	85.8	*
伊兵へ	9.722	1.460	8.262	6.452	1.810	5.754	59.2	15.0	69.6	89.2	
三十郎	9.160	0.380	8.780	6.096	2.684	6.100	66.6	4.1	69.5	100.1	
作兵へ	8.7515	0.800	7.9515	6.3665	1.585	5.750	65.7	9.1	72.3	90.3	
六兵へ	8.6065	1.210	7.3965	6.2935	1.103	5.518	64.1	14.1	74.6	87.7	
久蔵	7.986	1.330	6.656	5.685	0.971	4.919	61.6	16.7	73.9	86.5	
利平次	7.826	0.980	6.846	5.500	1.346	4.956	63.3	12.5	72.4	90.1	
太左衛門	7.7425	1.190	6.5525	5.7055	0.847	4.869	62.9	15.4	74.3	85.3	*
清右衛門	7.700	0.960	6.740	5.538	1.202	4.922	63.9	12.5	73.0	88.9	
徳助	7.559	1.240	6.319	5.136	1.183	4.651	61.5	16.4	73.6	90.6	
弥之助	7.165	0.843	6.322	4.965	1.357	4.591	64.1	11.8	72.6	92.5	
ほり太夫	7.1505	1.210	5.9405	5.1785	0.762	4.426	61.9	16.9	74.5	85.5	
徳左衛門	7.094	1.170	5.924	4.620	1.304	4.271	60.2	16.5	72.1	92.4	
源六	6.921	0.460	6.461	4.976	1.485	4.623	66.8	6.6	71.6	92.9	
小平次	6.852	0.880	5.972	4.420	1.552	4.272	62.3	12.8	71.5	96.7	
助十郎	6.6265	1.200	5.4265	4.0235	1.403	3.900	58.9	18.1	71.9	96.9	
清大夫	6.543	0.630	5.913	4.511	1.402	4.239	64.8	9.6	71.7	94.0	*
忠兵へ	6.4785	0.850	5.6285	4.8535	0.775	4.167	64.3	13.1	74.0	85.9	
弥次兵へ	6.220	1.030	5.190	4.034	1.156	3.760	60.5	16.6	72.4	93.2	
加左衛門	6.033	0.670	5.363	3.751	1.612	3.823	63.4	11.1	71.3	101.9	
惣大夫	5.898	0.510	5.388	4.964	0.424	4.049	68.7	8.6	75.1	81.6	
十兵へ	5.8365	0.740	5.0965	4.5805	0.516	3.840	65.8	12.7	75.3	83.8	*
善左衛門	5.830	0.990	4.840	3.481	1.359	3.380	58.0	17.0	69.8	97.1	
次五兵へ	5.711	1.060	4.651	3.922	0.729	3.457	60.5	18.6	74.3	88.1	
忠左衛門	5.283	0.700	4.583	4.009	0.574	3.416	64.7	13.3	74.5	85.2	
久五郎	5.1245	0.940	4.1845	3.298	0.8865	3.030	59.1	18.3	72.4	91.9	
善兵へ	4.9545	0.660	4.2945	3.2785	1.016	3.092	62.4	13.3	72.0	94.3	
久米之助	4.8425	0.770	4.0725	2.8115	1.261	2.840	58.6	15.9	69.7	101.0	
口地	4.706	0.680	4.026	3.025	1.001	2.949	62.7	14.4	73.2	97.5	
久七	4.505	0.880	3.625	3.051	0.574	2.689	59.7	19.5	74.2	88.1	
惣左衛門	4.498	0.460	4.038	2.888	1.150	2.830	62.9	10.2	70.1	98.0	
新三郎	4.280	0.530	3.750	3.586	0.164	2.883	67.4	12.4	76.9	80.4	
惣吉	4.193	0.700	3.493	2.660	0.833	2.530	60.3	16.7	72.4	95.1	*
庄助	3.960	0.898	3.062	2.146	0.916	2.168	54.7	22.7	70.8	101.0	
市助	3.931	0.650	3.281	2.693	0.588	2.379	60.5	16.5	72.5	88.3	
捨吉	3.4125	1.020	2.3925	1.902	0.4905	1.781	52.2	29.9	74.4	93.6	
作之丞	3.398	0.460	2.938	2.314	0.624	2.112	62.2	13.5	71.9	91.3	
三平	2.488	0.863	1.625	1.194	0.431	1.189	47.8	34.7	73.2	99.6	
久一郎	2.257	0.280	1.977	1.509	0.468	1.456	64.5	12.4	73.6	96.5	
林右衛門	1.6645	0.190	1.4745	1.0695	0.405	1.071	64.3	11.4	72.6	100.1	
九平太	0.939	0.140	0.799	0.680	0.119	0.628	66.9	14.9	78.6	92.4	*
松本	0.448	0.100	0.348	0.100	0.248	0.210	46.9	22.3	60.3	210.0	畑勝ち
清九郎	0.194	0	0.194	0.194	0	0.194	100.0	0.0	100.0	100.0	
惣吉うば	0.120	0	0.120	0.120	0	0.093	77.5	0.0	77.5	77.5	

尾川区有文書「寛文五年巳年免ならし帳」による。
*は算違い。

一銀七拾壹匁六分五厘

長太夫分

一銀三拾貳匁九分五厘

作藏

一銀六十三匁

角左衛門

右之通戌年迄御未進銀如此、少しも相違無御座候、以上

粉所庄や

寛文拾貳年

角左衛門

子ノ正月廿二日

肝煎

三郎右衛門

岡益右衛門殿

寛文十二年時点までの粉所村未進銀の状況を書き上げた文書である。

この当時、粉所村では一貫九八二匁四分の未進銀を抱えていた。その内訳を見ると村内の半分近くが未進銀を抱え、最多は兵三郎の六八八匁一厘で、庄屋・肝煎も未進していた。また「長太夫分」とある七一匁六分五厘は、長太夫株を残す形で村弁済したものであろうか。いずれにしても、この額は前述した寛文七年の皆済状で納入した辰年の銀三貫三六四匁三分二厘の五八・九%に相当し、村としてこの年貢銀の解消が喫緊の課題であったと考えられる。その後、この未進銀が解消されたのかは不詳であるが、延宝二（一六七四）年六月には、亥年（寛文十一年）、子年（寛文十二年）分の皆済状が二通発給されていることから、上納が完了したものと思われる。⁵¹⁾

尾川村の年貢納入状況は皆済状がないために、不詳部分はあるが、村に残された御用留⁵²⁾に延宝元（一六七三）年の年貢納入に関連した次のような記載があるので、そこから検討してみよう。

〔史料七〕

丑年納り米払方指引之事

一米百七拾貳石

尾川村

内

百三拾九石六斗 御差紙五枚ニて払

拾四石 杉七右衛門殿御書出し

差引残り拾八石四斗 御蔵有

右通此も相違無御座候、以上

亥正月十六日

尾川庄や

伊兵衛

佐武左助殿

これによれば、延宝元年分の年貢上納分は米換算で一七二石であった。しかし、当年の割付状⁵³⁾での年貢は一八一石二斗五升九合であるので、九石余が未進となっていた。それはおそらく粉所村のように後年に上納したであろうと思われる。

また、上納方法は

〔史料八〕⁵⁴⁾

一九貫四百三拾八匁九分壹厘

尾河

内六貫五百七拾壹匁四分六厘 丑年

貳貫八百六拾七匁四分七厘 寅年

定畑夫利米代

此内へ米拾六石壹斗九升七合 納

と、粉所村同様多くは銀納であった。「史料七」に相当する分なのか不詳なところがあるが、二年間にわたっていることから、寅年（延宝二年）に収穫した米を丑年分にあてたため、延宝二年分が未納になった可能性もある。⁵⁵⁾

本米四石貳斗

一米八斗八升

利米

納合五拾七石七斗七升五合

右払方

米貳斗壹升貳合

庄や給

米方三拾九石七斗三升貳合

売付銀納

此銀貳貫五百三匁壹分貳厘

石六拾三文かへ

畑米拾四石七斗三升七合

銀納

此銀七百七匁三分八厘

石四拾八匁かへ

夫米貳石貳斗壹升四合

銀納

此銀百拾匁七分

石五拾匁かへ

利米八斗八升

銀納

此銀四拾三匁壹分貳厘

石四拾九匁かへ

銀小以三貫三百六拾四匁三分貳厘

払合五拾七石七斗七升五合

外口米壹石六升三合 納ル内貳斗八升八合 畑口米

銀拾九匁貳分 隣郷へ売付米直段増出目銀納ル

右者辰ノ御年貢米度々納ル、小手形を以勘定相極皆済、仍如件

角岡仁左衛門代

寛文七年未極月

岡増右衛門印

粉所村庄や百姓中

(裏書)

「表書之通皆済也

角岡仁左衛門印

ここで取り上げた粉所村の皆済状は、寛文七年の発給であるが、その内容は三年前の辰年（寛文四年）の年貢皆済に関するものである。粉所

村の年貢高として五三石一斗四升三合が課せられた。それ以外にも付加税として指米・糠藁代・夫米・利米が付加されている。実際の納入にあたっては山間部の村落ゆえに庄屋給を除き、銀納であった。その銀納値段は田方・畑方・夫米・利米毎に異なり、銀納計は三貫三六四匁三分二厘である。これに畑口米・隣郷売付米増出目が課せられた。

これらの年貢は数回に分けられて納入され、その決済は小手形により勘定された。発給者は角岡仁左衛門の代理で岡増右衛門、裏書に見届けた旨の角岡仁左衛門の書判が見られる。この角岡は割付状の発給者で郡奉行であったと考えられる。⁽⁴⁷⁾

この皆済状の発給は寛文七年であるが、その中身は寛文四年のものであり、年貢皆済が三年遅延したことになる。このような事例は幕領でも見られるが、それはどのような理由であったのか。こうした年貢納入の実態を知る手がかりとなる寛文十二年の未進銀に関する書付を取り上げてみよう。⁽⁴⁸⁾

〔史料六〕

書上申戌年迄御未進銀之事

一 銀壹貫九百八拾貳匁四分

粉所村

内

一 銀拾八匁三分八厘

伝四郎

一 銀九拾六匁八分壹り

伝作

一 銀百貳拾九匁五分三厘

弥ノ助

一 銀貳百三拾六匁六厘

羽左衛門

一 銀貳拾六匁五分三厘

三郎右衛門

一 銀貳百三十四匁七分四厘

長左衛門

一 銀三百八拾四匁八分四厘

三七

一 銀六百八拾八匁壹り

兵三郎

この数値にいくらかの増免を加えて、三年間の租率とした。尾川村の場合の増免は、割付状を見る限り、田方が一%（茶がある）、畑方が二%となっている。このように、紀州藩の場合は、定免導入にあたり、それ以前の十年平均の租率に増免⁽⁴⁰⁾を加えて新たな租率としたのである。

3 年貢の減免

定免期間中でも、災害年や不作年には年貢減免が行われた。粉所村の減免に関する史料⁽⁴¹⁾を提示する。

〔史料四〕

子減米

粉所村

一米四石式斗九升壹合

本田

右者当子年田作虫付皆無傷有之二付、定免之内二候へ共、格別之御用捨を以、免合御引被下候、減⁽⁴²⁾□毛付免ヲ以指引如此二候、右之外畑方永定免ハ例之通皆納可仕者也

浅井吉兵衛⁽⁴³⁾

享保十七年子霜月

古屋十郎大夫⁽⁴⁴⁾

庄屋肝煎小百姓中

享保十七（一七三二）年は、いわゆる享保の飢饉と呼ばれる飢饉が起こり、この地域にも飢饉が発生した。減免の書付にも「田作虫付皆無傷有之」と害虫（蝗）が発生し、それによって稲作が被害を受けたと考えられる⁽⁴²⁾。粉所村では定免期間中ではあったが、格別の用捨として四石二斗九升一合が減免された。この時期の田方への賦課は四〇石ほどであった⁽⁴³⁾ので、約一〇%減免されたことになる。

また、曾根浦では元禄十年以降定免法が採用されたことや宝永四年の

地震による高浪で荒場ができ、それに対しての御救があったことは述べたが、さらに定免期間中の正徳元（一七一）年には、高浪荒場の御救のほか、「当卯八月廿三日大風雨損毛二付、御救を以定免之内当卯年分御引被下」と、本田一つ三分七厘、新田一つ八分九厘四毛の引がなされた。このことによって、本田の租率は本田高の一つ（一〇%）、新田租率も高の一つとなった。

このように、定免実施期間中に、毛見によらず年貢減免を行っていたのである。

第四章 年貢納入状況

この章では、粉所村を事例にして、年貢米の納入状況について検討する⁽⁴⁵⁾。粉所村には、寛文期以降の年貢皆済状（以下、皆済状とする）が残されている。寛文四（一六六四）年分の納入状況がわかる皆済状⁽⁴⁶⁾を取り上げる。

〔史料五〕

辰年粉所村御年貢米皆済状之事

辰四ツ八分

一高百拾石七斗壹升五合

本田畑

此取米五拾三石壹斗四升三合

内拾四石三斗七升八合

畑米

米壹石三斗式升八合

指米

内三斗五升九合

畑米

御役高百四拾石七斗壹升五合

一米式斗壹升

糠藁代

右同断

一米式石式斗壹升四合

夫米

表2 尾川村田畑構成表（元禄10年）

耕地	地目	石高（石）	面積（町反畝歩）	押合反（石）	備考	
村高（本田畑）	本田畑計	317.998	24.7.9.12	1.2827	120斤	
	田方	279.943	20.6.1.06	1.3585		
	古荒	34.052	2.7.1.00			
	毛付	田方毛付	245.885	17.9.0.06		1.3737
		前窪坪	46.103	3.2.3.09		1.4260
		松場坪	92.582	5.8.9.21		1.570
		家ノ向坪	39.095	2.8.9.03		1.3523
		小屋本方	28.390	2.9.5.04		0.962
		西瀬坪	11.897	1.2.5.07		0.9502
		舟床坪	7.026	8.7.15		0.800
		谷ノ向坪	11.192	7.9.27		
		やしき	9.600			
	茶					
	畑方	38.055	4.1.8.06	0.910		
	古荒	4.973	8.0.06			
	毛付	畑方毛付	33.082	3.3.8.00		0.9797
		松場坪	15.813	1.3.7.25		1.1296
		ひえ	3.864	3.5.00		
		芋大小豆	11.949	1.2.0.25		
		小屋本坪（芋大小豆）	0.128	0.3.06		0.400
舟床坪		17.141	1.9.6.29	0.8701		
ひえ		7.373	8.2.00			
芋大小豆		9.768	1.1.4.29			
新田畑	新田畑計	5.544	7.9.27	0.693		
	田方	田方毛付	4.696	5.8.21	0.800	
		定耆つ五分	0.536	0.6.01		
		定式つ	2.336	2.9.06		
		割免	1.824	2.2.24	0.800	
		畑方毛付	0.848	2.1.06	0.400	

尾川区有文書「元禄十年入鹿組本新田畑御毛見指出帳ひかへ」による。

見であるため、費用が多くかかる。その費用は村落負担であるために、毛見願が出しにくくなっていったのではないかと考えられる。つまり、藩は定免法導入を強く推進したのである。さらに、毛見の場合は取米を定めた上で、それをもとに租率が決まったこともわかる。

そして、通達にあった平均免を算出するために、元禄十年六月には、各村落の耕地面積や十年間の租率を書き上げた「本新田畑御毛見指出帳」を藩へ提出させた。尾川村・粉所村に関しては、第一章で村概要を分析したが、さらに尾川村田畑の詳細を検証しよう（表2）。

尾川村は毛見の結果、本田畑三一七石九斗九升八合、面積二四町七反九畝一二歩、新田畑は五石五斗四升四合、七反九畝二七歩とされた。内訳を明記しているが、本田田方は古荒を除くと、耕作地として前窪・松場・家ノ向・小屋本から西瀬・舟床・谷ノ向に見られ、そのほか屋敷・茶に分類されている。一方、古荒を除く本田畑方の耕地は、松場・小屋本・舟床であり、そのほかにひえ・芋・大小豆とある。ここからは、畑地に百姓の常用の食料となった稗・芋・大豆・小豆などが植え付けられていたことがわかる。新田は割免と記された田地（石高一石八斗二升四合）が定免の対象地となり、そのほかに以前から起こされてきている耕地二種類が見られる。³⁹⁾ しかも、それぞれの耕地の一反あたりの石盛も記され、松場が一石五斗七升と最も多い。

元禄十年には、貞享四（一六八七）から元禄九年までの十年間の本田・新田の田畑の租率を調査し書き上げている（表3）。これによれば、本田の田畑免は四〇%、田方免六一・九%、畑方免三六・一%、新田の田畑免は二七%、田方免三七・二%、畑方免二四・四%である。この数値が定免法導入の基本数値となったのである。実際には、

表3 尾川村本田新田十年租率表

和暦	西暦	本田			新田		
		田畑免	田方免	畑方免	田畑免	田方免	畑方免
貞享4卯	1687	38.00	70.00	27.69	22.00	30.00	22.40
貞享5辰	1688	43.00	68.28	44.00	27.00	36.00	25.70
元禄2巳	1689	39.00	58.92	38.00	26.00	35.00	24.06
元禄3午	1690	40.00	61.00	41.26	27.00	33.00	32.20
元禄4未	1691	36.00	61.18	37.00	26.00	32.24	30.00
元禄5申	1692	39.00	55.29	37.00	27.00	34.04	30.00
元禄6酉	1693	36.00	61.25	34.00	23.00	31.57	10.00
元禄7戌	1694	41.00	59.64	34.00	28.00	35.02	30.00
元禄8亥	1695	41.00	66.12	34.00	28.00	35.02	20.00
元禄9子	1696	47.00	57.35	34.00	36.00	70.11	20.00
十年平均		40.00	61.90	36.10	27.00	37.20	24.44

単位は%、尾川区有文書「元禄十年入鹿組本新田畑御毛見指出帳ひかへ」による。

糸内 内五糸 茶荒起丑増免」とあり、この年から三年定免が四つ一分五糸（租率四一・〇〇五％）内で始まった。内〇・〇〇五％が茶起として増徴された。新田畑もこの年から三年定免となった。定免採用期間中は割付状が発給されず、尾川村の場合も、次の割付状の発給は元禄十二年十月であった。

正保二（一六四五）年との比較では、徴租法が検見取法から定免法へと変化し、この間には新田が起こされ、租率は低いものの課税対象地となつてゐること、田方古荒が一〇石余から三四石余へと増加したこと、畑方にも古荒が見られることが確認できる。そして、宛所が庄屋・頭百姓からそれらを含めた百姓中となつてゐる。そのことは、庄屋・頭百姓の身分的な地位が相対化され低下したことにつながる。⁽³⁴⁾

この定免法は、導入当初は三年の年季であつたが、五年の年季もあり、凶作の年は破免検見による徴収も行われてはいるが、定免法導入以後は概ね年貢高・租率は安定する傾向にある。

南牟婁郡の定免法導入は尾川村だけでなく、ほぼ全域で採用されたようである。それは海岸線村落であつた同郡曾根浦に残る割付状からも確認される。⁽³⁵⁾ 曾根浦では元禄十年から十二年の三年定免が実施され、元禄十三年からは五年の年季となつた。宝永四（一七〇七）年十月の大地震では各村で荒場ができたことで「御救引」が行われたが、海岸村落では「高浪荒場」と表記されており、津波による被害であつたことがわかる。

2 定免法導入準備

定免法導入にあつては、元禄九年二月か三月に郡奉行から次のような通達があつた。⁽³⁶⁾

〔史料四〕

一山中方定免所之儀、毛見入用之夫役其外費ハ無之候へ共、皆無程

之凶年在之時ハ、御年貢不残迷ひ百姓つのがたく之由、定免願度存候所ニも凶年難凌ニ付、毛見請様ニ相聞候、自今凶年にハ毛見之致立毛、相応之免ニ可被申付候、其替り毛見之時雜用人足上下免割等之入用を積り、免ニ直シ、其時免之位見合、十年或ハ五年平シ免之上江加へ為請可被申候、此積方并被申聞様品々可在之儀候、尤定免ハ五年切、三年切ニ可被相究候、

一凶年之時免々之極様、例之惣毛見ニ願申所ハ、先達而手代・大庄屋・杖突被指遣、皆無之分有体ニ相改、欠落を極残、有毛分坪々野末山端迄委細之致見分、坪割見分積之坪初を以積り立、畑方・屋敷・小物成高ハ前々之割免ニ取、惣取米を極、其年之免ニ相極候、見取ニ願申所ハ、一通見分被致候上ニ而、手代・大庄屋・杖突其外見取に出シ候者を指遣、別紙案紙之趣委積り立、取米ニ而其年之免ニ可被相極候、

これによると、一条目で山村の定免場所の毛見にかかる費用等はいらないが、凶作年の場合の対応に混乱しているようである。定免を願いたい村も、凶作の場合定免では凌ぐことができないため毛見を請けたいようである。このような混乱を避けるために、凶作年は毛見をした上で相応の租率を申し付ける。その代わり毛見にかかる費用は村での入用となり、十年か五年の平シ免にそれを加えて定免を請けさせる。定免の年季は五年か三年切にする。二条目では、凶作年の租率決定にあたり、手代・大庄屋・杖突⁽³⁷⁾の手により村落の隅々まで惣毛見（坪刈）を行い、畑方は前々の通りとし、見取を願う場合は別紙の案紙に従つて取米を定め、それによつて租率を決めるとある。

ここからは、定免法導入にあつて凶作年の毛見の実施、定免の租率は十年か五年の平均を勘案し、毛見の費用を含めるために上昇すること、年季は五年、三年とすることがわかる。また、凶作年の毛見は惣毛

第三章 定免法の採用

1 定免法の導入

前章で触れたが、尾川村では元禄十年に定免法が導入される⁽³²⁾。それを確認するため、その年の割付状を提示する⁽³³⁾。

〔史料三〕

免定

丑卯迄三年定四つ壺分五糸内

内五糸 茶荒起丑増免

一高三百拾七石九斗九升八合

尾川村

内壺斗 茶荒起 丑卯定壺つ五分

此取百三拾石三斗九升四合

内

三拾四石五升八合 田方古荒

外壺斗 丑卯茶ノ起

四石九斗七升三合 畑方古荒

式百四拾五石八斗八升五合

田方

取百貳拾壺石四斗六升貳合

内

式百三拾六石貳斗八升五合

内六斗壺升壺合 丑卯畑田ニ成

取百拾八石七斗八升七合

五つ式り七もよ

九石五斗

茶

取式石六斗六升

式つ八分

壺斗

茶ノ起

取壺升五合

丑卯定壺つ五分

三拾三石八升貳合

畑方

外六斗壺升壺合 丑卯田へ入 式つ七歩

取八三石九斗三升貳合

丑卯迄三年定式つ九分

一高五石五斗四升四合

同所新田

此取米壺石六斗八合

内

四石六斗九升六合

田方

取壺石四斗八升九合

内

式石三斗三升六合

定式つ取

取四斗六升七合

壺石八斗貳升四合

五つ壺分六り四毛

取九斗四升貳合

五斗三升六合

定壺つ五分

取八升

八斗四升八合

畑方

取壺斗壺升九合

右定之通無高下致割府、霜月中ニ急度皆済可仕者也

元禄十年丑九月

北村伊太夫⁽³⁴⁾

佐山安左衛門⁽³⁵⁾

中村平八⁽³⁶⁾

尾川村百姓中

この割付状によると、村高の右肩部分に「丑卯迄三年定四つ壺分五

少の高下があるが、概ね四五～四八%の間で推移し安定傾向にある。この安定傾向はやはり定免法導入による定率が影響している。

また、年貢高は概ね①正保二年から元禄九年、②元禄十年から宝暦六(一七五六)年、③宝暦七年から慶応三(一八六七)年の三期に分けることができる。①は検見取法という徴租法が採用されていたことで、明暦元年のように災害時には減免をし、そのために年貢高が落ち込む。しかも毎年増減が見られる。この時期が近世期を通じて年貢高の最大期であったが、この年貢高傾向が大きく変化するのは、貞享三年である。それ以前の年貢高は一五〇石前後で推移していたが、貞享三年は一挙に一二〇石台まで落ち込んでいる。その後も元禄九年のように一五〇石弱まで回復した年もあるが、一三〇石前後で推移する。

②の時期には、前述したように元禄十年に定免法が導入され、これ以降一二〇石から一三〇石の間の年貢高で比較的安定する時期を迎える。しかし、この時期の内、享保十四(一七二九)年までの前半期が一三〇石台で推移していたものが、それ以降の後半期は一二〇石台へとやや減少しつつも、少しずつの増徴傾向が見られる。

そして、③の宝暦七年以降は、定免法の特質の長所を活かした形で収斂され安定傾向となり、一三〇石前後の年貢高が幕末期まで続くこととなった。

以上のように、牟婁郡本藩領の年貢動向は、徴租法が検見取法から元禄十年に定免法が導入されたことにより、その影響を受けた形となる。すなわち、元禄十年以前は年貢高の最高の時期であったが、毎年の年貢高が増減し不安定な状況にあった。定免法導入以降は、年貢高がそれ以前より二〇石ほど減少して一三〇石前後で推移する。年貢高の増減はほぼなく、幕末期まで安定した納入が行われた。

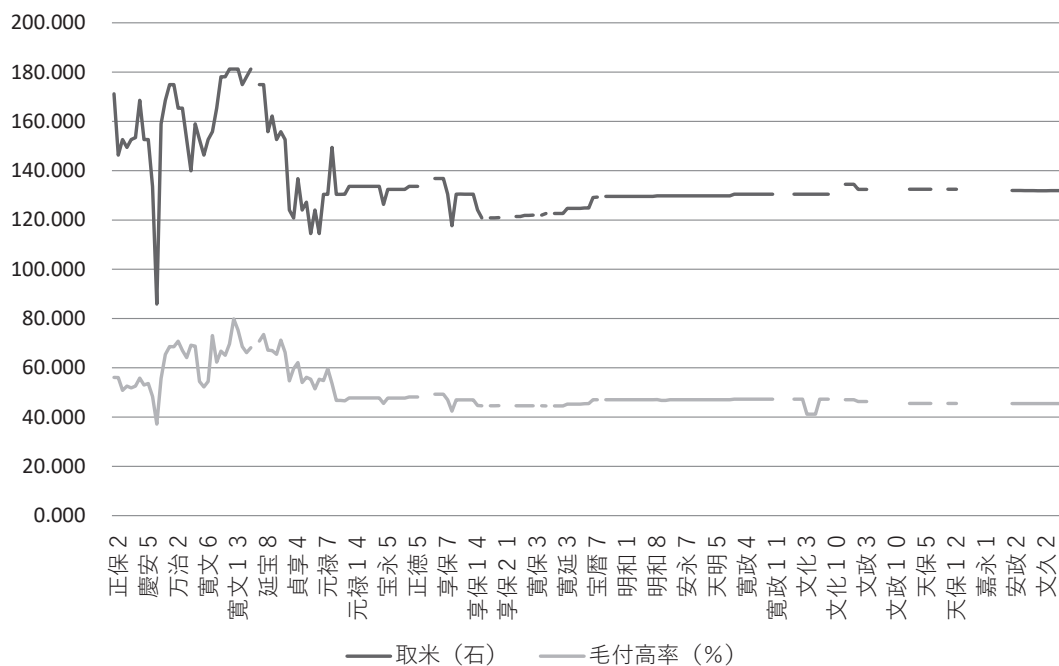


図1 尾川村年貢動向

取百四拾八石五斗五升六合 五ツ七分
四拾四石四斗九升四合 畑方

取貳拾三石壹斗六升三合 五ツ貳分余

右者当立毛善悪を見合申付候、下ならし少も高下無之様ニ庄屋頭百
姓立合致割符、来ル霜月中ニ急度皆済可仕者也

正保貳年酉ノ

今泉平兵衛[㊟]

十月

藤田六右衛門[㊟]

浦上与三右衛門[㊟]

尾河村庄屋

頭百姓中

この割付状によれば、尾川村の村高三一七石九斗九升八合に対し、五
ツ四分^二五四%の租率で年貢が賦課されている。実際には、村高より田
畑方の古荒高、及び田方酉の見捨高を免除した石高に、田方・畑方別々
の割合で年貢が課せられた。この時期は「立毛善悪を見合」と検見を実
施した上での年貢徴収であった。その後、年貢徴収の転機は元禄十年に
訪れる²⁸。同年以降定免法が導入されたのであるが、それについては、次
章で検討する。

次に隣村粉所村の寛文六（一六六六）年の割付状を提示する。²⁹

〔史料二〕

午免定

午四ツ取

一高百拾石七斗壹升五合

粉所村

此取米四拾四石貳斗八升六合

拾四石貳斗六升六合

田方荒

内三石六斗七升三合

畑方荒

四石貳斗六升

田方午見捨

六拾七石三斗七升貳合

田方

取三拾五石四斗六合

五ツ貳分五り五も少よ

貳拾壹石壹斗四升四合

畑方

取八石斗八升

四ツ貳分

右之通相定候間、庄屋小百姓并本作出作共立合無高下ならし、来ル
霜月廿日以前急度皆済可仕者也

寛文六年午十月

神前半九郎[㊟]

今泉平兵衛[㊟]

佐野孫兵衛[㊟]

角岡仁左衛門[㊟]

粉所村庄や百姓中

この割付状の様式は、前述した尾川村の割付状のものと村高・租率等
などは異なるが、同様のものである。発給者は奥熊野郡奉行（のち代官）
であった。³⁰

2 年貢動向

尾川村の残された割付状をもとに年貢動向（租率・年貢高）を提示す
る（図1）。なお、租率は、村高から古荒高などの損免率を差し引いた
租率（毛付高率）を取り上げる。³¹

まず、租率を見るが、正保二年から明暦二（一六五六）年までは
五五%前後で推移し、その後六五%以上となり、寛文十三（一六七三）
年には八〇%弱にもなる。それ以降高免が続くが貞享三（一六八六）年
になり、再び低下して五五%前後となる。この時期は検見取法で作柄に
応じた徴収をすることで毎年の毛付高率が変わり、特に災害年には明暦
元年のように大幅に低下した。そして、元禄十（一六九七）年の定免法
を機に毛付高率は四八%前後で推移していくこととなる。幕末期まで多

れた⁽²³⁾。村数七六村、浦数三五浦、家数七〇四七軒であった。

このうち分析対象とする尾川村・粉所村は入鹿組に属している⁽²⁴⁾。元禄十(一六九七)年当時の尾川村は、村高三一七石九斗九升八合、面積二四町七反九畝一二歩、うち田方は二七九石九斗四升三合、二〇町六反一畝六歩、古荒高三四石五升余で、毛付高は二四五石八斗八升五合、一七町九反六歩であった。畑方は三八石五升五合、四町一反八畝六歩、

表1 奥熊野地域概要

項目	数量(石)	項目	数量	項目	数量
奥熊野石高計	16791.992	村数	76村	地士数	70人
内入鹿組	3074.553	浦数	35浦	医師数	34人
本宮組	1728.424	家数	7047軒	山伏数	43人
北山組	3021.518	内本役	3502軒	座頭数	13人
木本組	3172.343	半役	1770軒	酒屋	76軒
尾鷲組	1807.072	無役	1775軒	池	31か所
相賀組	2198.573	網数	1069帖	村持山	251か所
長嶋組	1789.509	寺数	121寺	立合山数	58か所
本田畑	16791.995	宮数	124社	船渡場	5か所
田方	12082.0531	堂数	10か所	入津湊	6か所
田方毛付	9141.0212	納所蔵	79か所	狼煙場	18か所
畑方	4609.9419	材木役所	8か所	鉄炮数	460挺
畑方毛付	3850.5914	口前役所	34か所	通印	105枚
新田田畑	2192.2000	灰役所	5か所	異国船口時	158艘
本宮村伝馬役	78.992	扱仕入方役所	9か所	乗組舟数	163本
引高				異国船口時	297人
式夫米	264.7258	遠見番所	3か所	組合印口時	2965人
				異国船口時	41軒
口役米	172.0718	高札場	13か所	鉄炮打口時	
糠藁代米	25.2492	牢屋	3か所	異国船口時	
加子米	586.850	留山	11か所	話人足	
職人役米	47.700	御用木	824本	穢多	
竹年貢銀	136匁7分2厘				

尾川区有文書「元文三年奥熊野御蔵領大指出帳扣」による。
単位がない数量の単位は石。

古荒高四石余、毛付高は三三石八升二合、三町三反八畝であった。新田畑として田方を中心に五石五斗四升四合、七反九畝二七歩が開かれた。家数四四軒、人数二一人、牛二五疋、農業以外の稼ぎはなく材木の伐採を少し行っていた。

粉所村は、村高一〇石七斗一升五合、面積九町九反五畝、田方八五石八斗九升八合、六町七反一八歩、古荒高一六石余、毛付高六九石三斗六升二合、五町二反八畝一〇歩であり、畑方は二四石八斗一升七合、三町二反四畝一二歩、古荒高が四石余あるため毛付高二〇石七斗一升六合、二町六反一七歩となった。そのほかに新田として四石余が高入された。家数二三軒、人数一〇五人、牛数九疋、稼ぎは尾川村同様、森林伐採作業を少し行ったとある。

第二章 熊野地域の年貢賦課と動向

1 年貢割付

この章では、紀州藩本藩領の年貢徴租法⁽²⁵⁾や動向について検討を行う。本藩領支配の南牟婁郡にある山村集落であった尾川村の年貢動向を村に残された年貢割付状(以下、割付状とする⁽²⁶⁾)から分析する。尾川村の最古の割付状は正保二(一六四五)年のもので、次のとおりである。

〔史料一〕

尾川村酉ノ年免定之事
 一 高三百拾七石九斗九升八合 田畑
 西五ツ四分 此取百七拾壹石七斗壹升九合
 拾石六斗四升九合 内 三石五斗六升三合 田方 古荒年々荒
 式石式斗三升 内 七石八升六合 畑方
 式百六拾石六斗式升五合 内 九石六斗 田方酉ノ見捨
 拾壹石四斗式升四合 茶高 田方
 屋敷

域での徴租法が詳細に解明されている一方、牟婁郡地域の年貢研究は三重大学や自治体史等での若干の例はあるが、新宮領を除き相対的に少ない⁽¹⁴⁾。また、徴租法についての成立年代にも誤りが見られるなど修正を行う必要がある⁽¹⁵⁾。さらに個別村落内での割付と村請制の関係性も徴租法や負担と大いに関連していることから、あわせて検証する必要性を感じるが、地域特質が前面に押し出されて一般化されにくいために、研究そのものは少ない⁽¹⁶⁾。

本稿では、このような課題を念頭に置き、紀州藩本藩領の牟婁郡熊野地域を事例に、年貢徴租法や動向、納入状況、村落負担などを検証することで、紀州藩の地域支配の様相の一端を明らかにしたい。

第一章 紀州藩領の支配形態

1 紀州藩の成立と領地支配

この章では、年貢徴収に際しての藩政の様相、紀州藩の支配形態を検討する⁽¹⁷⁾。御三家の一つである紀州藩は、元和五（一六一九）年徳川頼宣が入封し五万五千石を領有して成立した。その支配領域は紀伊国（約三七万石）と伊勢国（約一八万石）、大和国の一部にまたがっていた。支配にあたっては、本藩領・新宮領・田辺領・勢州領に分け、新宮・田辺領には徳川幕府より付けられた家老（安藤氏が田辺領、水野氏が新宮領）を配置し、地方知行制を行った⁽¹⁸⁾。そのため本藩領・勢州領は、藩直轄地・藩士知行地に分けられる。近世後期の紀州藩領全体の直轄地・知行地の割合は、知行地約二五万石、田辺領三万八千石、新宮領三万五千石、藩直轄地二万七千石であった。

本藩領の奥熊野地域（現三重県域）は藩直轄地として木本代官所を設置し、代官の下に大庄屋制を採用して、組単位での支配を行った⁽¹⁹⁾。熊野灘沿岸の紀州藩本藩領では、「地土」と呼ばれた郷士が浦組に配置され、

軍役の一端を担っていた⁽²⁰⁾。また、伊勢国（勢州領）は「勢州三領」と呼ばれる松坂領（八万石）・田丸領（五万石）・白子領（五万石）に分割されていたが、それらは松坂城代に統括され、三領は人事交流も含めて本藩とのやりとりも盛んであった。支配機構は本藩領に類似し、大庄屋制を導入していた。本藩領同様「地土」と呼ばれた郷士が村落に居住していた。

以上のように、紀州藩の本藩・新宮領・田辺領・勢州三領支配の地域支配に関する様相は、本藩・三領の区別や直轄地と藩士知行地の棲み分けがあったが、在地支配には地土と呼ばれた中間層に軍役の一翼を担わせ、大庄屋を任命し、地域行政の一翼を担わせるなど藩としての本藩・勢州三領の統一が見られる。

正保二（一六四五）年、延宝五（一六七七）年には、それぞれ「定書」⁽²¹⁾を發布したが、これは紀州藩の農村に関する基本的な法令ともいべきもので、幕末維新期までこの効力を発揮した。

2 分析対象地域の概況

まず熊野地域の様相を把握しておく（表1）。元文三（一七三八）年当時の状況を記した「奥熊野御蔵領大指出帳扣」⁽²²⁾によると、奥熊野の蔵入地は総計一万六七九一石余、田方一万二千石余、畑方四六〇〇石余で、入鹿組・本宮組・北山組・木本組・尾鷲組・相賀組・長嶋組の七組で構成されていた。その田畑面積は一三六七町余、田方が八九五町余、畑方が四七一町余である。ただし、田方畑方とも永荒地・洪水荒地・地震荒地などの耕作不能地、田方には屋敷地・茶・漆・桑・楮作付地があるために、実際の耕作地石高（毛付高）は、田方九一四一石余、畑方三八五〇石余であった。これら本田畑のほかには新田畑が開発され高入が行われている。付加税としての二夫米・役米・糠藁代米・水主米・職人役米・竹年貢なども課さ

紀州本藩領の年貢徴租法と動向

（奥熊野地域を事例に）

藤谷 彰

はじめに

本稿は、紀州藩本藩領の牟婁郡熊野地域における藩政策としての年貢徴租法（以下、徴租法とする）をとらえ、村請制下にある村落への年貢割付・納入状況、さらには村人の負担を、藩・村・村人の三者の関係性を視野に入れながら検証することで、紀州藩の地域支配の様相を実証的に説明することを目的とする。

近世の藩財政・家中財政等を支えるものに百姓から徴収する年貢・諸役がある。^①年貢収入の如何が藩財政や家臣団への俸禄給付に直接影響するため、年貢制度を確立し、効率よく運用することは各藩ともに最重要課題であった。そこで、各藩では徴租法改定、引高見直し、諸役付加税の追加、納入方法改定、検地、新田開発などの年貢増徴政策を展開するが、時代が下るに従い、総じて幕藩体制の弛緩、貨幣経済の浸透など社会情勢の変容に伴い年貢高は減少傾向となり、必ずしも藩が意図するような方向とはならなかった。

ところで、年貢・諸役に関する研究は、幕領や藩領での徴租法研究を中心に多くの蓄積がなされている。幕領では、石盛に照応した畝引検見取法から、それに照応しない有毛検見取法への二段階の徴租法が存在したことの提示、^②百姓成立の観点からの徴租法の分析、^③あるいは定免制が

土免制の一形態であること、近世の搾取方式は大別して検見制と土免制の二種が存在することなどが明らかにされている。^④

また、藩領での徴租法の研究としては、萩藩・岡山藩の事例があり、萩藩の徴租法は検見取法から春定法へと変化し、幕末期まで継続していたことや、岡山藩では立藩当初から土免（春免）法を基本としていたが、寛文期以降は根取免（永定免・破免事項欠如）を採用したことが明らかにされ、検見取法から定免法への徴租法変更とは異なる形態であることが提示された。^⑤このほか、西国（九州）地域を事例にした研究、^⑥広島藩の徴租法の研究、^⑦北遠地域幕領の永高制による徴租法の研究^⑧もある。さらには、これら徴租法研究のほか石代納・廻米などの年貢制度を検証した研究、^⑨年貢の納入形態に注目した研究^⑩も見られる。

近年では、年貢割付状から災害を検証する共同研究も見られ、従来の年貢研究に留まらず天候や防災と関連付けるといった新たな観点からの分析検証が行われている。^⑪

年貢研究は、年貢制度の根幹ともいえるべき徴租法を検証したものが多く、幕領・藩領ともに徴租法が区々であったことが導き出されている。徴租法が区々であるからこそ、紀州藩の徴租法や年貢納入状況も含めて紀州藩の政策論として実証的な研究の蓄積が必要であると思われる。

本稿では、紀州藩を対象に検証を進めるが、紀州藩の場合、和歌山県

三重県総合博物館研究紀要 投稿規定

(2020年11月改訂)

1. 本研究紀要は年1回発行し、その内容は、動物学、植物学、地学、歴史学、考古学、民俗学、博物館学およびそれらと関連する諸分野とする。なお掲載報文の著作権は、三重県総合博物館に帰属する。また掲載された論文等は、三重県総合博物館のホームページ (<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/index.shtm>) においてダウンロードできる形式で公開する。
2. 本研究紀要に投稿できる者は、次のとおりとする。
 - (1) 三重県総合博物館（以下、博物館という）の学芸員および博物館の組織・運営に関与する者。
 - (2) 博物館が受け入れた研究員および研究協力者。
 - (3) 博物館の資料を用いて研究を行った者、または研究に使用した材料のすべてかその一部を当博物館資料として寄贈することを前提として研究を行った者。
 - (4) その他、博物館において適当と認めた者。
3. 原稿は未発表の論文、短報、研究ノート、調査報告、資料紹介のほか、これらの範疇に入らない原稿も受け付ける。原則として日本語または英語を用いる。
論文および短報の原稿は、編集委員会の委嘱による査読者により査読される。その他の原稿は編集委員による審査を受ける。
4. 原稿の枚数は、原則として制限しない。ただし、ページ数が多い場合は、編集委員会の判断により分割して掲載、あるいはページ数削減などの手直しを求めることがある。
5. 原稿の採否は、編集委員会が決定する。
6. 原稿料の支払および掲載料の徴収は行なわない。
7. 原稿の執筆にあたっては、別に定める「原稿作成上の注意 (<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/p0031300010.htm>)」に従うこと。
8. 著者校正は、原則として初校のみとし、その後の校正は編集委員会で行なう。初校への大幅な加筆、内容の変更は認めない。
9. 原則として別刷は印刷せず、PDFファイルで別刷に代える。
10. 原稿の送付および照会の宛先は以下とする。

〒514-0061 津市一身田上津部田3060

三重県総合博物館 研究紀要編集係

Tel 059-228-2283 (代表)

Fax 059-229-8310

e-mail MieMu@pref.mie.lg.jp

訂正

三重県総合博物館研究紀要第8号に掲載された下記の論文におきまして、一部誤りがありましたので訂正します。

米川弥寿代・田村香里. 2022. 2019年伊勢湾岸に死亡漂着したアカウミガメ *Caretta caretta* の消化管内容物による死亡原因推測の試み. 三重県総合博物館研究紀要 8: 31-35.

33ページ表1内, No. 6の消化管内容物の乾燥重量 gのうち, 魚類の欄:
(誤) 空欄, (正) 3.7 (94.9)

編集委員会

委員長：守屋 和幸

委員：中川 良平／大島 康宏／太田 光俊

編集協力：チェドリン・マガスパー

Editorial Board

Editor-in-Chief: Kazuyuki MORIYA

Editors: Ryohei NAKAGAWA, Yasuhiro OHSHIMA, Mitsutoshi OHTA

Assistance for editing : Chedilyn MAGASPAR

三重県総合博物館研究紀要 第9号

Mie Prefectural Museum Research Bulletin, No. 9

2023年3月24日 発行

編集・発行

三重県総合博物館

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田 3060

TEL 059-228-2283

FAX 059-229-8310

印刷所・製本所

株式会社アイブレーション

〒516-0017 三重県伊勢市神久 3-5-67

Copyright 2023 by Mie Prefectural Museum

Notes		
Some findings on the reproductive habits of the harvest mouse, <i>Micromys minutus</i> , in central Mie Prefecture, Japan	Kaori TAMURA and Akira SANO	1
The vascular plant flora in the Museum Field of Mie Prefectural Museum, Mie, Japan	Nana MORITA and Yasuhiro OHSHIMA	5
Avifauna of the Museum Field of Mie Prefectural Museum and its surrounding ponds, Mie, Japan	Reiya INAGAKI	17
The contents of the digestive tracts of the loggerhead turtles, <i>Caretta caretta</i> , stranded off the coast of Ise Bay in 2020	Yasuyo YONEKAWA and Kaori TAMURA	29
Regional characteristics of “Ozoni” in Mie Prefecture, Japan: Based on the results of data analysis of “Ozoni Project”	Miyo KADOGUCHI and Yoshihiko FUKUTA	35
What we learned from the survey data of the "Ozoni Project 2" conducted in Taki Town	Yoshihiko FUKUTA and Kaori TAMURA	45
The ruins of medieval temples and stone pagodas around the Kumozu River	Hirohito ITO	64 (21)
The land taxation system of the Kishu Domain	Akira FUJITANI	84 (1)